

大陸の夜明け

後藤朝太郎



* 0000714000 *

0000714-000

302.22-G65t

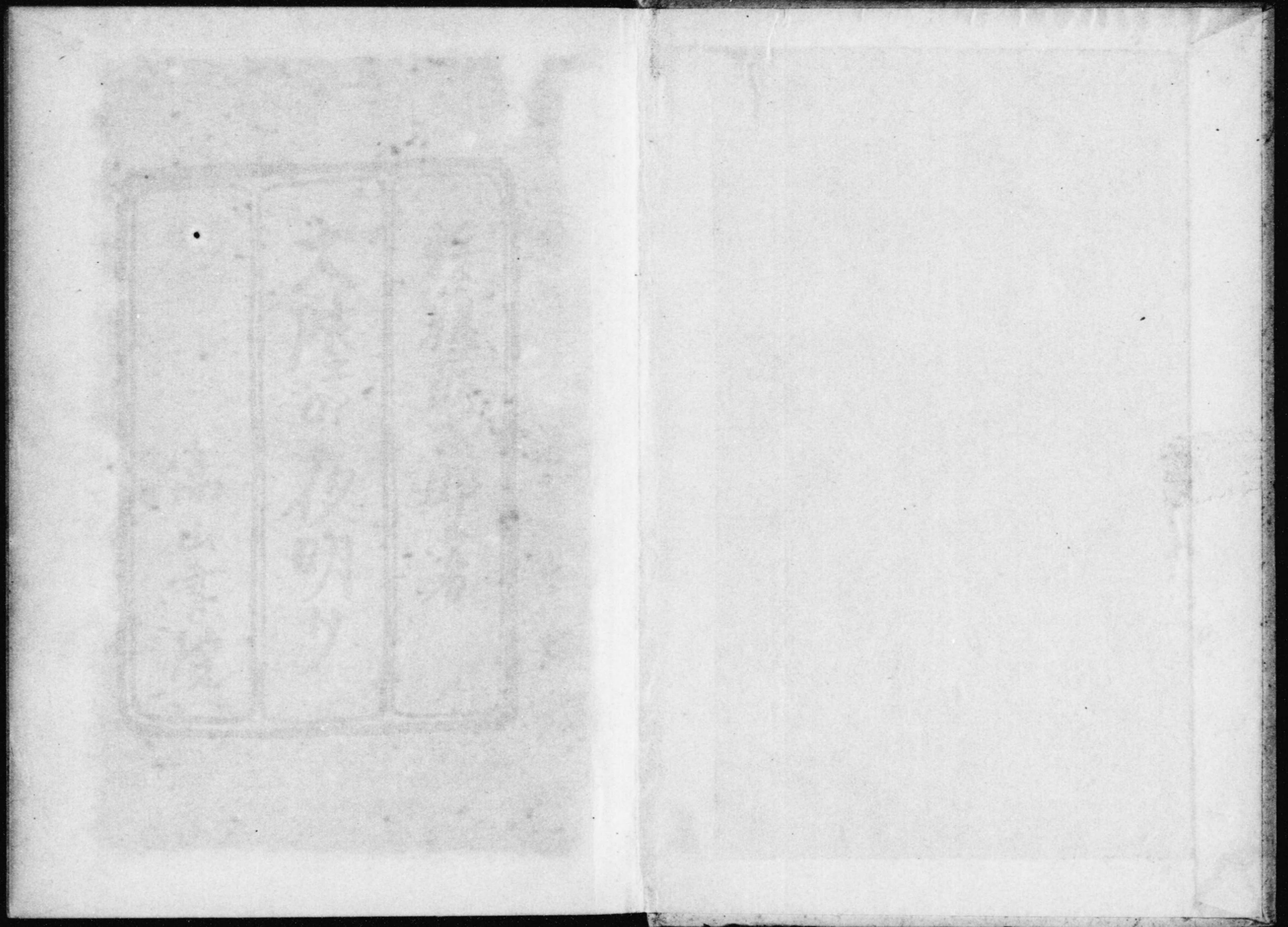
大陸の夜明け

後藤朝太郎・著

高山書院

1941

AAB



後藤朝太郎著

大陸の夜明け

高山書院

302.22
G65t



31893

「大陸の夜明け」に序して

本書は喜悲交々至り、變轉極りなき大陸舞臺の中から、夜明け前の支那を把握して、事變下の日本同胞に呼び掛けたものである。

蒋介石の機關紙たる大公報は昨年十二月念三日報道するのである。「夜明け前から小雨が降つてゐた。午前八時、重慶郊外の刑場に叛逆の徒、楊、歐、李の銃殺が執行せられた。見物の民衆は腕を叩き、口々に福民廠の名を悪用して、米、小麥を買占め、暴利を貪つた彼等の罪狀を罵り、投石する者さへあつた。續いて職權を濫用して抗戰資材を私慾に逆用した經濟部員陳肅元らの不良官吏が處刑せられた。邊りは隠慘な銃聲と硝煙とに包まれて、民衆をして蒋介石の思ひ切つた處刑に慄然たらしめた」とある。これは重慶の物資難を如實に物語る事實に關聯してゐる話である。立法院の經濟委員であり、重慶大學商業院長を兼ねた財界の要人、馬寅初の逮捕と、成都市長兼大川銀行經理、楊全宇以下八十三職員の大量銃殺と云ふ疑獄事件に之が端を發してゐるのである。重慶財界の元老であり要職を兼ねてゐたこの馬

寅初の捕縛は、馬が重慶の財政、經濟、交通部面の惡政を摘發し、首腦職員を罰せよと新聞紙上で攻撃を始め、民衆之に應じ騒然として當局を非難するに至つた爲め、蔣介石は馬寅初を「漢奸と聯絡抗戰中國の銃後攪亂を企てたものだ」と云ふ罪名で投獄したのである。處が馬寅初を軍法會議で取調べた結果、軍警署、檢察院、平價購鎖處、輯總處などの各機關首腦部に幾多の瀆職、收賄、物資壟斷、買占などの醜事實が次から次にと暴露して來た。その爲め楊全宇を始め、大川銀行重慶分行經理、歐書元や、合川萬福、湊糧行總理、李司山外經濟職員四十五名、軍需署員三十八名、合計八十三名が大量的に銃殺せられると云ふ騒動を捲き起したのである。（馬淵報導部長の最近の「重慶政權」に據る）

かう云ふ事實が外に洩れあちらの暗黒面が明るみに出されたからとて、直ちに相手の力を見極つてはいけない。奥の方ではあの通り必死になり背水の陣を敷いて、今尙侮ることの出來ない戰鬥力と精神的の粘りを發揮してゐる相手である。武力の戰鬥五年、尙抗戦がかくも續けられてゐるのだ、もう一と押したなどと云つてゐるものの、まだ英米の援助もあの通り増大して行くから、相當永く掛ると見ておくに越した事はない。

思ふに永久和平の確立には、何としても處理と新秩序建設の幕が順序として來なくてはな

らぬ。光輝ある日本の將來は、理窟を抜きにして善隣友好、經濟提携は勿論、精神的握手事項をいくらでもやり遂げねばならぬ間柄なのだ。だからこの兄弟喧嘩もいつかは雨降つて地堅まるの境地に推移せしむべきものである。

唯こゝには全局面の推移、新秩序建設の成るに當り、豫め手堅いところで相手方の民族性の根本認識を深め、その潜在意識、習性の特徴、風俗、思想、信仰、生活力等苟しくも善隣と和平の基礎條件となるべき精神方面を出来るだけ、眞摯な態度で掘り下げておくことだ。之が又銃後國民の心掛くべき大きな役割りでもある。

多年微力を致し、親しく大陸の水村山郭に丸腰で行脚してゐる自分には、民心把握のコツに就き聊か得る所があり、又自信のある所もある。今この絶好の轉換期に之を胸底に藏してゐるべきでない。大陸の夜明けを探らんとするの士は、自分と共にあちらの民心奥深き情味の中に這入り、人情に變りなき幽玄な境地を先づ知り之を解し、以て建設の福祉に至る關鍵とされんことを望んでやまぬのである。

昭和辛巳十六年六月十六日

南京より汪精衛主席入京の日

東京小日向臺僑居にて

石農 後藤朝太郎 するす

目次

裝幀新居廣治

序文

.....一

第一編

事變處理のゴツ.....三

支那はどうなる.....五

一、大陸の夜明け.....五

二、汪主席の己を罪する精神.....九

三、全支和平實現の努力.....二三

四、無爲にして化す.....一八

五、支那はどうなる.....二三

支那内地に親しめ.....二九

一、親善を妨げる最大の禍根.....二九

二、支那内面觀察の必要.....三三

三、新聞記事と歸朝者の言葉.....三六
四、民心離反の行爲を慎しめ.....三九

支那細民の心持.....四四

一、細民とお寺詣で.....四四

二、病み付きの賭博.....四八

三、傭兵にならんか.....五三

四、香烟趣味.....五五

五、苦兒引受所.....六〇

支那民族社會の見方.....六五

一、支那民族の考へ方.....六五

二、青年層の禮節觀.....七〇

三、民族の同化力.....七七

四、改むるに憚ること勿れ…………… 六

中國青年への要望…………… 六

一、中國青年の意氣…………… 六

二、日本の求むるもの…………… 六

三、個人的の接觸…………… 六

第二編 盛り上る力…………… 六

支那側の長期建設…………… 六

一、支那長期の二方面…………… 六

二、支那長期の特徴…………… 六

三、「徹底的」の支那見解…………… 六

四、長期の大陸民族…………… 六

新政府の裏を流れるもの…………… 二〇

一、民心を軌道に乗せるには…………… 二〇

二、奥地良民の心境…………… 二四

三、物價問題に注意…………… 二六

四、時流に乗る若き人々…………… 三三

五、見透しをあせるな…………… 三三

六、心強き悟り…………… 三三

事變處理と大陸生活…………… 三四

一、事變と支那の都鄙…………… 三四

二、大陸人の眞面目…………… 四

支那の行くべき軌道…………… 一五

一、時局下の支那民心…………… 一五

二、破壊のあとの復舊……………一六二

三、時局の括りに順應する民衆……………一六三

四、私心なき硬論……………一六五

第三編 起ち上る前夜……………一七三

支那難民達の樂土……………一七五

一、難民の歸還……………一七五

二、難民の生活復興……………一八一

三、南昌場末の市場……………一八四

春を呼ぶ江南……………一八四

一、日本の慈雨を大陸に……………一八八

二、漢口光華團の園兒……………一九五

三、江南の樵婦農女……………一九九

日本の土とならん……………一九九

一、廣東の鮑博公君……………一九九

二、路傍に日支童女の繩飛び……………二〇一

三、醫者を開業する康君……………二〇三

四、函館の藩蓮夫名譽領事……………二〇五

大陸の土とならん……………二〇七

一、支那に永住を目指す歸還兵……………二〇七

二、山下老師の風川學堂……………二〇九

三、中島成子女士……………二二三

四、重慶の空を思ひ出で……………二二六

建設の響き……………二二八

大陸の夜明け

一、郷土防衛に當る中國青年	二九
二、文化建設途上の柯君錢君	二三
三、カレンダー(曆)の普及	二六
四、支配料理の普及	二六
五、張君の南洋華僑往來	二二
六、捨身の要人	二三
七、建設に對する相互の心構へ	二七
結 論	二四

— 目 次 終 —

第一編 事變處理のコツ

いくさは腹で行く。立派な腹藝なのであるが、事變處理は更に一段と難かしい肚藝で行くの
外ない。だからと云つてそこで苦蟲を噛みしめたやうな難かしい顔をして臨んでゐたのでは朝
らかに行かぬ。寧ろ處理の態度は談笑裏にて終始したいものだ。お互に絶大の信頼を受けた大
人物が之に當つて處理するならば、結構談笑の間に取極めは出来る筈だ。大陸は廣く、奥が深
い。東京で朝六時と云ふ時分に、武漢は四時、四川重慶は夜明け前であるのだ。その廣い大陸
に昨今治安の復し、枕を高くして寝られる處もあるのだが、その代りまだ砲聲の聞えてゐる處
も相當にある。全局面から云ふとまだく東方未明、夜明け前の感じさへする。事實雲深うし
て處を知らず、蜀犬日に吠ゆる處があるのである。

處理遂行の上にはあちこち睨み合せなくてならぬ。聖業はどうせ長く掛る。難かしく硬直し
てゐたりなどしたら、ボキツト折れるかも知れぬ。談笑裏に和やかに行くならば無理がなくて
よい。又あとの寢覺めもよい。こゝで處理を進める上に一番大切なことは、相手が便宜主義か

ら出てゐる事をば真ともに受け、過信したりするよりか、先づ相手の心理と根深い民族性の奥底をよくよく諒解認識すべきことこれである。不自然な無理を包んだやり方をするとな久和平の工作に妨となつても爲めにはなり得ぬことを牢記すべきである。

支那はどうなる

一、大陸の夜明け

嘗て幾度か自分は中支那の舟の旅に上海から船出して長江を廻り、キャンイン（江陰）から鎮江、南京へと行つた事がある。そのとき大陸の夜明けを鎮江の江上で味ひ體驗した。長江の流水の音も鎮まり、東方の空はまだうす暗く、僅かに三か月の銀色の光が西の方金山寺の上方に懸つてゐるのである。白晝にはさすが輪船民船の去來繁く、揚げ荷、積み荷に苦力のとる拍子の音聲だけでも相當なものである。然るに大陸江上の夜分け前の静けさと來たら、それは又格別のものである。夜が明くれば、キラキラしてゐた斗星も光を失ひ、東方未明の黒い幕はここに切り落とされるのである。名残りの月は淡く金山寺の塔の空にあるかなきかの輪郭を留め、東の方焦山の茫乎とした鳥影を隔て、甘露寺の法塔は東雲の光を受けて薄黄金色に輝いで來る。江上の水流は金波を漾はせて眼を射る。曉靄の間からしきりと明け鳥の音が聞えて來る。あたり山川風物の眺めは輪郭をそろそろ判つきりさせて來て、こゝに舞臺は面目を一新す

るのである。

現在の支那は、恰度この長江の夜明け前をしのぼせるものがある。まちがひなく朝はやつてくるのであるが、未だ四邊がはつきりせず、どんな風景が浮び上るか判然としない。しからば四億の支那大陸の民草は内心何を願つて居るか。朝に晩に皆どうありたいと考へて居るのか。これは毎年正月市井の巷、民家の扉に掲げられる春聯の句を味つて見ると、明かに汲みとれる。そこには紅紙に墨黒ぐると祥光、室に満ち、瑞氣門に盈つなんて云ふのがあつたり、又天みな麗日あり、地、春風ならざるなしなどと云つてゐる。又良家の園亭邊りにある聯を見ると、半窓、月は落ちて梅に影なく、三徑、風來たつて竹に聲あり、なんて云ふ風流なのがあつたりする。

祥光満室

瑞氣盈門。

有天皆麗日

無地不春風。

半窓月落梅無影

三徑風來竹有聲。

かやうな文字を通して吟じ出だされてゐる心境には、かなり深刻なものが潜在してゐることを物語るものであつて、唯たんに縁起をかつぐとか、風流であるとか眺め去ることの出来ぬものがある。そこには深い民族性が表現せられてゐることが看取される。即ち前者は平和と幸福を希ひ後者は清雅な文化生活を希つてゐることが汲みとられるのである。

思ふに大陸新秩序の建設といふ偉業をやるに當つては、云ふまでもなく國民政府の政治の建設、經濟の建設、文化の建設、軍事の建設など云ふ者が含まれるのであるが、これらについては既に國民政府の政綱中に具體的の事が明示せられてゐるのであるからこゝには省いておくが、本書に最も關心を寄せてゐる文化建設の事については、夜明け方の大陸を語る上に、相當重要な役割を持つてゐることである。故にこゝに汪精衛氏の言葉をかりて左に之を挿入しておく。曰く、

文化の建設に關しては、歐洲文化の東漸以來中日兩國は何れも西洋物質に惑はされ、東方文化本來の面目を忘却してしまつたのである。これが原因となり、兩國民が抱く意識の上に越ゆるべからざる溝を作り、之が亦東亞民族の不和と抗爭を惹起せしめるに至つた遠因の一つとなつてゐる。今後に於ける中日兩國永久の和平維持の爲めには、双方共に國家の心理に根本的な一大改造を加ふべき要を生じた。その爲めに特に教育上に最大の注意を拂ふべきこ

ととなつた。今後一般青年に對しては須らく正確なる指導と宣傳を以てしかれ等をして中國の復興と東亞の復興が相互連帶の關係にあるものであること知をらしめ、且つ侵略主義と共產主義は中國及び東亞相互の最大の敵であることを判然認識せしめなくてはならぬ。それと同時に嚴格なる組織と訓練とを之に與へて、沈毅なる勇氣を養成しその勇氣を以て新中國及び新東亞創造の責任を分擔せしむべきであると考へる。こゝに余の東方文化と云へるは決して所謂復古の意味ではなく、東方文化の道義的精神を保持すべき事を云ふのである。之が發揚につとめしむると同時に近代科學の文化を吸収せしめ以て和平及び建國の大業に立たしむるにあるのである。戦争や破壊などに役立たしむる如きものであつてはならない。かくしてこそ民族の共存と世界の大同とが實施され得るものであると信するのである。云々

大陸文化建設の本舞臺に這入る前に汪精衛氏はかやうに述べてゐる。正に歐米文化の東漸以來、之に心酔して、泰西の物質に惑はされ、東方文化本來の面目を忘却してしまつた。そこを強くかう喝破されて見ると、一言もないのである。日本の事はこゝに暫く預りおく事とするが、支那民族文化については、明け行く建設事業を前にして深く考へ直さなくてはならぬ。こゝに大いに認識し直し、やゝもすると歐洲文明心酔のあまり、日本人の間に之に曇を掛けて之を雲の彼方に押しやり、そしてその本來の面目を見ることを欲しないといふものが澤山あつ

た。滔々皆然りと云つた風であつたのだ。今日はその時勢の浪の致すところでもあるか、西洋心酔からやゝ覺醒して、そして東方文化本來の面目は忘れてならぬと云ひ出し、或は之を掘り下ぐる處まで行かねばならぬと力説するものさへ出て來たやうである。

しかし靜かに考へて見ると、今尙自らその陣頭に立つてやらうとするものは誠に少ない。最近澎湃として起りつゝある日本主義、日本精神を唱道するものの中に、依然として大陸文化本來の面目を認むることを内心好まぬと云つたやうなものさへ相當にある。之は大いに注意すべき事柄であつて、大陸文化本來の面目を云々するにしても、立場は日本の立場、日本を更に大ならしむる所以に於いてすることは勿論なるも、今日このまゝ妙な傾向が續けられて行くならば、所謂日本精神の語も遂には大きい八紘一字の氣持に反し、抱容力なき小型のものになつてしまふ虞がないとしない。この點は特にこゝに指摘しておく。

二、汪主席の己を罪する精神

おとなりの中華民國、南京國民政府の大禮堂には今日どういふ空氣が漲つてゐるか。「新しい中國の歴史」の夜明け前から汪精衛氏たちはどう云ふ死闘を續けて來てゐるか。又その還都直後の昨年（昭和十五年）四月廿六日「己を罪する精神」にはどう云ふ反省と責任が指摘せら

れてゐたか。

南京の空には忠孝仁愛、信義和平の文字が大きく輝きわたり、汪氏の胸中に互譲互諒の精神の基礎として反省強調の熱意が躍起ち、誠意合作の要件としてお互の責任觀念の鼓吹が迫つてゐたやうに思はれる。この一年來の民國の國內情勢や國際情勢から顧るに「中國に於ける和平反共、建國の事は、實際に於いて中國獨立生存唯一の途なることが立證せられつゝあり。戰禍の長引くにつれて重慶に於ける將兵の心は離反し、青年は迷ひ、生産は激減し、物價は騰貴し、民衆の生活は一日ましに増し困難の度を加へつゝある」のである。

思ふに日本と支那との兩國は共に深甚の誠意を以つて條約を結び、基本關係を定めて世人の視聽を正してゐるのであるから、より一層努力に努力を重ね、以つてその條約の實行を期し、又その線に沿うて兩國の信念を固め、全國和平の實現を促すべきが當然の責務なのである。これ日支兩國が條約締結後に於ける絶對努力をなすべき方向でもあると思はれる。大陸の事は日本人の多くのものが考へてゐる如く、注射をからだに施した時のやうにその瞬間から效き目が現はれると云ふものではない。氣ぜはしくあせつて見たつて始まらぬのである。ゆつくり大きく見透しを立て、立てた以上は急がず騒がずふうわりがつちりと一步一步踏み堅め、確保して行くの外ないのである。南京政府自身に於いて、當の汪精衛氏はみづから先日も云つてゐ

るでないか。曰く。還都以來滿一ケ年、吾人の力量微弱なる爲めに、政治上に於いても、社會上に於いても未だ十分なる發展を見ることが出來ず、而も現在に於いて尙和平運動の前途に對しても疑を抱くもの尠ならず、幾多の國家も尙中日の合作に對して認識の缺乏を來たしてゐる。かういふ事は、誠に遺憾の極みである。去る日余は同志會仲鳴の追悼會に列席した際その弔辭を述べるとき幾多の人々が吾人を目して探險隊となしてゐるといふことを云つたが、中日條約の締結は正に茫茫たる大海に一個の輝く燈臺を發見したかの如きものである。今後に於いて吾々が絶えざる努力を積んで行くならば、必ずやこの燈臺の指示せる處に全面和平と永久和平に照らさるゝ最後の彼岸が見出さるであらう。吾人はその彼岸に到達し得る者なるを反省し、且つ固く之を信するものであると。

これは汪氏の謙遜なる挨拶と云ふよりは率直なる述懐であると評せられる。云ふまでもなく事變の見透しは尙前途遠く、近衛首相の議會に於ける答辯に於いてもさう云ふ意味の事が云はれてゐた。ところがやゝもすると歐洲の舞臺面の廻り工合やソ聯の様子にて云々と云ふものがある。勿論さういふ點も大きな力になつてゐるに相違ないが、支那自體に於いて全面的和平と永久的の和平の幕に這入る段取りと方向をとることの必要に迫られて來てゐる。こゝには從來の行き掛りから考へると、必ずしも武力問題、財政問題、政治外交問題と云ふことより、むしろ

ろ大きな軍事ミエンツ（面子）の問題に囚はれてゐる處に根強い理由があると思はれる。

有り體に云ふならば假令、歐洲問題、英米の援蔣行爲の事實がかりにないとして、獨力をもつて尙抗日戦争を続け得られると云ふかも知れぬ。これは事實の如何よりも面子の爲めにさう云はれるのだ。さらばと云つて英米の同盟が假りになかつたとしても、さう俄かに方向轉換がとられるであらうとも思へない。さう云ふ處に民族的の面子論が、存外強靱に働いて來るのである。そこいらに微妙な従來の立場、全國民に對する顔の手前があるわけである。それを急轉直下に臺なしにしてしまひたくない。つまり政治的自殺をこゝで遂げたくないと思ふことであるのだ。汪精衛氏自身が燈臺の指示する處に従ひ、絶えまなき努力を盡して難局打開に當らんと心に誓ひ、己が罪する精神に立ち返つてゐるのはそこに在ると考へられる。多少意地張つて考へるなら、四川省の方ではミエンツ（面子）ミエンツ（面子）と、面子のみの事が喧しくなつて來る。これも大體徹底して見れば何でも小さい事であると云へるが、當の重慶側としては、さうはたから考へるやうな譯にはゆかぬ。若しも汪さんの云はれたやうに「己れを罪する精神」で四川の方が自ら反省もし、又責任をも感じて呉れる時が來るならばそれは双方の爲めによろしい。中日共に又朗らかな黎明を感じる。いつまでも見透しがつかないと云ふのでは「夜明け」とも云へない事になる。色々とこぼしたり愚痴を並べたりして見ても仕方がない。

むしろ判つきりと己が罪する精神になつて、そして淡泊に大きく出ると云ふ事になり得るならば、誠に欣ばしいところである。戦禍が長引けば長引くほど双方によい事のないこと位は百も判つて居る事であり、香ばしくない影響の倍加されて行く心配も多分にあるのである。こゝには他の事はともかく、汪さんの己を罪する精神と云ふ事で反省を深め、責任を痛感すると云ふことが第一の急務である。之が引いては事變處理を精神方面から片付けて行く上に、大きな示唆を與へることになる。

三、全支和平實現の努力

總べてはこれからだ。大陸支那の新秩序の幕は切り落とされたのだとしてもこゝ一年や二年はまだ夜明け前と云つた感じさへする。それは全面和平の實現と憲政の實施と云ふ事が新國民政府自らの努力の二大目標となつて居り、之に對して着々實現の臍を固め、懸命の努力をしてゐる事の内容が判つて來たので、愈々明るくなるなあと云ふ希望を一般に與へてきたからである。憲政の實施に關しては、既に憲政實施委員會の手によつて着々進行中であり、五、五憲法草案も既に分擔審査から綜合審査の段階にまで到達してゐると云ふ事であり、一方和平の實現に關しては、今までは條約締結の時期であつたのが、只今はその條約の實行時期に這入つて來

たと見られるべきである。これは汪氏の言をそのまま採つて云つたわけである。更に汪氏は曰く、中日兩國は歴史的にも、地理的にも、現在の情勢がどうあらうと必ず和平緊要の事實は一般に容易に認められて來た。而も和平の可能性については、多くの人士は今尙觀望の態度をとつてゐる。その觀望の態度をとつてゐるものの心理は除去せしめなければならぬ。それは一に我れわれが全面和平の事實を具體的に持出すことによつてのみ出來ることである、云々と申してゐるのである。

かやうにして南京側の和平事實の實現についての痛切なる至情は之を十分汲みとることが出来るのである。又その誠意の存するところも判つきりわかるのである。之が全面和平の實現といふ事に立ち至らない爲めに、そこに測り知るべからざる苦心の存するものがあることが察せられる。その點に就いてはお互に感無量なるものがあつて、いつもそれが氣に掛つてゐる。憲政の實施進捗の事も勿論大事のことであるに相違はないが、全面和平の實現は更に更に、より重大なる意義を持つて居る。これに就いては、歐米關係に重きをおいて考へることも無論尤ものであるとするのであるが、然し元來は支那自體の高所大所よりの見識大理想の上からと、將來に對する民族自覺の上から考へて來れば、確固たる斷案が出る筈なのである。重慶側の知日派有力者たちの切實なる肚の底は那邊に在るのであらうか。英米依存のスフまじりの考は別

とし、その眞意は如何。その底流をなす腹からの至情は如何に動きつゝあるか。

こゝは表面化せられんとする政治外交軍事等の諸相を扱はんとするものでなく、又さうした方面の事柄を評せんとするものでもない。又それは始めから本書刊行の目的でもない。要は事變の今後の経過がどういふ方向をとつて參らうが、又將來の永久和平と憲政の實現かどういふ形をとつて推移して行かうが、その據つて來た底流なるものをどう認識すべきか。又その潜在せる民族性と東亞の自覺乃至は民族文化の意識の上にかなる觀方をしてゐなくてはならぬかの津筏を與へることを企圖してゐるものである。むしろここにはその全面的の和平來の實現が見られぬとすれば、一方に南京國民政府の明け行く空の輝かしい旭日を迎へて居ながらも、尙全國的には夜明け前の感じを禁じ得ないと云ふ心境に在るのである。この意味に於いてその民族性なり東亞の自覺なり、民族文化の特色なり、その長所短所なり、又日支双方の民族性の比較研究なりと云つた方面の事を豫め掘りさげて検討し認識しておく事はこれ亦善隣友好の立前乃至經濟提携の準備用意の上から云つても缺くべからざるものであると信ずる。

思ふに泰西の物質文化心酔の餘波を受けてといふ譯からであるか、上にも度々繰返して云ふ如く、東方文化本來の面目を忘却し、日支兩國民意識の上に實に超ゆべからざる溝を作つてしまひ、不和と抗爭を惹起するの不幸をさへ見るに至つた。これは必ずしも本來の文化の面目を

忘却したことが原因となつてゐるのでもあるまいが、ともかく、現實にお互がこの事變の渦中に投じてゐる事は返す返すも悲しむべき事である。そこで醜然大悟徹底して、東方文化を共有する弟兄の間柄たる人間味豊かな風格に歸るの外はない。お互同士の風格の渾然融合するものがある時は、その底流に於いて確かに相通するものがある。けれども事實は文字や言語や議論や利害などをもつてしては、決定しかねる極めて微妙な心の動きが、常に複雑に作用しつゝある。そのうちで最も大きい問題は上に云ふミエツツ（面子）と行き懸りの錯綜してゐる事實が、如何ともなし難い状態にまで進んで來た。禪僧の語を以つてすれば、事變は了了時、了時なしと云ふ事になる。つまり結局は時が解決する。時節が來るに相違ないのだ。ミエツツ（面子）論や英米関係もあつたものでない。況んや全國和平そのものもどうと云ふ事なくして、結局はそこに來る時が來ると云ふ事になる。大きく豫言することが許されるなら、さうした時が解決するといふ見透し以外に方法なしと云ふ事になる。

今こゝに思ひ出されるのは、事變勃發當初、昭和十二年の七、八月頃であつたか。東京丸の内日本俱樂部の樓上で、芳澤謙吉氏と偶然會ひ、出あひがしらに芳澤さんから「愈々始まつたね、今度はどの位續くと思ふかね」との問ひに對し、自分はそのとき直感のまゝ、「先づ十年は續くことせう」と答へたのを記憶してゐる。すると芳澤氏は、

エエ、ジフネン（十年）！

とさすがの氣の長いと云はるゝ先生も意外の氣持が胸の底までこたへたと見えて、やゝ驚かれたやうな面持ちをしてゐられた。今にして見ると汪精衛氏自身も全面和平の實現の思ふやうにならぬ事を述懐してゐられるが、そこに思ひ併せ自分自身にも全く感無量なるものがある。

こゝには色々と云ひたい事も澤山あるが、要は全支にわたる和平實現の努力を目標としてゐる汪精衛氏の涙ぐましい心境について、之を觀望してばかりゐては仕方がない。出來るならば全支の和平實現までの間に於いて、こちらでは和平將來後に處するため、大陸民族の認識を深め、又之を再認識する心構へを強調することが我が國の現状に於いて特に必要である。國府の要人だちや乃至はあちらの親日派の人々、又は譯の十分わかつた人たちの間では、如何に和平實現の事に對する努力が費されてゐるにしても、こちら側に之を解し得るだけの用意が出來てゐないときは益々和平實現後に、來たるべき善隣友好乃至は經濟提携の心構へに於いて、全面的の安全性が與へられない事になる。又信頼性を發揮させることが出來ない事にもなる譯だ。さういふ點に幾多の杞憂があるから、出來るだけ日本としてはあの大陸人の民族性、習慣風俗、民情思想信仰、趣味嗜好と云つたものに至るまで十二分に理解することが絶対に必要である。

かやうな精神的方面にわたる心理研究のことは云ふまでもなく、全支和平の具現化の見られ
たとき、泥繩式の俄か仕立てなど思ひ立つても出来るものでない。事のいまだ成らざるに當つ
て、すでに用意だけは決して怠つてはならない。これは汪精衛氏の全面和平實現の努力と呼應
して、自分共もその用意を一般人にしてみらふやう促進させたいと云ふ微意を持つてゐる。況
して多年東方文化本來の面目紹介の爲に一臂の勞をいたしてゐる自分どもにとつては、この事
は大陸の夜明けと目せられる昨今に於いて、一人でも多く認識理解の度を深めておいてもらひ
たいと念するわけである。讀者もかうした著者の微衷とするところを察知していただきたい。

四、無爲にして化す

別段こゝに老子や莊子を禮讀して夜明け前の大陸を説かうとする譯でもないが、自分の乏し
い體驗からや先哲の教ふる處などからよく玩味して見る。大陸の事は或る程度までいつも自然
無爲にして化す式の襟度が爲政者側に必要缺くべからざるものとなつてゐる。これは治者側に
立てるものに必要であること云ふまでもなく、指導階級に立たんとする者、又苟しくも自分で
指導の方向を案出せんとする人たちにとつて最も大事な事である。

由來、支那の人々は身を立つること、生活を營むこと、入るを計つて出るをきりもりするこ

と、かう云つた經濟理財の事にかけては人一倍巧みであり、抜かる所がない。人に厄介になら
ず、自分で好きなやうにやつて行けると云ふ自信を持ち、之を實行していく上に並みなみなら
ぬ底力を有してゐる手合だ。否、賢明な連中のみの居る老團なのであるから、下手な指導者
氣取りの言など却つて逆にやられるかも知れぬ。ともかく生活力の旺盛なことで、その粘りの
内に充實したものと有つてゐる事にかけては、到底理論家や机上の立案者などの及ぶところで
ないのである。いつも所謂規則企畫なんかを超越してそのうは手を行つてゐる連中なのである
と評してもよい。だから色々面倒な小喧しい法律など連發して、その軌道に乗らせようとして
見たつて唯顔を反向けられるだけのもの。それ以外何物でもないことになる。云ふまでもなく
大陸生活に慣れてゐるものは銘々自分自分に都合のよい生活ぶり、身の振り方をしてやつてゐ
るのである。而かもあの變轉常なき世相の中に在つて泳いでゐるのであるから、他からあれこ
れと指圖を受け押付けられるのは五月蠅い事の限りだ。眞ツ平だと云ふ氣持を増させるのみで
ある。自由に氣の向いたまゝ、而かも方向を誤らぬやう自分の軌道を歩み續けて行かうとして
ゐるのみだ。そこにはかなり強い信念が働いてゐるものと見られる。世の中が懲り懲りさせら
れ、世相を演じてゐるときでもさうなのであるが、又順調にいつてゐる時もきうなのである。
つまり不羈獨立の氣に充ち満ちて渡世してゐるといふのが大陸支那の實相である。そこを先づ

心に銘しておくべきである。

次に、然らばなぜ支那大陸にはかやうな根強い民族性が住民一般の心底に植付けられてゐるのであるか。これは幾千年來の大自然の影響を受け、それが土着民の心理を形成するに至つた爲めであると云へる。と云ふのは早い話が中支一帯をあるいて見ても直ぐ判る。湖南湖北にして、江西にして、あの長江江邊には地圖面に見えない幾多の無数の湖沼があり。所謂澤國をなしてゐる。七つ八つの湖水が長江江流の水溜め池として存在してゐるのだ。これは遡江途上大冶、黄石港、蕪州、黃州、あたりを一瞥するとそれだけでも首肯せられるところである。處が盛夏長江江流の増水期となつたらそこはどうであるかと云ふに、初夏の頃から十日目、二十日目、三十日目と日を追うて益々増水して来る。そして二つの湖水が一つとなり、又四つが一つとなり遂には八つが一つの大湖となると云ふ風で、湖水と湖水とが互に繋がり、日本の四國か九州ぐらゐもあらうかと思はれる海の如き一大湖水が出現する。

かうなると田夫は鋤鉞を棄て、舟を漕ぎ出し釣を垂れ、老農變じて漁翁となると云つた變り方をする。冬の芋屋が夏の氷屋になるのは日本にもよくあるが、大陸にはそれがもつと更に徹底してゐる。しかし湖江の氾濫時に際しては、さすが慣れつこになつてゐると見えて、人民はやれ大洪水だから堤防を築けの土囊を急に拵へのか、土木課長は何をしてゐるのか云ふ神

經質の騒ぎをするものなんかは居ない。一方水の増して来るのも悠々たるものである。ゆつくり来るのだが、他方住民百姓側でも平氣の平左。それこそ、何をくよくよ川端柳、水の増すのを見て暮らす式に呑み込んでやつてゐる。漁樵問答の畫題がいかに風流に眺められるのもその間の心境が描寫されてゐるによるものと見られる。百姓だちはまさかヒマラヤ、西藏、青海の奥の雪どけに、四川、雲南、貴州の増水降雨の爲めの大洪水だなどといふやうな理由はわからぬ。唯奥が降つてゐる霖雨の爲めだらうぐらゐの考を幾千里の彼方に投げやるだけの事である。しかし秋に這入つてさしもの江流が増さなくなり、そろそろ減水期が近づいて來るとき何を云ふかといふと。まあことしの珍らしい大洪水はよかつた。全く年々歳々に要る肥料もどうかと思はれたが、あたりの田圃耕地と云ふ耕地が、お蔭ですつかり肥沃の地となつた。水が有機質を多量に含んでゐる土壌を押し流して來て呉れた。その爲めに又こゝ二十年三十年といふ間は當分肥料の必要もなくなり、大助かりだよと云つて喜ぶ。

澤國の水の作用は有りがたいものである。ナイル河畔の田畑と同じわけで大洪水といふ自然の作用はむしろ感謝の目で見られてゐると云ふ譯であるのだ。それには土木課長も要らねば堤防を築く豫算もいらぬ。自然無爲にして流水のなすまゝに任かせておいてよろしい。萬事は水が解決して呉れる。長江の流れに任かせておくだけでよいのだと來る。まさか任せきりでもあ

るまいが、天地の自然の力に勝てぬ。人力もて抗して見たつて始まらぬ。この考は例のママフ（なるやうにしかならぬ）メイファーツ（没法子）の諦めから來てゐるのであるだらうがしかしそれによつて神経を尖らすことはせぬ。結局無爲にして化するの天の原則により大きく高くとまつてゐる。漁農百姓がそれであるから、爲政者も亦そのコツで以つて臨んでゐる。これ以外何物も要らぬといふのでもないが、大體はこのコツを體得して當る。すると民心は落着く。つまり心は天と與に遊ぶと云ふ方式なのである。天の徳を體得してゐるものはこの大きな腹藝が打てるのである。

支那には勿論百鬼夜行の舞臺面もあり、色々のテロ團もあり、物凄いや方を云ふなら地獄そのまゝの世相が出現してゐるとも云へる。氣持の悪い方としてはそこに神國日本などに見られぬ、又到底想像の許されぬ厭やなことを演ずるものがゐる。それかと思ふと善い方を云ふならば、こそ日本國內で測り知られぬやうな大徳、天地と融合してゐる桁外れのものもゐたりする。その兩極端の存在は大陸氣候の存在するのと同じ譯である。大地から生み出さるゝ所の天の所爲なのであるから、こればかりは何とも云へぬのである。こゝに法治國の常識で律することの出來ぬものが存在し得る譯である。こゝは特に讀者に認識を深めておいてもらはねばならぬ重要な點である。

大陸支那の舞臺は、いまや全面和平の到らんとする夜明けであらうと、その後に来る朝であらうと、白晝であらうと、無爲にして行くコツは變らぬ。又變る道理もないのである。大陸生活に幾千年來慣らされて來てゐる住民は、北は北なりに南は南なりに、大自然の力の下に適當に鍛はれて來てゐる。いくら三歳の子供小孩も、民族的に自覺し抜いてゐるのであるから、よく牢記すべき事である。

事變處理に這入るに當つて、豫め用意しておくべきである。

五、支那はどうなる

支那はどうなる。この問題は實に當面の大問題であり、又永久日本の運命に拘はる重大な問題でもある。事變の當初には色々と諸説が出てゐたが、五年目の今日この重大時期に至つて天下は鳴りを鎮め、口にマスクを掛けた形である。蘭印、佛印、日ソ、英米などの論議はいくらでも續出してゐるが、中心の支那に關する言葉の發表はどこともに鳴りを鎮めた觀がある。

日支兩國は不幸にして干戈を交へてこゝに五星霜、兄弟牆にせめぎ合つてゐるのであるが、一日も早く和平來復を念とし、東亞自覺の本全に歸るべきである。汪首席の言の如くんば、支那側の民心打診など俟つまでもなく、大陸雰圍氣の方向が那邊にあるかは略判るのである。支

那としてはその民族性の自覺から、執拗なる民族運動をこれまで続けて来た。三民主權の主張に力瘤を入れ、その旗幟を振り翳しても来た。がとかく英米に偏り過ぎて近い日本とガッチリ組むことを等閑に付してゐた。これは日本などと舐めて掛つてもよいと云ふ氣分があつたからである。と云へる。同時にこれについては日本側にも多少同じやうな責のあつたことが指摘せられ、この度の事變により、その間の反省すべき認識不足の數々か悟られて来たやうである。これはまだ十分完全にと云ふ處まで来てゐないにしても、大分深刻にそこに氣のついて来たものがある。支那がどうなるかと云ふ問題は、牽いては日本がどうなると云ふ運命に係はることなので全くその運命的相關々係に在るのである。

既に今日のこの事態は支那を差し置き日本だけが獨り榮えて行けると云ふ道はなく、又さう云ふケチな考を大日本の國民は持合はせてゐないのである。同時に又日本を差し置いて、支那だけがうまく榮えてゆく道理もあり得ぬ。

日本側では近衛聲明にもある通り領土もいらす償金もとらぬと云つてある。この抱負、理念が、那邊にあかは云はずして汲みとれる筈である。固より支那は昔から大國を以て自任して居る。國土のひろく民草の多いところであるから、自然無爲にして治まると云ふ聖賢の道を理想となり、鼓腹擊壤の世を頌するを民の聲となすのである。又民族文化の麗はしくその本來の面

目が發揚せられるならば、世界無比の聲價を揚ぐることも出来るのだ。が、しかしそれならばと云つてそのみでは東亞永久の和平確立の基礎が出来るかと云ふにさうは參らぬ。古の隋唐あたりの時代とは異なり、今は近代國家として世界の表面に乗出し、國際情勢に強く毅然として對處して行く上には、そのみではどうにもならず危険である。いつ何時又もや侮りを受くる事があるかも知れぬ。これは十九世紀の中葉阿片戰爭によつて受けたあの苦い經驗からでも判るわけである。爾來百年の間、内憂と云ふよりもむしろ外患の爲めに、著しく漢民族の誇りは毀損せられてゐるではないか。

古く先秦の頃から支那は蘇秦張儀などの立ち廻り工合がとても羽振りのよい處を示し、爾來いつも以夷制夷の故智に倣ひ、何かと云ふと遠交近攻の策に出ることを得意の慣用手段となし、之によつて一時を糊塗する態度に出てゐた。しかしこれは自ら武力の充實せるもののない處から人の禪を當てにするの類である。自ら願て足らざるを蔽はんとする窮餘の策のやうにもとられる。こゝには過去を云々せんとするものでない。過ぎたるは咎めない。支那は今後どうなると云ふ東亞の大問題を控へていつまでも舊體制の慣用手段にのみ終始し、而も兄弟喧嘩、お家騒動に浮き身を棄してゐるべき秋でない。

支那がどうなると云ふ問題は支那自體の問題であるやうである。けれども同時に日本の存亡

の問題でもある。日支の問題は双方お互の問題であつて車の兩輪の如き關係にあることは云ふまでもない。英米の舊體制下に懷都合から來てゐる所の因縁にほだされて、若しもいつまでも目が覺めず、而かも日本を共同の敵性國家と見て衝突抗戰を續けてやめぬと云ふことであつては、結局東亞本來の尊き文化の面目が泥の中に投ぜられてしまふ。それでは全く五千年の燦然たる東方文化を殺してしまふ事になる。舊體制下の英米の爲めにそこまで文化的自殺を遂げるなどは古聖賢の靈に對しても相濟まぬこととなるわけである。反省一番、意を先づこゝに致すべきでないかと思ふのである。

東方文化の面目保持と云ふ大きな金看板の下に眞に日支兩國が本格的に提携し、互に肚を打ちあけ互に信じ互に相許す間柄になるならば、そこで双方が共に東亞の新秩序建設と云ふ大目標に向つて進むことが出来るのである。その間何も故らに英米如きものを阻害することはいらぬ。日本と一本建の態度に本格的に支那の肚がきまり、そこに本腰が這入るならば、その餘力諒解の下に英米を容るゝは可なりである。英米と日本と二本建てと云ふ事であるならば、そこには新體制は望めなくなり、東亞の安定は期しがたいことになる。英米としてもあの法幣の價格援助に又武器援助にとあらゆる援蔣行爲を續け來たり、時には日本に當てつけ、面當ての出方までやつてゐる行き掛り上、いくら何でもすぐあつさり支那から後退を宣する事も出來に

くいかも知れぬ。その邊は微妙ないきさつがある事と察せらるゝ。その點は或る程度までおほ目にみ、見て見ぬ振りをするだけの襟度が必要である。餘り日本式に潔癖性を發揮して殊更刺戟する如き末梢的のいやがらせをしたりするのはよくない。かゝる場合にはどこまでも大局を見誤らぬやうにして大日本國民の襟度を示すべきである。

汪主席が努力を惜まず南京に在つてあの通り日夜精進しつゝある全面的和平の實現と、憲政の實施とは、支那全局面に波紋を投げつゝある。部分的ではあるが、確かに朗らかな曉鐘の感じを覚えしめてゐる。全支は只今黎明曉天の感じを持たせらるゝまでには尙相當のいきさつ困難に遭遇することが豫想させられる。確かに全面和平實現の前には厄介な邪魔も這入るであらう。一進一退遅々として渉らぬ場面も見ることであらう。歐羅巴の方の戦局如何にもよること勿論なるが、それは日本が氣にするほどのものでないと英當局は苦しい云ひ譯をしてゐるやうである。しかしその云ひ譯を額面通り受取つて見た處で、相當まだ抗戰の方はやむに至らぬかも知れぬ。たとひ抗戰は止むときが來たとしても、總力戦といふ立前から來る外輪的の經濟戦は終結に至るなどとは思へぬ。ましてその餘波として現はれる支那の幾多の内憂外患は、さう簡単に姿を消して了ひさうもない。これらが漸次片付く途上、支那として持つべき一大目標は東方新秩序の建設と云ふ旗幟の下に日本とガッチリ組み、表裏一體、互に信頼提携をすること

である。こゝまで行くには大變な事だと思ふ見方も出来るが、又東亞自覺の本全に立ち返るなら案ずるより産むが易いと云ふ氣もするのだ。自分はさう信ずる。だがそれは單なる要人相互の閃めきと云ふことだけでなく、又一般青年層なり民衆なりから來る盛り上つた力を背景にして、大成された結晶でなくてはいけない。つまり民心を把握した上に完遂された心と心の提携でなくては本格的のものでないと云へるのである。

この考へ方は事變處理に這入る這入らぬに拘らず、支那がどうなると云ふ重大問題を考へるとき、時局の推移に視線を向くるものは必ずや心靜かに思ひを致すべき點である。四川に居る要人たちもこの點に氣分を向け變へ、曉靄の中から朗らかな明けの鐘をお互に聴くと云ふ禪味を持つて東天を望まれたらどうかと思ふのである。

支那内地に親しめ

一、親善を妨げる最大の禍根

支那内地を遊歴して奥地の事情を調べて見たり、燕山楚水の境に入りて田園風物に浸つて見たりするのは自分の年來の趣味である。人は奥地に這入つた話でもすると直ぐ、危険はなかつたか、大丈夫であつたかと身の上を案じてくれる。支那内地に對する本當の認識を持たないものは皆その點を恐れ、不安の念にかられてゐる。全く日本人は支那内地と云へば物凄い處に違ひないと相場をきめてゐるやうだ。武器一つ身につけてゐない自分のからだに誰れが危害を加へたりする氣持ちになり得るであらうか。

水村山郭酒旗の翻るところ、老農の橋上に鋏を肩に語りあつてゐるところ、水牛に跨る牧童の、楊村の土手をたどつてゐるところはいつも田園趣味の豊かに、田舎獨特の詩味があふれてゐるのである。古人の風懷を偲び愛し、文人墨客のあとを訪ねて、心のゆくまゝに、村から村へ運河から運河へと巡遊してゐる身には氣にわだかまりのなく、物の一ヶ月や二ヶ月はすぐ

經つてしまふ、かうした心境で支那の奥地を取扱ひ、國境を超越して人の國とも思はず、こなしてあるいてゐると云ふと、おのづからその行くところとして可ならざるはなく、一向は不安など云ふことをこちらに感ずることはないのである。

それと云ふのが、元來支那の奥地風物を味はふことが好きなたちであるからでもあらう。目に見耳にきく風物の全體に同情と親しみを覺えて來るのである。支那のことに同情一つ持たず、何ん等の親しみを覺えないやうな者であつたなら、いくら賑やかな都城に這入つても面白くなく、城内衙門の前に着いたところで心安らかに歩を進めることは出來ないであらう。理解一つ持たないものは、たとひ城門を入り、大街と大街の交叉點や路次の曲り角などを通り過ぎるときでも不安の念に堪へられぬであらう。少しでも心にビクビクする處がある人ならば、城内に買物一つしに行く氣にもならぬのである。日本人は武器や兇器、仕込杖を持つて支那の土地をあるくばかりが能事ではない。手に刃物一つ持たないで、否さう云ふ考はずつかり忘れて平氣で城内でも片田舎でも自由にあるけるだけの心持になるべきだ。それが出來なければ大陸人との國民外交など實際望まれもせぬ。手に何かいつも翳してゝなくては、支那との交渉の出來ぬとか、田舎一つあるけなとか、城内に踏み込めなとか云ふやうな情けないことで一體どうする。それでよくも大きな親善の提言など人の前で云ひ出せたものかと云ひたくなる。と

ところが今のところは、全く残念ながらまだ個人個人の心持を打割つて見ると、大抵のものは田舎の奥地は固よりのこと、都城に入るのでさへ恐れ怖がつてゐるものがどつきりある。麻雀一つ買ひに出掛けるのでさへ、支那ボーイをやつて、自分みづからは足を運んで行かうと云ふ氣がせぬ。立派なうちの奥様たちがそれであるのは固よりであるが、主人公自身にしたつてそれである。そのときその主人公の本音をたゞいて見ると、曰く、命がまだ惜しいからなあと來る。

丸で日本人の支那社會を見ることは、全く殺人犯の人間の群居してゐる處だとしか考へてゐないものらしい。臺灣の生蕃村だつて今はさうでなく理蕃事業が行届き、自分たちは生蕃と一緒に寝たことがあるくらゐの時勢となつたのである。然るに支那の世相を目するにこの通り人食ひ人種か何かの集まれる處のやうに見てしまつてゐる。これは恐らく食はず嫌ひをしてゐる爲めでもあらうが、實に何たる認識不足なことであらう。ロシア人とか佛蘭西、英吉利、アメリカあたりの連中でも、かなり片田舎に這り永年その仕事にたづさはり、運河の便のよい處に巍々たる建築をして、かなり呑ん氣にやつてゐるのを見る。一番近い又一番親しくしなくてはならぬ日本人が、なんと一番之を毛嫌ひし一番又之を恐れ怖がつてゐるのである。實證に照して云つて見るならそこにいくらでもその實例がある。而かもこれが日本人のインテリの方に却

つてあるのであつて、支那を恐れてゐる氣持ちは全く不可解と見られるほどのものである。そこに尾に鱒をつけて針小棒大に云ひふらせる徒もあり、市虎三傳の慣用方法をとるものもあつたりなどして、ともかくも之を人間の踏み込む可からざる者ときめてしまつてゐる。支那ばかりでなく滿洲國の王道樂土を謳歌せんとしつゝある境地に於いてさへ、尙この種の心理状態は相當に根強くはたらいてゐる。これは用心の爲めの用心から出てゐる心持を云ふのであらうけれども、遁げを張る爲めのこれが遁辭なんかであつてはならぬ。そこに氣持の上の疎隔が支那の國土からとつて去られぬとすれば、親善融合の徹底など百年河清と云ひたくなる。

二、支那内面觀察の必要

支那の人はまた支那の人で云つてゐる、日本は恐ろしい國である。領土的の野心など毛頭ないのだと日本人は云つてはゐるが、これは怪しい云々と、見てゐるので疑の念の絶ゆるときがない。おくびにも出さぬ位慎んでゐる日本人に對してこれであるのだ。日本人が之を言はぬやうにしてゐればゐるほど、却つて支那側から又餘所の國からもそれをにほはせるやうな意味のことを云つて行くらしい。そこでいくら日本側自體が聲明にこれつとめたとしてもどうしても之を信じないものがある。矢張りまた滿洲國の二の舞かと云つた風に云ひふらすものさへあ

る。日本としては迷惑至極なことであると考へられるのだが、その處の感情が嵩じて來て取り去られぬのだと云ふ。日本人から云はせるとそれが不可解だと云ふのである。

物はお互の感情の如何による。丁度日本人が、支那内地の實情の恐ろしくもどうもないものをつかまへて、頻りと恐ろしいものときめてゐる見方をするのと同じわけだ。日支双方がそれ／＼それときめて互に恐ろしいとしてゐる處は好一對になるのである。自分だから見るとどちらもどちらだと云ひたい。お互に取り越し苦勞をして氣に病んでゐるとでも云へるであらう。なぜ今少しくお互に淡白にほがらかに考へるやうにせぬのであるか。そこが不可解と云ひたくなるのである。

支那内地のことは、人の話やニュースを集めて見ただけでは本當に徹底した實情は汲みとれぬ。一應の大體を感知するには自分で行つて見なくともよろしい。大抵人の話や報告で想像がつくと云ふものもある。これも元來その素地の出來てゐる人であるならば、一を聞いても五も十もさとれるであらう。ところが支那の實情なるものは一つの事柄がその人の見やう考へやうによつて黒くも見え、又白くも見える。又赤くも青くも見える、七面鳥の頭のやうにどうにでも、變つて映するのである。されば支那内地の如き奥に這入つた話と云ふものは、人の話は参考になるだけのものであつて、決して最後のものではない。最後のものと云ふ斷定は、自分

で親しく見、一々の場面を體驗して見ない事には判らぬのである。それで危険であると云ふ見解を持つてゐるものは、領事館あたりの人も大抵その意見であつて、自分に云ふには、内地は危ぶない。内地の田舎はとても歩いてもらつては困る。外人の旅行禁止區域で先達まであつたのだから奥地に這入ることは止めてもらひたい。云々

かう云つた話はよく支那各地の領事館を訪ねたとき、聞かされる言葉である。事なかれ主義の大事をとる役人のあたまからはそれが一番安全なのである。安全第一主義をとる役人ならばさう云つて中止してもらふのが一番氣らくでよろしい。その代り本當の話、實情に即した事などは判らぬ。いつになつたら旅行が出来るか。深入りしてよいか判らなくなる。この次はこちらがうまく行けるかどうか、それさへ判らなくなるのだ。どこもこゝも危険だ危険だ！では殆んど奥地には足止めを食つたことになるのだ。それが本當に危険に直面してゐて止むにやまれぬとき、今一つは唯そのニュースのみからさう云ふ大事をとつておくの外ないと考へられるときと、この兩方の場合がある。問題を起されたら困ると云ふ考から、多くの場合に領事から止めてもらひたいと來るのである。従つて領事そのものゝ口からは先づ大丈夫ですよ。奥地に進まれても。と云ふ如きことを聞くことは減多にないのである。これがどれぐらゐ内地と役所側とで、危険なところにしてしまつてゐるか判らない。役所としては輕卒な事を發表するわ

けにはいかぬ。唯一にも二にも三にも大事をとり、危ぶないですからの一點張り。そして何等その實情に即した事を自分で踏査してしらべて來ると云ふ處までやるのではない。役所の云ふところを過信する習慣になつてゐる日本人はそこで必ず云ふ。即ち、

「命までかけて危険な處に深入りする考で來たわけではない。領事殿がそこまで仰せられるなら此の度の旅行は田舎入りを取り止めにしませう」

で引きさがつてしまふ。かくの如くしてつまらぬ流言蜚語が市虎三傳の流儀で更に大きく傳へられるやうになる。とても江南の奥は踏み込めたものでないの、匪賊が跳梁してゐると云はれて來る。本當の事を云ふと、領事自分はその管轄内の土民インテリなり親日派の連中なり、その他同趣味の青年なりを訪ねることにして、そして交を求め又舊知には舊交を温めるつもりになつて出掛けて見ればよいのである。するとその副産物として、きつと、どの地方には危険があるとか、又その危険の程度と云ふのがどの程度であつて、實は何でもないことなのであると云ふ風なことも確認されて來る。雇ひの支那館員あたりが、流言蜚語をまに受けて歸り報告して來たくらゐるものを信じ、之を以つて云々されるやうなことであつてはとんでもないことになる。危険危険と日本人は全く云ひ過ぎる處がある。と云ふのは領事が自分の田舎に入りたくない口實に之を利用したり、又首の安全を保障したいが爲め、官僚式にさう云ふ事と利用し

て云ふやうなものはないとは限らぬ。かやうな事があるとしたら大變なことになる。これも領事そのものに趣味でもある人であると、植物の採集になり、考古發掘の餘事になりかこつけて、そして豫期以上の收穫を得て來られる。かうした領事は又、人に之を足止めするどころか、なほに大丈夫ですよ、進んで出かけなさい。紹介状もあげますと來るのである。

要は領事そのもの一人によると云ふことになる。その地元の實狀の如何などのことは第二の事になる。この故に領事のマメな足の達者なものゝあるところは比較的色々の事情が官公私それゝゝにわかつて來る緒を得るわけである。

三、新聞記事と歸朝者の言葉

新聞社會面に見ゆる多くの支那關係の記事と云へば、大抵日本に來てゐる支那人に連れ添うた大和撫子が、破鏡をかこつ哀話なのである。第一號の正妻になつたつもりで相携へ、あちらに渡つて行つたのが運の盡き。例へば浙江、温州の奥の何縣に歸國するときつれて行かれたとか、又は、福建のどこへ一緒に連れて行かれたとか云ふ話の筋が多い。而かもそれが恐ろしい片田舎のひどい處で、第一號になつた積りで、同棲することの出來た間は東の間である。郷里に遙々行きついて見ると、既に本當の一號はあつて、それに子供まで二人三人もあるのだ。折

角樂しみ切つて行つた撫子は、第一號から散々いぢめられ、又姑から餘計なもの扱ひをされ、虐待を受ける。コツピドク虐げられて、泣きの涙で孤影淋しく、到頭、雲煙萬里の波頭を蹴立て、再び日本へ歸つて來なくてはならないやうにせられたと云ふ話なのである。

かやうな筋の話がいつもいかにも面憎くけに書かれてゐる。さながら鬼の國に邪険な人間ばかりゐるところのやうに思はせる筆が弄せられてゐるのだ。實情を知らぬ日本人にして之を讀まされたとしたら、どんなに感ずることであらうかと思はれる。ところが事實面白半分筆にまかせて出鱈目が書かれてゐるのである。その影響のいかに社會的に大きいかなどは考へられてゐない書きぶりである。これほど恐ろしげに書いておくなら、今からの支那への渡航者の戒しめとなし、男と一緒になることを斷絶せしめんための止めを刺したつもりであるかも知れぬが、これが爲めどんなに日本人をして支那に反感を抱かしめるやうになるか判らぬ。澤山の中にはその事をコツピドク取扱はれた者もないとは云へぬ。たまにあつたこともあらうが又それと反對に、琴瑟相和し芽出度く都合よく行つてゐる方のもも相當にある。この方は一向に發表しようと思ふ。是を是として非を非とせることは新聞の使命であるべきだが、その邊の裏面の消息は殆んど今まで心得られてゐないらしく考へられるのである。

さなきだに、政治面に見ゆる土匪談は多い。匪賊のために被むる非人道的なる蠻行とその恐

ろしい被害の話、人質の話などはその常習の非行としていつも記されてゐる。又も匪賊か馬賊かと云ふ方の恐ろしい記事はいつも見せつけられ、之によつてどんなに支那世相の全體があたまごなしに蠻的行爲の横行せる社會であると思はされてゐるのである。

それから次は滿洲支那をあるいて來た人のおきまりの土産話である。これがいかに日本にゐる人の耳にわるく映じてゐるか。たまに記者の共匪探險記があり、内地探訪の話が載つてゐることのあるときには、いつも死線を超えて自分があるき、虎口を免れて歸つたのだと云ふやうな功名談のみしか記されてゐない。その冒険談めいた話の方を讀者は又喜ぶ。之が爲めに話の聞き手はその新聞から豫備知識の興へられてゐる處へ、尾に鱗をつけて更に大きく面白く云はれる。それだからとても恐ろしく響いて來るのである。話の調子は少々馬賊土匪の話でも加へて景氣を添へなくては支那滿洲の土産話らしくならぬと云ふ傾向もある。だからと云つて聞き手に之を割引して聞くほどの素養もないのであるから、そこに害毒を及ぼすことは蓋し甚大なるものがある。この邊は特に心して今後その謬をくり返すことをしたくないものである。

支那内地の經濟産業上の報告とか、交通路の報告とか云ふものには、眞面目に調べた土産話に加へられるであらうが、奥地の民情とか世相に關する方面の話とかになると、出鱈目のものが多く、有りのまゝに體驗し、好意を以つて見てやる態度で之を判断しようとした話は誠に少

ない。人の知らぬ處である爲め、唯相手を野蠻國の如くに云ひけなすのを以つて能としてゐるかの觀がある。誠に慨はしい事の限りである。口に親善を説きつゝも、却つて結果から云ふと之をぶち毀しつゝあるやうなのがどんなにあることか判らぬ。之があちらの土地に恐れをなし怖がつてゐる日本人の心理と相關聯して全く困つたものだと思はれる點である。

四、民心離反の行爲を慎しめ

日本人の大陸にゐるもので、そこに徳望を伴ふものが居らず、とかく、すること、なすことの民心に反し、隨處に嫌はれ者が續出してゐる形迹を見聞することは、否定出來ぬ事實となつてゐる。これはこゝに苦言の如くにして決して苦言に非ず、否、今にして之を改めずんば、一年と民心から日本人は遠ざかり、精神的には非常な距りを生じ、遂には決して決して取り返しつかぬものとなるにきまつてゐる。又腕力を以つて脅かしつけて見たり、重壓々制の方法をとつて見たりする如きは愈々以つて心の奥底から民心を反寄せしめ、さなぎだに抗日氣分を刺戟してやまぬことになるであらう。これは火を見るよりも明かなことである。若しこゝに云ふ自分のこの言を、大方針に悖るものゝ如く見るものゝがかりにあるとするならば、そは日支間を永久に精神的に離間せしめる者の見解であると云ひ得るであらう。

思ふにこれまで日本人はいつも要人、要人、又要人と恰で要人とさへ面會でもして夕食を共にし、要人と紹興酒の乾杯をすればそれで萬事解決したものゝ如く皮相な考へを以て支那大陸を考へるものが多かつたのである。これは自分の所謂、三角形の頂點にのみ眼がくれてしまつて、そして肝腎の底邊にゐる民心を眼中におくことを忘れたやり方であるのだ。三角形の底邊の方に目標をおき得ぬ如きあがつてゐる人間に、どうして四百餘州の民意にしつくり來た政策などが立てられるであらうか。要人との面談以外に親しく働きかけることに氣のついてゐない如き人間にどうしてこの大陸に打込んだ精神的の大事が出来るであらうか。要人かぶれは所謂要人かぶれに墮するのみであつて物になりつこない。

支那に對する仕事が一向壺に嵌つて來ず、賽の河原の石積みにも似た事のみくり返され、こんな事に勿體ない費用を徒らに棄てゝゐたのは全く痛事であつた。この要人かぶれの過去の誤れるやり方は明かに失敗を意味したものだと思はれる。少なくともこの言解は半面の眞理を物語るものであると云ひ得る。

要人にのみ目を向けてゐるものは勢ひ百姓農民たちを眼中におかうとしない。地もと地もとの地方民などは問題にせぬまでもよいと云ふ風に見てゐる要人主義の漲つてゐる以上、大陸の民心から人望を得る氣づかひはない。それでゐて支那の民衆から好感を買はんとしたり、又支

那の農業指導者顔をせんとしたところで、これに接近する者があるであらうか。その道を盡さないでゐて天下の民心が此方に来るやうなつもりでゐるのは、どうかしてゐると思はれる。支那の人は百姓農民たちにした處でそれほど愚ではない。まして實際の土地の事に即した知識、經驗もないものが唯高い椅子を占め、村民に君臨した氣持でゐるやうでは、何時までたつても民心を掴むことが出来ない。

正直なところ、支那の民心はいつもその武力とか、實力とか腕力とか云ふものを目さきによらさげ、鼻につくやうにやられたらどうか。之を好むものがゐるだらうか。一々出さなくともよいものを又出したがる人間が澤山ゐる。出さなくても相手はよく／＼心得てゐるのを、外に本當の徳のなく藝のないせゐかいつでも之をほめかさうとする。相手をして氣持の上で厭氣を増させるやうに又氣をくさらせるやうにしてゐるのである。英と云ひ露と云ひ、米と云ふ、その邊のやりかたは從來更に數等、なごやかに又温かくやつてゐたやうに見える。それから尙統制がそこにありバラバラでない。それを思ひ之を考へ來るときはこゝに露骨なことは一切避けて云はぬことにするが、全く日本人の反省すべき大事な時が今日來たのだと考へる。こゝに述べたことに對して、之を怪しからぬと云つた感情を挿むやうな日本人があるとしたら、その一事で以つて日本は色々支那大陸の舞臺からきつと、香ばしからぬ境地を辿ることになるで

みらう。

支那に對する恐怖の念を抱くものはその從來の要人本位の支那交渉や要人第一主義の誤れる皮相觀などすつかり棄てゝしまひ、そして心から、相手もこちらも同じ平準線に立つて同情のある心持で行動に出るやうに改めることが何時も大切であるのである。要は相手のみをいつもいつも缺點だらけ醜惡なるものばかりだと見る優越觀など棄てゝ、むしろ日本人自らが冷靜になつて反省し、更に新規時直しをやらなくてはこゝに云ふ日本人の無武装恐怖感の解消はむつかしくはないかと思ふのである。日本人がいつまでも武力や國力のみを鼻にかけて農夫や漁商にまでも臨むと云つたやうなトゲトゲしい氣分の去らぬ限り、日本人自身の心境から支那内地へ丸腰で這入つて行つても安心だと云ふ芽出度い氣分は見出されないことと思ふ。又事實上武器兇器一つ持たないで支那内地へ平氣で單身這入れる位の心境になり得ないものが大きな日支親善を口にしたところで、支那の農夫たちから笑はれ舌を出されるだけの事だらう。又武器そのものゝ優秀なる手前上、日本人としてのミエンツ（面子）はつぶされたのも同然となるわけだ。百の腕力をかざす他力本願よりも、むしろ心の内に相手を恐れなだけでの大きい悠久な用意を持ち得るものが日本人の中にどれだけあるであらうか。これがこの大問題を解決する心の鍵となるものである。日本人が武器武器とこの武器をかざすこと以外に大衆に懐かしく向ふ方

法方策を國民が考ふるゆとりのないやうなときは、たとへ武器の方のみうまく行つても大局の上で必ずや大陸國策の上に一大誤算を招くは火を見るよりも明々白々のことであることを牢記しなくてはならぬ。二、二六事件以來あまり國民の氣持が東亞の和平招來の上に危機に瀕して來た感じがしてならぬので率直なところを述べ持論のじみ出たところをこゝに洩らしたに過ぎない。心ある江湖の士に切實に呼びかけ、微意のある處を述べた次第である。

支那細民の心持

支那の細民が大支那の社會相を見る上に重要な要素であり、又今後經濟發達を企圖する上にも勞役業者として重視せらるべきものであることは云ふまでもない。従つてそれら下層民の平素營める生活相がどんな状態におかれてゐるか、又その日常生活を送つて行く上にどんな味のあることが含まれてゐるか、この點について多少掘りさげた見方を試むることは徒事でないと思ふ。

從來のやうに之を唯不潔とか、だらしないからとか云つて看過してはおけない時勢になつて來た以上、今から眞剣になつてその方面を見ておかねばならぬと考へる。それについて先づこゝには左の五方面から眺めてみたいと思ふ。

一、細民とお寺詣て

細民生活の上で何が一番困ると云つても、毎日の生活が無事息災にいかず、かねの這入らぬ

こと位困ることはない。先立つものはいつもかねである。細民連中は特に之を喧しく考へてゐる。その爲め勞働者で雨でも降られた日にはあがつたりである。親方から借りることも多少は出来るであらうが、考のあるものはいくらか溜めてゐる。それを出してどうやら凌いでゐる。その溜めてかくしてあるものはどこへ始末してあるのか、必ずしもそれは胴巻の中だけでもないやうである。

支那の細民だちは自分で働いて自分でたべる方法を無論心得てゐるのだ。勞働者としてはたつき、その親方についてゐる者はどうにかなつて行く。がしかし屑屋とか、ゴミ集めとか、碼頭の掃除人とか露店のめしやとか云ふ連中は、その收入の不安を案じて平生仲間を作り、一種の組合組織によりどうにか口を糊する方法を立てゝゐるものもある。色々それ〴〵十人十色の方法が立てられてゐることはあつても、なか〴〵思ひにまかせぬ者が相當ある。又中にはなまけてゐて何とも稼ぎ出しやうのないものも相當ある。かやうな部類のものはいよ〴〵困り果てるとなるとお寺詣でと出掛けるのである。

萬法歸宗といふ俗書によつて見ると、隨分支那の俗間にはつまらぬ事で人に怨まれ、その怨府となつた極致門戸に釘を四十八本打られたと云ふことがある。その怨みを解いてもらふ爲め神佛に祈禱を込めに行く。その他つまらぬやうな事由で祈りをかけに出掛けるなどある。しか

しその窮極の處は念願を聽き届けてくれる神佛であると考へられてゐる。神佛の拜殿に又屋根裏に、大きく求むるあらば必ず應ずと大書された額が仰ぎ見られるのであるが、即ち有求必應といふこの四文字が見れる。が、これがとても偉い魅力を有してゐるのである。細民の念願を掛けに来るもの必ずしもこの四文字がすべて讀める譯でないが、何だか金文字で立派に堂々と掲げられてあるが故に、有りがたいものだと思ふ氣持がしてゐるのである。

又之に祈願をこめる以上は是非きゝ届けてもらはねばつまらぬ。是非きいて貰ふ爲めには供物が少なかつては、いくら神佛と云つても御利益が薄いだらうと見てゐる。そこで參詣者は實に身分不相應のものを供物として捧げるのである。これは細民でなくてもその間の心理は同じものである。随分肥馬輕車を横着けにして念願をこめに參る土豪の家族を見ることもある。しかし又赤貧洗ふ如きものを見る場合もある。細民の祈願に懸命になるのは鬼神に祟られては困るといふ考へから出てゐるのが一等多いと云ふことである。祟られると將來が眞つ暗らになる。運命が向かなくなる。鬼神に祟られることくらゐ物凄ひことはないのである。滿洲國の新京だつて市中道路の眞ん中にささやかな祠堂があつて、之に神様が祀られてゐる。幾度かこんなもの掘り崩してしまへ、往來の邪魔にならぬやうその祠堂を移轉させ、綠蔭もなくしてしまつたらよからうとやつたものである。ところが之を手傳つた土方でも老爺でも之に歎をかける

と、その人間がその晩熱病とか何とかに祟られ死んでしまふのである。それが一人や二人でないので遂に仕方がないと云ふことになり、今以つてそのままにしてあるのだが、これなどもその一例である。

又撫順の町にも老木（たしか槐樹であつたかと思ふ）が路上にあつて、之が迷信的となつてゐる。お蔭で例の「有求必應」の小扁額がたくさん大枝小枝、幹の處にぶらさげられてゐる。かう云つた例は大支那各地に尙どつきりあるのである。大衆といふか細民階級のものには存外それに神経質である爲め、正直に之を信じてゐる。そこに日常生活の安心な思ひをしたいといふ根柢が養はれつゝあるのである。

日本人で殊にインテリ顔をしてゐるものは、支那へ行つても下層民社會にふみ込まうとする心構へが見えない。細民たちが朝に夕に出入して賽錢を投げてゐる寺廟の境内に踏み込まうとしないのである。ハンケチで鼻をおさへ押へ出かけてゐる日本人の觀光客がたまにあつたやうな氣もするが、これは自分の夢であつたかと思ふ。何としても今から細民の事に多少とも興味を持ち、又將來の下層民問題について考へやうとするものは、かゝる細民とお寺詣での事に考を致さなくては嘘だと思ふ。

お寺詣と云つても臨濟や曹洞などの禪寺に出入する土豪連中、紳商の類は別である。それよ

りも城隍廟であるとか、關帝廟であるとか、又は財神廟であるとか云ふ自分の安否にすぐ關係のあることを聞き届けてくださる神様の方へ足が向く。それらの神様は人間と相去ること遠くない氣分を持つことでござるを見てゐる。従つて若し大きい事を願ふときには、十分の御馳走を支度して供へなくてはいかぬのだと考へてゐる。細民心理としてこの考は尤もなわけである。と信ぜられてゐる。しかし事實さう澤山のもが供へられぬのが惱みのたねである。そこでこれらの寺にまゐるとおみ籤を引くのである。そしてそれによつて大吉、吉、凶、大凶など云ふものを見てもらひ、之が説明を得てどうにか神託なりとして色々にあきらめさせられて歸るといふ實情なのである。中にはシンボウ（神筭）と稱する竹の根で作られた祭具陰陽を用ひ、その竹を地上に投げて、一つが上（陽）を向き、一つが下（陰）を向くまで何遍でもやつて見ると云ふ方法をとり、自ら慰さめておくものもある。つまりかうしたことは結局迷信に基づくこととなるも、之によつて細民どもがいかに氣持の上に安堵の思ひをなし、又諦めるなら諦めると云ふ示唆の與へられた方法だとして重く見られてゐる。支那細民の日常生活を見るに之を抜きにしては考へられないのである。だからこゝに之を一言しておくわけである。

二、病み付きの賭博

支那はインテリ社會はさうでもないのだが、一般社會のものはかなりまだ阿片の舊習から脱却するわけにはいかないのである。又片田舎をあるいて見るとあのやうにとつさりケシ（罌粟）の栽培されてゐる畑を見る。だから尤もなわけである。それにしても之を買ひ之を吸ふだけの資力のあるものならまだしもだが、さうでないものまでもがその陋習に耽溺してゐるとは變だ。賣る方でも驢馬の革などとり入れて最下等の劣等品を作り、之を細民に賣り付けてゐる。場末の町では客棧（宿屋）の附近の或るシルシのつけてある家に小窓がある。そこに合ひ札を貼りこんで細民相手の阿片の賣買が行はれてゐる。

好きなものと云ふは妙なものである。いくら懐の方は貧乏してゐてもやめられぬのは阿片の味である。又あの時の氣分の思ひ出である。人が何と評しやうが、法律でいくら喧しく云ひ立てやうが、之を飲みつけるとその時刻になつて止めてゐたら氣分が變になる。惡寒を生じ顔色が蒼白になる。これは親しく自分もそのやうな癮者の有様を見たことがある。中毒してしまつたらそこまで來るのだ。ところで細民風情はそこまでならぬうちに止めてしまつたらよさうなものである。上海には之を中止せしめ遞減させる病院も北四川路の横に出來てゐる。自分はそれへ參觀に出かけたことがある。しかし一般のものはそんなことで止めるどころか、何とんでも隠れてでも飲みたいと云ふものばかりである。所がそのお値段があまりお安くなく來

てゐる。

そこでどうしても細民たちは無理をしてゐる。めしを食べることは我慢が出来てもその方になるとこらへられぬと云ふわけである。それが爲め無理算段をして子供のときから慣らされてゐる賭博に打込む。賭博にもい／＼の方法がある。階級により地方によりその道具も様々である。四川の敘州あたりでは重慶成都の人の知らぬホンパオ（紅寶）の博奕をやつてゐるのを見た。その様子で楽しんでゐる。又細民には細民流のやり方がある。それも大人には大人のがあり、小人には小人のがある。小孩は壁に向つてトンペイ（銅幣）を投げ付けコロ／＼ころげるのを見てゐる。そしてパタとそれが平たく倒れたとき上に向けばどう、下に向けばどうと極めて簡単なやり方でやつてゐるのである。小孩たちの仲間はそれで丁度よろしいらしい。ところが今少しく深刻な場面を見てゐるとかう云ふのがある。

家で親が子供に朝目がさめるとすぐ一錢の銅幣を與へる。すると子供はそれを握つて路次の中で朝早くからお粥を賣つてゐる露店に行く。店には竹の筒がある。之をガラン／＼振らせる。そして出て来る小さい竹片に〇〇〇〇と五つしるしのある竹を引きあてたら五杯のお粥が食べられるのだ。若しからくじを引きあてたら零であるから、一杯も食べられぬのである。幼少の頃からすべて家庭でかやうに訓練されてゐるのだから、一生涯博奕の趣味の取去ら

れぬのは當然の話である。毎朝のめしにあり付けるかどうかの瀬戸際を、かやうに一かパチかの方法でやつて來てゐるのだから、賭博氣分に懸命になるのも尤もである。

かう云つた熱烈なあたまが養成せられてゐる子供ちやもの、之を一片の法律なんかで形式的な禁止かたなどして見た處で、之を馬鹿にするのは當然のことである。その根深く源遠いことをよく／＼承知してゐなくてはならぬ。

若し雨でも降つて仕事に出かけられぬこととなると碌なことを思ひつかぬ。仲間が博奕を始めるとなると、又その氣にもなるのだ。うまく行けば雨がふつて却つて儲つた事にもなるのだがさうばかりもまゐらぬ。

上海は事變前世界的に有名なパオマーチャン（跑馬場）と云ふのがあり、一等が二十四萬圓とか、そのおとなりの番號の籤が八萬圓宛の競馬があつた。それは大會社、銀行あらゆる階級あらゆる人種に共通なもので、日本人やマニラ人にあつた事もある。そこで競馬の期になると銀行家でも帳面付けが手につかず、若し二十四萬圓あつたらどうする。曰く、こんなケチな銀行なんか早速止めてしまふのだ、などいふ聲は隨所に聞かされたものである。上海は特別のところであるが、それにしても支那式のところがかなりある。浮足のところがある。貧民下層階級のものでその點だけは染まつたら抜けられぬといふことになつてゐる。

いくら貧乏してゐるものでもさうした賭博趣味に耽つてゐられることが、人生意義ありと考へられてゐるかも知れぬ。日本では喧しい譯だが、大陸には存外氣らくなところがある。細民をあたまごなしに貧乏者と云つてしまはないで、この點を一應考へてやるだけの雅量がある。ある方がよろしいのだが、しかしその爲めいつまでも浮び上れぬことになつてゐるのである。そこに氣がつかないと生涯つまらぬのである。支那では麻雀をすることは之を罪惡と云つて居ない。社交上の大事な方法だと見てゐる。従つてパイミー(牌迷)と云ふ語もあるのであるが、これは麻雀のバイ(牌)に凝りかたまり狂氣の沙汰になるものを指していふのである。日本人から云ふとかうした牌迷にひどい罪人となるわけである。ところが支那には極めて軽い意味でむしろ朗らかに見えてゐるのである。

三、傭兵にならんか

支那ではどうせ毎日ぶら／＼してゐるくらゐなら、驛の電柱や壁に募集廣告の出てる通り傭兵にでもなる方がましだと、これはあちらの田舎でよく聞かされる話である。又常識としてひろがつてゐる考へ方でもあるのだ。

片田舎でも何もせずぶら／＼してゐる男は相當にあちらにある。蒋介石政權の時分には公

路政策と云ふことで、大分道路工事の賦役に、否でも應でも強制的にとられたことがある。又兵隊に無理でもとられたことがあつた。若し男子のゐない家庭だと、その代り三十圓のかねを寄越せと云つて高飛車にとられたものである。南京に國民政府のあつた頃は、大分ひどいやり方が續けられたのであつた。しかしさうなるまでは大抵村の入口、驛の柱、壁へ持つて行つて男子十三歳から四十五歳まで傭兵に應募せよ、月給は八元から、戦時手当五割増しと云つた風の揭示が見えてゐたものである。どうせ細民生活をしてゐるものには有難い話である。田の草をとる用のあるものはさうでもないが、毎日何をして食つてゐるか譯のわからない者が相當にゐたのである。今でも支那の田舎都城を通じて見るとそれが多い。そこで若しかゝる募集の揭示、達示、佈告を見ると多くは喜ぶのである。と云ふのは兵隊になつたからとて死ぬる覺悟などあるわけがない。収入を得る爲めの人夫と云つた心持で行くだけのものだ。三民主義、新生活運動の盛に勵行せらるゝ時であつたら、まさかさうばかりでもなく、相當嚴重な猛訓練の行はれてゐるのを見たこともあるのだ。けれどもそれはツイ事變直前のことである。それまでの長い間は兵隊と云ふものは極めて氣らくなものであつた。小使錢を稼ぐくらゐに考へられてゐたものである。どうせ昔から兵隊と云ふものは人間の屑のやうにしか考へられてゐなかつたものなのだ。といふのは、

よい鐵は釘なんかにならず（好鐵不打釘）

よい人間は兵なんかにならぬ（好人不當兵）

これは誰れでも云ふ語でよく世間にも知られてゐた語である。

事實一度兵隊が村を通るといふと、草の根まで根こそぎ持つて行つてしまふとまで云はれてゐる。敗鼠兵が通過したなら、あとがみじめになるのだ。それ故兵隊を世間がよく云はぬのは當然なのである。どうせ浮浪の徒見たやうなのが遊び半分に、又掠奪稼ぎに兵隊に雇はれると云ふわけであるから、かゝる風評の立てられるも當然のわけである。それからその人間として粒の問題であるが、最初から小使錢稼ぎで隊に這入つてゐる手合なのであるから、いつぞや南軍北軍の北京に這入つて來た時のと、自分は日曜に城南公園の廣ツ場でベンチに腰をかけてゐる兵隊の話をわきで立ち聞きした事がある。その時の話はかうである。

オイ陳君、君の方は月いくら寄越すのかイ。月八円で戰時手當五割を加へると十二元になるのだぜ。

オウさうか。俺たちの方は月たつた六元ポッキリだ。割増しも何もありません。城門攻撃前だと來たら一ヶ月も前から一文もくれはせぬ。その代り城門を破り民家で銀器店でもどこでも掠奪泥棒勝手放題と云ふのだがネー

でも自分ども氣が弱いものは駄目なんだ。

君のとは月八元と云ふなら早速鞍替へをしようか、よいツテはないかネ。

先づかう云つた氣分心境である。これが通り相場なのである。今日の重慶政府にしても、大分これに似た話題があちこち噂に上つてゐる。もとの粒が粒だからそこに來るのは不思議でない。又軍の闘ひが止まつたらあとどうなることか判らぬのだ。兵隊でゐる間にいくらでもよい事をウンと稼いでおかないとつまらない。云々と云ふものもある。ありさうな話である。極端なものになると銃器など持つて來て護衛をして呉れるのがあるが、護衛の任務がすむと直ぐすべて鐵砲はとりあげらるゝのだと云ふ。うか／＼いつまでも渡しておくところへ賣り飛ばしてしまふか判らぬ。だから取り上げるのだと云ふ。以つてその心理の一斑を窺ふことが出来るのである。

まさか昨今いくら支那軍だと云つても、かゝる心境におかれてゐる者は尠ないことだと察する。しかしまだ相當その種の手法が減じてゐないよと云ふものがある。その邊はどちらになりともきめ兼ねる。師團長や旅團長、中隊長殿がその部下の判（實印）を預りおき、部下の給料を全額失敬するものや、又少くともそのあたまをはねる位のこととは朝めし前の仕事である。これらは支那のミエンツ（面子）にも關はる事ゆゑあまり露骨のことも云へぬと云へばさうかも

知れぬが、しかし常識からかくあるべしと云ふ想像はつく。支那の細民から兵隊が募られてゐるのであるから、先づその邊に相場をおいて考へることは必ずしも誤りであるとは云へないであらう。支那の兵隊をつれてあるいた體驗から自分は特にかくの如き話が出来るのである。之が若しかりに福建とか廣東方面であると、細民は海外に出かけて行く。先輩の話も聞いてゐるであらうし、又事實海外の事も明かにしてゐるのだから、デツキパセンジャーにでもなつて渡航する。さういふのが何ぼか出て来るに違ひない。その邊の粒と粒とを比べて見たらどちらがどちらとも云ひ兼ねる。傭兵の實情もわかり又デツキ仲間の様もわかつてゐるといふと、兵隊が香ばしくないやうに之を責め立てるのもよい加減のものだ。と云ふことになるのである。

四、香煙趣味

人間はいくら米鹽の資に窮してゐるとしてもタバコ（香煙）の吹かしたいものはどうしても止められぬ。酒に煙に、女に、戯（芝居）は止められぬのだとよく支那の通人は云つてゐる。或はそんなものかも知れぬ。しかし細民は細民としてどこまでも細民の分を守り、驛の休息所で人の吹かし棄てたもえさしを拾ひ集めて吸ふてゐるものもある。事實支那の船着き碼頭と

か、茶飯茶樓とか、ステーション邊りとかで、紳士の棄てたのを拾つてゐる小孩を見ることがよくある。小孩は之をひろひ集め、ほぐしたタバコの粉をまとめて買つてくれる處へ持ち込む。道理でこの小孩は左手に箆を抱へてゐる。そして空き巢狙ひのやうな目付きをして之を争つてとつてゐる。そこには又別にタバコの函、空き函のみ拾ひ集めてゐるものがある。舶來ものでも、哈達門（支那タバコの名）でも、紅錫包でもよい。何なりと美しい空函でさへあればよろしい。細民部落の路傍の壁の下に、冬天の寒い日に新聞紙をひろげ、その上に陣どつて黙々として小さい匙でその五目のタバコの粉末をすくつてゐるものがある。そしてオニアンペーパーの小片にきりきりと巻く機械を持つて來て巻いてゐるのである。それから吸口をつけて十本づつ例の函に納め、その隅ツこのものを鉄でボンと剪み、そこから一本だけ出して覗かせてゐる。

細民たちの中には之を求めに來るものがある。喜んで一本買ひをする。いくら貧乏してゐてもその一本を買ひ求めるべく非常な努力をしてゐるのだ。そしてその一本を手に入れるとうれしげに空に向つて吹かしてゐる。

又ヤンホウ（洋火）即ちマッチにしてもさうである。四川省は重慶の奥へ行くと、あの硫黄のついてゐる處を五ツに切り軸木七十五本を七ツの束に改め作り、之を穴錢で賣つてゐる處が

あつた。このとは大正の末年、江津、合江の地で聞いたのである。江津から合江、江安、納溪は牛奶山や峨眉山へまゐる途上に在り。瀘州や敘州ほど有名なところではないが、それだけに片田舎の様子がこゝに汲みとれる。この點に於いてこのタバコ（香煙）やマッチ（洋火）の話はつましい話であるだけに、又下層細民の生活相を律する上のパロメーリーともなり得ると思ふ。

なければないで我慢をしてゐればよさうなものであるがさうばかりも行かぬと見える。あれで葉巻を燻らしてゐるものさへもあるのだ。枯らしたタバコの葉を三四に切りくるくる巻いてある。文字通りの葉巻きなのである。上海パロウエルの店頭に列べられてゐるのを幾度か見たことがある。價は驚くなかれとても安い。

それから長江上流湖北宜昌峽の裏山、靈泉禪寺の幽境を行脚してゐたときのことである。自分はこの山寺には前後二度尋ねた。いつもその途上山家の老農を訪ね、山中曆日なき閑話など聞いて見るのであるが、そのとき老農は四尺餘もある自然竹のまゝのキセルを持つてゐる。そのキセルの雁首と云ふか竹の根のところを凹く酒盃のやうに作り雁首となしたものである。老農は手をさし伸ばし軒端に吊るされた枯れたタバコの葉の末端を引きちぎつてゐる。手で以つてモシヤモシクと丸めたと思ふと無雜作に之を詰め、火を點じて喫んだ。實にその様子は樂し

い態度である。刻まれた葉でも何でも無い。之を何とも思はず平氣で喫んでゐるのだ。あれでおいしいと思つてゐるのであらう。誠に世は泰平である。うまくてもうまくなつてもそんな事は問題でないらしい。その氣分を味つてゐると云へばそれまでであるが、何とも評の仕様が無いのである。

支那細民たちのタバコ趣味や嗜好と云つたら之をはたから評するわけにいかぬのだ。身分の上で暮らしの貴賤によつて差別扱すべきでない。いくら埃及のアメリカのと云つても、山の賤民にはその地の枯らしたタバコの方が一等よいのであらう。これは萬重の長城以北で自分がかつて秋十月名物の柿を買ひ求めて頂かうとしたところ、とても遊んで口がゆがんでしまつた位の思ひをなしたことがある。でも之をそのとき同じ火車に乗り合せてゐた老農だちに與へたところ、皮もむくことをせず涼しい顔して極めて無雜作にむしやむしや平げてしまつた。文化に浴した顔などしてゐるものは、やれエジプトの、アメリカのと云ひ、又この柿は澁いの、皮をむかなければならぬのと文化人めいた事を云々する。細民たちは笑つてゐるかも知れぬ。こゝに元始的ではあるが、しかも細民の強いところがあるのだ。荒削のうちに抵抗力の強いところが潜在してゐるのである。細民をつかまへて下層民視することをやめ、しばらくその底力、その抵抗力の強烈なるところに思ひを致して見ることが本當でないかと思ふのである。

五、苦兒引受處

苦兒と云はず孤兒と云はず、ともかく支那には世に不幸な子供小孩を無條件で戴くところがある。支那は隨處にこれがある。曰く接嬰處、曰く育嬰處、曰く同善堂、曰く何曰く何と云ふ必ずしも苦兒、貧民の兒童と云ふわけでなくとも之を受取り乳を飲ませ乳母をつけて大きくならまで育て上げることをしてくれる社會事業なのである。

支那の細民たちはこれあるが爲めに大變助かるわけで、小孩、乳兒の生れることは生活の上に色々困る。さう云ふ見解の下に生れ落ちるときからすぐこゝへ持つて行く。自分で持つて行かなくとも、人に托して持つて行つてもらふてもよい。そして育嬰の手數を免れようとするものがある。その考へ心情の善悪はこゝに批判しないこととして、ともかくも各地にこの施設のあることは事實である。たしかに細民階級にあつては、これあるが故に大變助かるわけなのである。

市中をあるくと路傍にその看板の掲げられたところがある。そこへ嬰兒を携へてまゐりベルを捺す。すると抽斗が出る。その中に眞鍮の板が布かれてある。もらつてもらひたいと考へてゐる嬰兒を之に乗せるとその重みによつて奥の事務所へわかるやうにベルが鳴る仕組みになつ

てゐる。そのとき子供は引取つてもらふに名を云ふことはいらぬのだ。勿論親の名は全然わからさなくてもよいのである。たゞこの子供の生年月日を云へばそれでよろしい。それだけである。

内部に這入つて見ると先づお思召しの義捐金をと云はれる。何ぼか喜捨すればよろしい。そして内部の各施設組織又院長ドクター、ベビーなどを順次歴訪するのである。赤ん坊は生後一週間のがあり一ヶ月のがあり一ケ年のがある。それもそれには小さい名札がついてゐるが、そばに係りの阿媽看護婦がゐるし、又ドクターが面倒を見てゐるので世話がない。

やゝ長ずるに及び遊戯を教へ、又七八歳になると國語、算術、修身、地歴から手工などをも教へられてゐる。女の子は刺繡などを作らせ、之を年頃の先輩に外賣をしてもらふやうに出来てゐる。之は普通の相場より高くはあるが、世間でも承知の上で之を高く買つてゐる。矢張り經營の費用のうちに入れらるゝのである。かう云つた接嬰處の費用豫算が市政府とか國家とかの經營に係るのは少なく、多くは慈善家の寄附金によるものだと言はれてゐる。又支那ではかかる場合に、存外多額のかねが投ぜられる傾向がある。相當まとまつたかねが出る。さうその經營はらくでもないやうだが、又さりとてあまりケチケチもしてゐないやうである。

細民の子孫は遺傳がどういふ風に現はれてゐるかその點はよく研究もしてゐないのである

が、しかしかゝる場合に安心して子孫が、接嬰處へ渡されてゐるといふことは大なる安心の出来る方法である。日本ではそれを試みたとしたら、とても弊害が生じて仕方があるまいが、何もかも卒業してゐる支那の社會では平氣で之を利用してゐる。又かゝるややこしい家庭組織の支那にあつては、どうしてもかゝる社會施設を必要としてゐるわけなのであると思ふ。むしろ興味のあることである。滿洲國では奉天に有名な同善堂といふものがある。云ふまでもなく、尙北京にも青島にも上海にも相當なのがある。細民どもにかういふのがあると云ふ社會は、何と云つても進んだしるしである。日本と大分ちがつてゐる組織のものであるだけに、日本の細民研究者に是非一度見てもらひたいものであると思ふ。

支那細民はその家庭で子供を設けると、かゝる接嬰處の公所のあることを承知してゐるのかどうかは明かにしないのであるが、支那の社會的施設として、かゝる物の必要であることが認識されてゐる處に支那らしい處がある。又之を受取るに父母の名も又地址も何もつきとめることをせぬ處に吞ん氣なところがある。恐らくそこをつきとめるとなると、連れて來るものになくなると云ふ人情の機微を看破してゐるのかも知れぬ。下層民社會とてさう悪い意味からでなく、子澤山の家庭は生計に困ることはあり得ることである。又貧者の家庭でなく相當なうちであると夫人の數が多く、第二號第三號と色々ある場合、子供にしても存外水くさい關係にな

つてゐる。又親としての親が認められてゐないこともある。かゝることから考へると、生れ落るときから本當の兩親を知らぬと云ふ不幸なものが存外それを平氣でゐられるのである。又假りに作つた親だとか假定の祖先だとか云ふものを涼しい顔して申立てゝゐるものもあるのだ。世相の複雑してゐる大支那にあつては、たとひ孝道を以つて偏望道德の大本としてゐるとは云へ、又存外平氣なところもあるのである、この邊は日本式を以つていくら東洋道德の本場の支那と云つても、必ずしも大陸を以つて手本となし得ぬ處もあることを豫め承知してゐなくてはならない。

以上信仰、賭博、傭兵、香煙、接嬰の五類をかりに看點として、支那細民生活の息き抜き法を見る上の標識となしてみた。恐らくこれらの觀點は南支、中支、北支或は滿洲國側の方面までもとり入れて適用の出来るものだと考へる。いくら貧困な暮らしを立てゝゐると云つても、その裏面には抜け路がなくてはいかぬ。どうして大陸の人々は窮すれば通ずるかと云ふ心理が動いてゐる。日本人のやうに生活苦からして親子もろ共に心中を遂げるの、瓦斯心中の、飛び込むの、自害するのと云ふことはあまりあちらでは耳にせぬ。又支那の人の氣持ちからしてさうなりさうにもないのである。そこにはどこまでもゆとりを持ち、窮してゐながらもどこことなく

悠々として氣持の上のんびりしたところを持つてゐるやうに見られる。これはいつも自分の見てゐる處であるし、又支那に滿洲に永くゐたものの齊しく感ぜられてゐる處だと思ふのである。下層民の展望はこれに限つた事はないのであるが、自分が特にこの方面に興を覺えてゐるので、先づこゝにその一例としてこの見方をして見たに過ぎぬ。讀者銘々の好むところの角度から十分、掘り上げてその研究の對象とせられるならば、國策線上の日支融和、總親和の上に裨益するところ決して少なくないと信ずるものである。

支那民族社會の見方

一、支那民族の考へ方

支那の民族には幾千年の民族生活があり、その衣食住から何から何までが慣れ切つた生活氣分はよくこなれよく培養せられてゐる。そこで一朝一夕にそれを改めさせる譯にいかぬことは、民族性の根が可なり深く藏されて居る點から見ても容易にわかる。日本民族には日本人の民族生活が深く藏されてゐる。その爲め外來のものに、いくらよい處があつたからとて必ずしもそれを採り入れられもしない。それと同じやうな處が支那にもどつさりある。どの民族にも特有の趣味があり、誇りがあり氷炭相容れぬものも相當あるのだ。日本人が相會し食事をするときは膳に美しい刺身がつく。刺身が出ると正式の料理であるとして大いに食指動くのである。日本人は常識上之を當り前の事として認めて居る。

ところが日本人は餘りに日本式に燃え、且つ日本式に固くこびりついて居るために、相手かまはず支那人に對しても同じ刺身を出したり、握り壽司を出したりなどして持てなす。純眞の

氣分から之を客として持てなさうとするのである。動氣とその氣分は香ばしいのであるから難すべき處はない。このくらゐの事は大陸の人の方で心得てゐる。のみならずその好意を大いに多としてくれてゐる。けれども腹の中では確かに何等手のかけられてゐない調味拔きの生まの魚肉としか見ないのである。だから「日本人はひどい野蠻な生まものを出して呉れたものだ。見ただけで箸が出さうもない。こちらは生蕃でもあるまいし、ひどい物が當てがはれたものだ」と感ずる。決して愉快とは考へないのである。若しかりに支那人の細君が日本人でもあり、そして不斷マグロや鯛の刺身でも食べつけてゐるものならば結構だと云ひ、その好意を頂くであらう。それだけの訓練は出來てゐるのである。ところが一般支那人の人、滿洲國人、臺灣本島人あたりに向つてかゝる考なき刺身が出されることは決して效果的でない。むしろ打壞しになつてしまふのである。

物も取りやう考へようである。こちらがいくら心から勉めて見たとしてもポツクリ嵌つて居る事でなかつたとしたら少しも感謝されぬ。むしろ不快の念のみが咬られ手が出なくなるのである。そこで雙方の氣持はその邊から溝を生じ、何だこちらは純眞な氣持でサービスしてゐるのにと云ひたくなる。相手は相手でもつて、無理にいや／＼ながら箸をつける。そこでツイ腹工合がわるくなつたり下痢を起したりして困つてゐるのであるとこぼす。考ふべき事である。

これはつまらない何でもない事だが、これからして雙方の氣分がシツクリ行かなくなり、感情が氣拙くなつて來る。又支那人の人から贈物を頂くときなどよく體驗するのであるが、支那產の手土産としてお茶など頂くことがある。支那では茶は上品な贈物であるとされてゐる。福州の巖茶であるとか武夷の芳茶、浙江龍井の貢茶など何れも結構のものである。相手はこちらを尊敬して之を呉れる。木函なり、又美しい罐入りなりにして、進物として呉れる。ところが日本人とは云ふ。好意は有りがたいが、支那茶は日本茶と丸きり芳香が違ひ、薬くさくて飲めないといふ。家内子供も變だと云つて頂かうとせぬといふ。そこで止むなく親類の支那通のうちへ呉れてやつたよなどと云ふものがある。折角の支那茶がこの通りである。勿體ないわけである。相當かねの掛つてゐる手土産がこの通りの取扱ひを受けてゐる。これは、實話なのであるから誠にむづかしいものであることがわかる。

更に又瀬戸物である。九江の焼物茶碗類を十組これを土産として進物に貰ふことがあるとする。處がそれに入れられた書き繪が菊花ならよろしいが、若しかりに蓮花の模様入りでもあつたとしたらどうであるか。貰つた方では蔭口をたたき、まさか香奩返しものを廻した譯でもあるまいが變なものによこされたものだ、云々とつぶやく。善意からすることであつても全くその習慣様子の違つた間柄と云ふものは困つたものである。相手がよく考へて呉れたもので

あつても結果から云つて喜ばれず、變にとられてしまふ。かゝる事は珍らしくない。心すべきことである。民族生活から来る永い歴史は争はれぬものである。上にも云ふやうに周時代以前から何千年と牛羊豕の食事に慣れて居る。それだから日本の刺身が野蠻に見え原始的に見られる。これは理屈でなく直感から来るありのままの實話なのである。實話であるから、それだけその結果の人心に及ぼすものに大きいものがあると云はざるを得ぬ。同じものに對する見方。考へ方の相違は日支兩國の間にどれぐらゐ澤山あるか判らぬ。

支那家庭では來客が見えると、客に先づ座に即くやうに主人は自ら請め、チンゾチンゾ（請坐、請坐）をくり返す。着席してもらつてから熱茶を出すのである。これも丁寧な古風のうちでもあると、主人自らが手にて慇懃に茶を勧める。それからタバコ（香煙）を出す。その勧め方であるが、日本なら客の前でタバコ盆の蓋を取つておく位が精々である。主人自らがその一本をとり出し添へ手などして客の手に恭々しく渡すことなどするものはない。何もさうまでしなくとも客は自分で喫みたければ採る。手を出して取ればよいのだとされて居る。ところが支那では禮として親切過ぎるのではないかと思はれる位丁寧に主人自らタバコをとり、添へ手して恭々しく客に勧める。客が口にくはへたのを見届けると早速次に主人は洋火（マッチ）をとり、自ら點火し消えないやう注意をしながら客の口もとの處へと持つて来る。若しさう云ふ

態度、取持ち方をしなかつたならば氣のきかぬ主人だと云ふ事になる。いかにも小面倒であり、こうるさい感じが日本人にはする。支那の社會では皆が皆さうするのだからこちらもさうする。郷に入つては郷に従ふべきなのである。之を馬鹿くさいなどと思ふものは本當の交りの出来にくい人である。腹の中はどう考へてゐようと、かうした禮は盡すべき事になつてゐるのだ。支那中流以上のうちを訪ねられた日本人は誰れ人でもかうした體驗をした事と思ふ。日本人ならばそこまでしなくともよいと考へる。洋火（マッチ）の要ある者ならば勝手に卓上から取ればよいと云ふ氣持である。それ以上氣を配る事も要らぬであらうと云ふのが、一般日本人の常識となつて居るのだ。交はるに禮を以てし、接するに道を以つてすると云ふ位の事は皆判つて居る。マッチを手に取りあげ客の口許にまで持つて行つて點火することなどはせぬ。支那の禮法としてはそこまで努めるのだ。これもボーイをしてさせるのならまだしもだが、主人自らが席から立つて行くつて勉めると云ふに至つては、甚だ細節に過ぎたことだと見られる。そこまで末節に拘泥したりするのは男子としてもどうかと思ふと云ふ氣持がする。支那人は自身の民族生活が他から之をどう評してゐた處で始まらぬ。要は支那はどこまでも支那だ。日本は日本だと云ふ處に落つるだけである。さう云ふ點に考へさせられることが夥しくあると云はなくてはならぬ。

二、青年層の禮節觀

日支關係は禮節の上で共通な處が澤山ある。之を大ざつばに考へて居るのは、彼我の間に餘り違ひはあるまいなどと思つてゐる。儒教張りの禮節が基本となつて居る日支兩國は、民族生活の上に餘りにも末節に拘泥し過ぎてゐる。さうまでしなくともよい筈なのである。大體論からさう考へさせられても、實際問題となるとお互に相違せる點の多く、従つてその間獨りぎめ、呑み込みの上でする事なす事が、結局個人交際の上に感情を害して來る。それから又横柄であるとか、禮を知らぬ人間だとか云ふ事にもなつてしまふ。

上述の人に接して香煙を勧める時の禮儀などと來たら極めて新しい慣習なのである。そこでこれはまだ日本に這入つて居らぬのだ。がしかし多くの儒教張りの禮儀作法は今日尙支那家庭上流の間に行はれてゐる。少くとも中流以上の處に於いてのみ重んぜられて居る。そしてそれが文字として書物の上に掲げられて居るのだ。女論語の如きたしかにその一例である。從來日本にて支那の智識と云へば大抵書物を通じて這入て來てゐる。直接あの支那人の生活の起居動作を目の當りに見てそれに見倣つてやつて居るのでない。書物の上となれば勢ひ上流の事となる。傳統的に採り入れられてゐる部分のものは、それ故比較的慇懃であり、丁寧なことが多

い。而もこれらは今日の現代的な又近代的な勝手氣儘にして毎日を自由に送つて行かうと云ふ若い青年の氣分に合する譯がない。青年の心理と青年の日常生活に合はぬ事のみが相當多くなる。支那の本場にあつても、名門、舊家と云ふ門閥のうちの禮法節儀と云ふものを見るに、一般の若い青年から別天地の如くに見られてゐる。

處が、さうした青年たちが例へば日本に留學に來る。留日學生として東都に二年三年と逗留をする、すると朝野の識者は云ふ。日本に留學に來た青年學徒はよろしく日本家庭に入れしむべし、そして日本の慣習を家庭から學ばしむべしと。宜しい事である。ところが學生自身の方から云はせると、とても日本の家庭は窮屈でたまらぬ。細かくて、毎日日本人と挨拶するのさへ小面倒くさい、うるさいばかりだと云ふ。お早う、行つて参ります、只今歸りました。食事どきには頂きます、御馳走様でした。寝る時はお休みなさい。と當然の事ではあるが慣れてゐないものだから、とても煩はしいと云ふのである。上流出の青年なら日本に來ても苦になる譯はないのであるが、一般はさうでない。何の爲めに一々之を云ひ習はさなければならぬのかと云ふ。もつと自由に氣らしくに行きたいのだと云ふのである。かゝる氣分を持つて居る。更に尙ぎこちなく考へられて居る事は挨拶のお禮の辭である。もし他家で宴會に招かれて招飲の挨拶をすると云ふときに、「御馳走さま」の第一回をいふ。席を立つとき又第二回の

御馳走さき」隣室に移るとき又第三回、翌日面會でもすると又第四回と、とても煩瑣に堪へられぬ程の濃かさであるといふ。恐らくこれは日本の婦人たちの間の慇懃ぶりを皮肉に云つたものであらうが、男子にしても此の式の念の行き届いた挨拶を繰返してゐるものがある。若し之を一回ポツキリ禮を云ふのみであつて、あと繰返さないとするとそこに誤解を生じ、横着だとか、感じない人間だとか色々の批評を聞かざるゝのである。

支那の習俗としてはぶつきら棒に失するか知らぬが一遍挨拶をしておけば十分なのである。さう二度も三度も安賣りすることをせぬ。餘り度々禮を繰返すのは又の御馳走の催促を要求してゐるやうにも取られる虞れがある。荒削りのやうではあるがそれでお互に諒解が出来てゐるのだから餘計の挨拶はせぬ事になつてゐる。むしろそれが禮であると見られてゐる。この方が男子として判つきりしてゐてよい。向ふの諺にかういふのがある。「人から恩恵を施されたら一生のうち一度返禮すればよい」と云ふのである。その反對に又一度招飲を受け翌日直ぐ返すと云ふ水臭い間柄ではないのかと云ふ云ひ方さへもある位だ。さう云ふ點が吞ん氣だと云へば吞ん氣なのだ。大まかであり細節に拘泥しないでよいのである。それで又よい事であると云ふ了解がこちらでは出来てゐる。日本に來ると、さうはいかぬ。細かく神經質的に一々返禮せねばならぬ。又そこに義理人情があるのだとせられ、それがやり切れぬので困りますと

云つてゐる中華民國人もある。大陸的と云ふか島國的と云ふか、こゝに確かに兩者の對立した氣持がある。慣れて來ると結局どちらでもよい事になるのである。その人柄を信じてしまへば、さう一々神經質にしなくとも宜しい事になつてゐる。然しそれ迄になるのに相當年月を要する。そこまで行かない事には誤解を生じ、感情の疎隔を來たし、嵩じてはつまらぬ不和の本ともなるのである。荒削りと神經賞との間にはかゝる溝を生じ易い傾がある。支那民族生活を留意して見てゐるとかゝる事實を無視するわけには行かぬのである。

上流名門の家庭に育つた青年たちは、やゝ斯うした繁多な事に慣らされてゐるかも知れぬ。けれども多くの中以下の青年、留學生どもはかゝる羈絆慣習から脱したく思つてゐる。そこで文獻の上から採り入れられてゐる古代儒教の慣習とか。又はその系統の所作禮法などに調子を合はせてゆく事は困るといふ。窮屈であるといふのである。四書五經の文獻から來てゐる禮節を以て、すぐ實在の上の禮節なりと見てゐるものからいふと、その社會層を異にする支那青年の近代思想は相當距離のあるものたることが判る。青年層の連中が日本に來て相當窮屈がることと事實とするならば、それは自國にあつても古禮を窮屈がつて居ることを反映せるものなりと云ふことになる。同時にこゝに時代の推移の點を加味して考へなくてはならぬといふことになるのである。

三、民族の同化力

嘗つて我が臺灣統治の問題に就いて某文官總督（名は暫く預つて置く）がその赴任するに當つて、或る理想を抱き日本式の立場から色々の方寸を樹立し、あれこれと赴任したら斷然實現せすんば止まずとの態度をもつて中央を立つまではよかつた。いよいよ本舞臺に乗り込むに至つて、兼ねての理想を統治方針の上に編み込んで見た處が實地に照して即應しない事夥しいと云ふので、その儘に立消え、遂にその當初の名案は引込めなくてはならなくなつたと云ふことを聞いた。具體的の事はここに觸れたくないが臺灣には不文律による民族特有の慣例風習があり、思想信仰があり、禮節があり、道がある。そしてその裏面には經濟問題がつきまとうて居る。迂つかり日本内地の常識とか漢籍の上のみから案を具して方針を立てたりなどしても、現場に親しくぶつかつて見ると大分勝手が異なるものである。臺灣を手習ひ草紙にしてゐると云つては語弊があるが、過去四十餘年の體驗は貴い。そして安い月謝を拂はされたものであると云へる。

文化的に見ると臺灣は文化的の強い同化力を持つてゐる。政治的には日本内地であつても、文化的に大陸文化の系統に基く思想宗教心をどつさり持つてゐる。臺灣では北港の媽祖をあれ

だけ喧しく撲滅せんとしたが、それが立消えとなり、遂に神社參拜といふ主流の勢に便乗し、三拜九拜を禁じ得なくなつた最近の事例から見ても、その一斑が窺ひ知られ、今や大陸經營と指導協力の大任をどうしても果たして行かなくてはならぬ使命を帯づた日本人としては、この媽祖信仰の事一件だけでも、とても有り難い示唆を興へてゐる譯である。自分共もその當初、島内當局の内地化の行過ぎにつき、少なからぬ不安と杞憂を抱いてゐた。事茲に至るべき路行きの見透しは内心つけて居たのであるが、遂にこゝに來た。これある哉と胸を撫でおろした感なき能はずである。自分はこの一事を以てすぐ漢族の同化を云々せんとするものではないが、しかしひとり宗教信仰の事と限らず、あらゆる文化方面の事に關し、さう皇軍の席卷して居る武力の戦果と同様に何もかもが、病人患者に行ふ注將の如くに效力靦面に考へるのは危険だと見てゐる。

こゝには決して大陸民族の同化力の強きを恐れるものでないが、しかし臺灣赴任前に机上の理想をいかに立派に立てゝも、現實は又おのづから別の持ち味のするものであることがよくよく判つてもらへたのを喜ぶ。之と同じことが大支那の文化政策の上にも考へられなくてはいかぬ。純理とか、皇道化とかもよい。漢族に日本語を強ひ、日本人が支那語を學ぶのを不見識呼ばはりする考の幼稚なことは、更に更に考へ直さなくてはいかぬ。いくらでも吾人は大陸情勢

に即應するだけの弾力性を持ちたいものである。毎々述べる衣食住の違ひ、信仰思想の違ひ、經濟常識深淺の相違、國體精神氣分の距り、（否根本的の相違のあるもの）に對して、この四年五年の武力戰で勝利を占めたと云ふ事だけから、直ぐ文化全體を日本の云ふ通り命ずるがまゝになると考へるのは大變な見當違ひである。又立案通り右向けと言へば右へと行くものだと考へる如きは最も危険である。支那の民族社會は今少しく複雑なものである。今少しく深みのあるものである。又少しくゆとりと幽玄味を有してゐるものであることをよく／＼考へに入れておかねばならぬ。一本調子の直線的に行く考へ方のみで進む進み方よりも、更に一步を進めて種々曲線的に進む進み方を用意して掛らなくてはならぬのでないかと思ふ。

日本は統制統制で統制の一元化で進む。固よりこれは結構である。外にこれといふ效果的のよい方法も見當らぬであらう。がしかし大陸支那は政治的に一元化も、二元化も出来る歴史を持つてゐる。更に文化的にはとても大きい同化力と云ふふうわりした微温湯の滋味を以て包んで行くこと云ふ一種の力を有してゐる。一總督の力を以てしても、尙考へさせられたといふ歴史的な微温湯の滋味を以て迫つて來るのである。それがいつしかふうわりと來る。昔の匈奴であれ五胡であれ、遼、金、元であれ清であれ、何であらうと、武力でいくら攻め入つた處で、仕上げを御覽じると計りじわ／＼同化力で來るのだ。あの支那料理の五味八珍で來るのだ。あの

文藝美術で來る。あの文字言語で來る。又あの人口の繁殖力と不老不死の妙藥で來る。阿片とか賄賂とか云ふ極端なものは別として、兎も角も手を換へ品を替へて文化的の大きい力で來るにきまつてゐる。又あの建築美と庭園趣味からも來る。あらゆる文物と色彩から來る。尙黄河と長江からも來るであらうし又泰山、廬山、洞庭、三峡と云ふものからも來るであらう。すべてこれらは古典文學と東洋道德の共通な氣分の持主たる日支兩國人には、悪い感じを與へないのである。だから必ずや同化力を日本人に及ぼさないわけにはいかぬ。又事實誰れ人にしても北京に遊べば、天壇、萬壽山、北海、八達嶺を褒める。江南に遊べば、中山陵、玄武湖、西湖、蘭亭、浙江の湖に紹興の老酒を賞する。同化と賞美とは考への態度が違ひますよと初めのうちだけは云つても居る。が、しかしやがて同化と賞美とがピッタリ一致した状態にまで至る。又そこまで來ないことにはあの康熙乾隆の文運も生れ出て來ぬ。太宗玄宗の奎文も芽生えて來ぬ。

悠久五千年の歴史を廻り大支那社會相の各方面を見て居ると、一木一石といへども皆花やかなる傳説的文化の結晶たらざるはなしと云へる。例へば貧農の門聯に掲げられる紅紙に忠孝傳家久し、詩書繼世長しとあつたり、五風十雨唐虞の世、萬紫千紅總べてこれ春とあるのを見たりしても、如何に含蓄のある文化の華であるかが判ぜられるのである。

忠孝傳家久。詩書繼世長。

五風十雨唐虞世。萬紫千紅總是春。

五族咸張獨立幟。萬民齊唱愛國歌。

書不讀秦漢以下。意常在山水之間。

相當氣取つた事を歌つてゐるところもあるが、要するに皆面子を尙び、文字の上に美しく理想抱負を反映してゐるものと思はれる。そしてこれらが不知不識の間に心を牽き、人を動かしてゐる。

四、改むるに憚ること勿れ

若し日支兩國の經濟提携が茲に本格的に成るに至れば防共問題、國防問題、國際問題、貿易問題など、對外關係の事も勿論忽せに出來ぬことであるが、何はともあれ國內の事は一つでも多く積み上げ築き上げるやうにし、悪事は一つでも撲滅剷除すべきこと言ふまでもない。この點で各省各地に事實上行はれてゐるケシ（罌粟）の栽培とか、又阿片の賣買とかの問題はどうか手を下さなくてはならぬ問題である。命よりも大事に考へられてゐるこの阿片はいきなり止めろとは云へぬ。いくら法律を出しても依然公然の祕事として陸に水上にと行はれ、旅館あ

たりでも自分の泊つてゐる部屋の隣室にその臭氣を體驗させられるのである。

臺灣では後藤新平伯長官時代、夙に之が遞減法を布き中毒者は順次その飲む量を減らせる事にきめ、爾來之が徹底を期してゐる。禁止の出來ないものときめてしまふ必要もない。長年月の中にはその方針さへ確立するなら効果あらしむる事は出來る。固より牢固として民族的な趣味性に根をおろしてゐるもの故、一朝一夕に之が根絶は不可能のやうである。張學良その他ミリオネアの若いものの中に、尙この遺風に耽れ中毒してゐるものをどつきり見る。がしかし多くは老翁たちに多い。青年者流はヤーピエンの語を口に發音するだけでも見つともないことと考へてゐるくらゐである。早晚止むことであらうが、然し地方財政の財源として罌粟の栽培を奨励し、之に課税でもしなくては、省費の運用がつかぬと云ふ如き怪奇の事情の伏在してゐるのをどうすると云ふ實際問題がそこに残るのである。阿片を人道問題や民族問題から云々するものはあるが、農政上の地方財源の方から親しく見て論ずるものは少ない。この方面は相當大きい研究問題として残るであらう。又それが印度からの輸入を餘儀なくせられてゐた對英問題にもからみ合つてゐる。租界の問題と共にこれはゆゝししい研究事項となるべきである。

支那は民族社會の上から見て、心の奥深き處に永年食ひ入れる事象くらゐ全東亞の進展に大きい影響を與へるものはない。その見地から、この阿片遞減の問題を考へると、とても絶大の

關係を持つ。臺灣でさへも容易の如くにして容易の事ではなかつたのである。況して支那の將來にとつて、これは難事中の難事として残る問題であると考へる。それと同事に更にもつと奥深く心の底の底まで喰ひ入らなくては始まらぬと云ふものがある。それは日本人の心と、大陸の民族の心との問題である。その兩者の接觸諒解並に深く信じ合ふと云ふ事、この問題は阿片をやめさせる事以上にむつかしい事だと人は云ふ。又その懸念があると云ふ一段下に人を見下してゐる人、又心の羽織袴のとり切れぬ人はいつも之を妨げてゐる。そのくせ之を譯ない事だと云ふ。武力解決だけで既に片がついてゐるではないかなど云ひ、涼しい顔してゐるものさへある。相手の文化の眞價を知り殊に過去三千年五千年の文物制度、並に日本の受けた恩惠の全面を知つてゐるものは、比較的に理解しやすく這入り易いのである。だがしかしこれは又直線的に孔孟の道を有りがたがつてゐる處から、周漢以前を重く見又唐宋以前に主力をおく傾があり、現下の各省各地の人心把握のことや、現地の事態に就ては馬耳東風であるかたが多いかのやうに思ふ。だから今月の支那青年をつかまへて、孔孟の信者そのものやうに一概に見てしまはんとする傾向すらある。青年はむしろ別の方面を向いてゐる。

支那は民族としても社會としてもそのメンツ（面子）をふみにじり、自分を馬鹿にして掛る者に對して、どこまでも抗するであらう。手足を以て抗するのではなく、心を以て抗するであ

らう。その代り虚心淡懐心から敬愛してくれるものに向つては、忠恕の氣分心構へで近づいて來る。そこには國境もなく人情も變りはない。個人としてはあの通り丸みがあり粘りがあり、そして愛すべきところがある。付き合つてゐて氣持を悪くされたといふ日本人は殆んど居ないだらうと思はれる。惡趣味の人間も多少居るか知らねが、その點は日本の方だつてお互様である。若しかりに双方の接觸を前にして、こちらから相手を信ぜず、そのダークサイドのみを難するならば、向ふからも同じやうに又香はしくない處をいくらでも指摘して來るであらう。その邊は膝を交へてよく語りよく教へ、そして互に苦き體驗として打明けべき事柄なのである。かうした日常の些細の事から氣まづい事が胚胎して來るのであるから、之に就ては、その機會をなるべく多く作るべきである。お互の缺點は、同居し同じ部屋にゐても氣付かぬ事があり、氣づいてゐても云ひにくいものである。

日支人お互のシツクリ來ぬ事又お互に解しかねる事は尙凡百にして足りないであらう。之を改めて貰ふやう注意をしないで、いきなり見下げる態度をとるのは穩かでない。又日本人は日本人間で、支那の人は支那の人の間同志でよく改むるやう努むることもよい事である。

中國青年への要望

一、中國青年の意氣

近來雜誌「遠東」に現はれてゐる時代の要求各篇は、中國青年の要望を物語つてゐる。東亞の和平建國の大業から、救國濟民と新秩序の建設、生活圏の増進と、民族文化の勃興など一として青年意氣冲天の情を反映せぬものはない。遠東の發行部數の激増するに比例して、民族勃興と大東亞百年の方策は、日に日に新たになつて行きつゝあるの感がある。

今日の支那は全體として尙戦闘を續けてゐる處もあるのであるから、従つて抗戰氣分に燃えてゐる者も相當澤山ある譯だ。然しその立場の如何に異なり、又その行掛りの違つてゐる者にしても、大東亞勃興と戦後の永久和平の確立を念としなない者はあるまい。嘗て事變前北支の或る青年で、自分に租界回収問題について次のやうに語つてゐたものがある。

「成る程租界内にゐると生命財産の安全は圖られる。けれども外國の法律で保護せられぬた
りするよりは、寧ろ不安であつてもよい。自國の法律、自國の雰圍氣内にあつて生涯を送り

たいものである。これがわれ／＼青年たちの念願とする處でありますよ」云々

これは生命財産を守ることと専念してゐる土豪たちの氣持を尊重し、殊に功成り名遂げたものの心境を察して自分が云つて見た言に對する青年の叫びであつたのである。ラオトル（老頭兒）あたりの氣分心構へから見ると、若い青年たちの氣分はとても相違し、かくまでに開きがあるのだ。その時自分は

「でも君たちにしても功成り名遂げた後いざ餘世を送らうと云ふ時になつたら、結局そこに來るのでないか」

と先きを見通して云つたら、泣いて云ふに、さうでない。斷じて然らずと止めを刺すのであつた。何も論議をしてゐたのでない。氣付いたまゝを述べてゐたのであるが、青年諸君は自分に對して偽らざる告白をして呉れたのである。民族主義、民權主義・民生主義から來てゐる青年の考へ、又新生活運動から來てゐる氣分信念の裏に流れてゐる考へは生まやさしいものでない事を知るのである。又必ずして遠東誌上に見えてゐる考へだけでなく、多少別の考へに燃えてゐる者が現地にはあるかも知れぬ。然しこゝには小異を棄てゝ大同に就く事を云ふ。もとこれ四海の内皆是れ兄弟である。儒教の云ふ處はかうである。兄弟が内輪喧嘩などしてゐた處で始まらぬのだ。次の時代にはきつと、今一段深刻な民族競争が始まるに極つてゐる。水深火熱

の苦しみに慣れてゐるとしても、出来る限りその苦難から免れるべく百年の大計を今から建てておかねばならぬと勿論である。

中國青年の意氣や嘉みすべしである。中國を愛し東亞を念とし大東亞の杞憂を除かんと救國の文化運動に思ひを致してゐる連中なのである。その至情はよく判る。よく膝を交へ互に話合つて見ると切々の情肺腑を突いて出るものがある。その邊の至情の流露するところは、時に日本のインテリ青年一般にも知らせたい位である。どうも日華双方青年インテリの交驩の機會の少ないのが残念に思はれる。これは獨り國內に居る青年だけでなく、日本に来てゐるもの、又マニラやバタビア乃至新嘉坡あたりに出掛けてゐる華僑邊りを見ると、一段と憂國の情に燃えてゐるものがある。誰れ人でも祖國を離れ、國外に出掛けてゐると、自國に残つてゐるもの以上判つきり祖國を見直し考へさせられるものが生じて来る。そこで勢ひ熱辯を振ひたくもなる。時に傍若無人の境に入ることさへある。その邊は恕して十分に云はせ、ゆつくり聽く雅量がなくはならぬのである。

南洋馬來の華僑の耳には、日本に香ばしからぬデマが放送されてゐる爲め、反日本の雰圍氣が漲つてゐると傳へられてゐる。英蘭本位の地であるから、さう信じさせられる理由もないではない。然し現地の有りのまゝの報告は、最近大分眞を傳へ訂正もせられ是正せられて來た

處もあると云ふ。在外華僑青年たちの考は必ずしも一致してゐない處もあるだらうが、それにして青年インテリの祖國愛に燃えてゐる點は一致してゐる。南洋馬來一帶は福建廣東の培養線となつてゐる觀のあるだけに重視せられてゐる。祖國現地の動靜は一々手に取る如く傳へられるのであるが、近來英蘭側のデマ放送の却つて信をおくに足らぬことに氣付き、日本を見直し、日本を信じて來たものもあると傳へられてゐる。でも眞に正しい認識の普及に到達するには相當時日を要することであらう。華僑はその出先きのニウスが事情環境に支配せられ、着色せられてゐるので一様でない。然し英米に祖國の廂を貸し、お母屋を取られるの考へ違ひはしないやうにして貰ひたいのである。萬が一かゝる輕擧のあることを信じたくないが、これは十分戒しめておきたいのである。

南洋馬來に出かけてゐる華僑は、泰佛印一帶を含めて、皆それぞれ定住地を以つて自分の本國同様、又は之に準ずるの處となしてゐる。従つてその出先は中國領域の外廓として自他共に許してゐる觀がある。華僑青年の氣構へのうちには人間到る處青山ありの潜在意識があり、上に蘭政廳があり又英政廳があるにしても、その實體、わけても經濟上の實權は八百萬の華僑の掌中にあること周知の通りである。そこに本據を占めてゐる華僑青年が意氣の盛んなるものを抱くは固よりである。それら青年インテリの足並みは大東亞建設の現階段に必要であり。又之

と密接なる樞機を握れることは想像するに難くない。祖國青年の足並みが一致し、新中國の勃興を助成し強化することは、今日興亞精神作興の上に大事なことである。かやうにして、中國獨立と自尊の意氣は青年の氣分と前途を明朗化してゐるものと云つてよい。

二、日本の求むるもの

日本は近衛聲明にも云つてある通り、領土もいらぬかねもいらぬと云ふ。唯求むるものは青年インテリとの握手融合である。潑刺たる青年の意氣はたしかに日本青年と合致するものがある。五千年の文化を有し、四海同胞の抱合力のある中國青年は大きく柔かく日本のインテリ青年と握手をせらるゝことが望ましいのである。

思ふに歴史的に云ふと、中國人は日本に對して先輩國を以つて任じて居た。正にそれに違ひはない。日本は明治維新以來の大車輪的努力により、今日の國際地位を獲得し、實力を養ひ來つた。これは自他共に認むる處である。子供のときの着物をいつまでも大人になつても着せようとしてゐる考へ方は無理である。そこには小癢など云ふ感じがしても始まらぬ。細かい理屈を並べたりなどしても始まらぬのだ。よく人は云ふ、日本は技術を出し、中國は埋藏資源を出せと。この式の事は書き立てゝ見るといくらでも列べられる。然しお互が握手融合の出来る氣

分心構へにさへなるならば、かゝる合辦氣分は問題でない。話の出来ぬ前から埋藏資源の數字だけを見て喜んで居るのも迂遠であるが、又技術を持たずして死藏したまゝ多寡を括つてゐるのもよい加減のものである。何れにしても興亞の偉業を前に控へてゐて勿體ない話であると思ふ。

青年インテリの腹の中には從來の行掛りとミエンツ（面子）がある。しかしそれよりは、元來は感情問題が介在してゐる事と思ふ。そこには英米から踊され焚きつけられつゝも割り切れぬ感情問題があつたことと思ふ。感情は溶ける時を俟つの外ない。油をさし援護するものあるときはそれを今すぐ沈靜させる譯にも行かない。問題はかなり複雑である。その進退兩難の立場に在ることも判つてゐる。しかしその焚きつけられてゐると見るにせよ、見ないにせよ、そこにはミエンツ（面子）論の微妙なるものが手傳つてゐるのだ。今となつてはその面子が利害を超越して深刻に働いて來た。血の湧いてゐる青年たちにはそこがよく判るであらう。自分の如き多年支那文化生活の表裏を味つてゐるものの胸にはそこが深刻にわかる。

處で物も相談である。どうせ歐洲戦争の終幕のあとは餘波が東亞に及んで來るわけだ。歌米の文化侵略、經濟侵入は火を見るよりも明かである。而かも赤ん坊の手をねぢる如く、又眞綿で頸を締むる如き態度で臨んで來るのは必至である。夜明け前のお互の勤めは之を食ひ止める

爲めの心構になることである。之を防衛せんが爲め、後悔のないだけの心の軍事同盟をするところにあるのだ。こゝに若し思ひを致し納得が行くならば、其の線に沿うて中國の青年インテリからも意見が出て欲しい。日支双方からの案を持ち寄り、懇談を遂げたいものである。一方のみ提案し之を他に押し付けんとする如き態度は賢策と云へぬ。私心をなくし、東亞を公となすの理念から出發しなくてはならぬのだ。他に踊らされて而も面子が立つてゐるなどと思ふものがあるなら、それこそ大東亞建設の上に誤れる禍根を遺すものと云はざるを得ぬ。

自分共は及ばずながら、中國青年インテリの知らるゝ如く、出来るだけ中國各地の風習民情等文化圏内の事を知り、之を全日本國內に傳へ、而も同情ある理解を普及させるやう努むるところに年あり。その力の遠く及ばざるものがあるが故に、實は今回の不祥事を見るに至つたと深く自ら省るところがある。然し同時に又自分は中國の青年インテリが、我が日本を解してゐるもののあるを喜ぶ。例へば隋唐宋の古美術が支那の本場に亡び、逸散してゐるに、日本正倉院にそのまゝ保存せられてゐるもの多き事實などの認められてゐることこれであるのだ。けれども尙一般には日本の實情を正しく解せざるもの夥しくあり、遺憾の極みである。日本の風習民情の呑み込まれてゐない處から無用の摩擦を生ずるとも少なくない。經濟、外交、文化各方面に於ては最も力強く指摘されたい處である。日本側に新進氣鋭の中國青年の存在輩出をと

かく等閑視してゐたと同じやうに、支那側は又自ら老大國を誇つて居り、新日本の姿を見縊つてゐた嫌ひがある。新中國、新日本の相互の確認交流は、今後新秩序建設の上に何よりも大事のことである。従つて中國から多數の粒選りの留學生の見えるやうに、日本の方からも中國實社會の研究員を出来るだけ澤山遣るの必要を痛感する次第である。かくしてこれからは双方お互に優越觀を打棄て、同一地平線上に立つ心構へで、同心一體となるだけの悟りが肝腎だ。次にこれまではお互に金看板の標語のみを掲げ、實行の伴はぬ場合でも平氣でゐた如き事は、信用を損ずる虞れあれば止める事である。そして名よりも實に即く態度を堅持して行きたい。その點に信用が出来なくてどうして握手提携が見られよう。

要は他から踊らされてゐることに、本當に先づ氣のつくことである。氣がついたならば卒直にお互掛引きなく打明け疑を除き、心の結束を堅うし、同心協力の實現に急ぐことである。遠交近攻の慣用手段が依然講ぜられるやうであつたならば、事變の處理はいつまでも覺束ない。英米と日本とを天秤に掛けるなら掛けて見るもよろしいであらう。がしかし遠い將來の見透しから云ふと、今日こそ決心すべきである。そして英米ばかりを見ないで、日本の研究認識に這入つてもらひたいのである。渡米渡英にはかねが掛る。日本へは安くて行けると云ふ事情もあるであらうが、かゝる安値の考へからでなく現下の國際情勢と大東亞結束の必然性から、日本

に來て、日本の眞の姿を見直し、日本人を信じ安心納得が行くならば、そこで握手提携と云ふ順序に這入つてもらひたいのである。

三、個人的の接觸

支那には日本の嫌ひな人が相當あるのであらう。同時に又日本にも支那の嫌ひな人がゐる。これは料理が口に合はぬと云ふよりもつと始末がわるい。知日派とか知支派と云ふものよりもいけない。感情から來てゐるものはどうも仕方がないのだ。然し同文同種の事柄にある關係か、碧顔紅毛の西人に對する開きほどの事はない。あれで不圖した事から若し香煙(タバコ)の火が欲しいと云ふとき、路上の中國人が洋火(マッチ)をつけて呉れでもすると。急轉直下感じが違つて來る。渡し船の中で手に提げてゐる荷物の紐が切れたとき、持ち合せてゐた緒を一本與へると、それが奇縁となり、俄かに心易くもなつたりする。又扇一本貸してあげた事で、莫迦に親しくなつたこともある。

人と人との因縁は面白いものである。何が奇縁となるか判らぬのだ。自分たちの體驗からして、マッチの火一つから、共に茶館酒樓に上るやうになつたり、芝居戲臺に案内されたりするともある。人はさう無雜作に他人に對する好惡をきめてしまふべきものでない。最初は食はず

嫌ひみたやうなものである。支那料理の味でもさうである。初め臭氣紛々と云つて悪く云つてゐたものが一寸した事からとても好きになり、會食と云へば支那茶館のみに足が向くに至る者さへある。漸次慣れて様子が吞込めて來ると、今度は深入りして、之を嫌つてゐた當時の事が可笑しくなる事もある。中日關係の上で考へられるものは色々澤山あり、一概に云へもせぬだが、しかし双方度を重ね、慣れてさへ來るなら親しみがおのづからその内に生じて來る。人と人との間では氣ごころもわかり心安くもなる。次で信用も互に仕合ふやうになり、約束すれば當てになる堅い人であることを認識するやうにもなる。勿論あちらでは當てにならぬ人もある。又澤山接してゐるとその中には立派な人格者だ、噛みしめると滋味の出て來る中國人と云ふのもある。最も信用のおける日本人に比べてさう劣らぬ安心の出來る人物もある。同様の事が又支那の青年インテリから見て日本人に對しても感ぜられる譯だ。

中國青年は日本に來て長崎に神戸大阪に、又横濱東京にと隨處に日本人に接し付き合つて見る。すると色々感ずる。そこには地方色もあり、個人たちもあることである。吞ん氣なのや神経質、潔癖性など十人十色だらう。でも中には相當立派な信用のおける人を一人や二人は見出すであらう。暇は掛つても一旦食ついたら放したくないと云ふ紳士も相當ある筈だ。お互に生き馬の目を抜く人間ばかりだと見てしまつてはならぬ。日本人中には几帳面過ぎる處、目

先のきゝ過ぎる處、氣の短かい處などひどく中國人と性の合はぬ處があるかも知れぬが、澤山淘汰されて行くうち結局よいのが残るのである。支那から來た青年インテリでも十年二十年と日本でめしを食べてゐると、その邊の味が噛みしめられ、日本人の性癖もわかり、事情も首肯せられて來る。又訛り言葉もわかつて來る。背に腹は變へられぬと云ふ語の意味まで悟れて來るのである。

徳川時代の小藩分立の餘弊は今尙遺つてゐるとも云へる。一望千里の大陸に人となつた者から見ると日本人は細かくはある。が又中々よい處もある。人生意氣に感ずと云ふ義俠心など、支那で見出しにくいものがある。同じく盡忠報國と云つても大分徹底したものがある。正成が正行と父子最後の別れに遺産相續の話がなかつたでないかななどと中國青年は刮つて云ふけれども、その話のない處に日本精神の美談があるのである。敷島の大和心の奥は一寸やそつとで探れぬかも知れぬ。でも交るに道を以てし、接するに禮を以てしてもうふなら、同じ東洋道義に生きてゐるお互の事であるから、相信じ安心をして提携融合が出来る。必ずしも難かしい事ではないのである。

所謂夜明け前に成すべき仕事のプログラムは澤山あるが、青年インテリに特に求むるのはこれである。自分は日本の青年にも筆に言葉に注入してゐるのだが、今又こゝに中國青年に之を

望んでやまぬのである。それには先づ人を嚴選することである。手数を要するだらうがそれは止むを得ぬ。偶々香ばしからぬ仁に接したとて、悪評されては叶はぬ。これ日支双方お互に云へる話である。夜明け前の仕事に自責の念を以て努めたいと思ふ事はどつさりあるのだ。が之が特に強調しておきたい點である。繰返して云ふ。日本の風習民情の實際と日本人、大和民族の本質について正しい處を見極め、親しく個人的に交り、その滋味を味つてもらひたいのである。

自分は支那の社會相の明暗兩方面を見てゐるが、支那の面子の爲めに先づその美點長所に目をつけ、之を認識し、採り入れることが出来るならば採入れたらうかと云つてゐる。同時に中國の青年インテリに望む處は日本をさう見縊ることをせず、日本語を研究するを手始めに、日本の美點長所の諒解を深め、その心を以て日本及び日本人を見直すやうにしてもらひたいのである。かくして新中國の建設と文化の振興に片手落のないやう致したいと思ふのである。中國青年の意氣は尊重すべく、之を大東亞の和平建設に役立たしむべく誘導することが、今日最も緊要事であると考へる。而も澎湃として高まりつゝある日本青年の意氣と相共鳴し、打つて一丸となつて進み、互に切磋琢磨し、互に又交驩をなし、彼我相來往し、談笑裏に春風駘蕩の空氣を漾はしむるに至る事を期してやまないのである。

第二編 盛り上る力

靜かに大陸支那の現在を思ふとき、そこに上下一貫した盛り上る力を感じる。新政府は大東亞共榮圈確立の爲に寧日なき有様であり、青年學徒は智識を世界に求め、時代の波に棹しよく目覺め、文化向上の推進力となり時代の輿論を指導してゐる。良民大衆は言はず語らずとも、黙々として生産報國に努めてゐるのである。彼らは目に一丁字なくとも農耕漁舟に、或は土木運輸の勞役に従ひ、その底力は侮ることの出来ぬものがある。萬古長春を稱へて盛り上る力の根源は、むしろこれら良民大衆に在ると觀てさしつかへない。この特別な國柄である大陸支那を東亞共榮圈の一翼とするには、そこにまた特別の研究が必要とせられる。唱へる側、和する側、そこに自ら日本とは別なものがあつた。少しく其の方面の研究を、項を追ふてふかめて行きたいと思ふ。

支那の長期建設

一、支那長期の二方向

日支事變に始まつたことでない。長期建設とはいつどの時代にも大事なことである。又急に朝野が之を強調するから必要なのだとか、強調しないからどうでもよいのだと云ふ性質のものである。民族として立つて行く以上、又國家として建つて行く以上、いつもその心構へで居るべきである。

支那は、いくさに連敗又連敗を重ねてゐながら負けたのでなく、奥へ奥へと引摺り込みつゝ敵を消耗させることに腐心してゐるのであると強辯してゐる。苦しい辯解ではあるが、天下に向つてはさう云ふ云ひ方の外にはあるまい。まさか支那の有識者インテリはその裏を知らぬ譯もあるまいが、事實武力を持つ蔣介石がさう云ふ以上、いくらデマでも負け惜しみでもそれを立てなくてはならぬであらう。廣東にも、武漢にも、宜昌にもそれから長沙へもどこへなりと引摺り込み、どこまでも餌で敵を吊り込み、次から次へと奥の奥まで續けて行く。そのうちに

袋の内の鼠にでもしてしまふと云ふ考なのであらう。それはとも角として、かう云ふ支那は一つの見方を以つてその表裏を見るの必要がある。

國民政府の武力の中心は、退却をくり返してゐるため、見たところ、おのづから西漸をす。又西漸せざるを得ぬのである。之に要人が伴つてゐるから政府そのものは貴陽へなり、昆明へなり、又重慶へなり、蘭州へなりと西漸する形になる。之を豫定と云つてしまへば豫定でもあらう。さうも云へるであらうが、事實は後退そのものである。得意になつて後退を喜んでゐるわけのものでない事は確かである。天下の黎民は戰場を見て居らず、第一線の實狀を知らないのだから、電文や新聞でさやうのものかと思つてゐるだけの事である。後退するもの内心の苦しさは想像に餘りありと云へるであらう。うまく行かなかつた軍司令を罪にして見たり、銃殺の刑に處して見たりする處を以つて見ると、決して得意顔で後退してゐるのではない事だけは判つきりわかる。

次に然らば果して武力の中心の後退はどこまで止まるのであるか、とめ度はどこか。蘭州か迪化か、庫倫か、ビルマか、西藏か、それともシベリアか、先は雲煙模糊としてゐて、逆視すべからざるものがある。匡山の戦の故奇を習ひどこか國境線の終極の處にまで行くつもりなのであらう。そこまでが長期戦としての終幕であるのか。そこがどうであるか。そこまで

來ても尙抵抗日を続け、あたまをさげないと云ふのであるか。それとも事實上あたまをさげても同様の形になつてしまふのであるか。蔣介石や陳獨秀あたりはこれからどう出るのか、つまり武力と要人の中心は今後どう動くか、合作の會議はどうきめらるるか。蔣介石を擁護するのはこの武力戦の斷末魔までやる積りなのであるか、又在米の華僑あたりは之に對して今後はどうするか。南洋の連中はどう出るか。ともかくも武力中心の抗日政權の行衛がどうなるか。この邊のところが今日大きい目標となつてゐるのである。

支那は國情が日本とちがふ。住民から見ると武力とか政權とかは、稻田の上を吹く風のやうに一過するもので、あとに残されてゐる住民自體は格別、殘念がりもどうもしない。政權と住民とは赤の他人だと云ふ氣持がしてゐるのである。従つて役人でもしてゐるものは頌徳表の何のと云つて騒ぎもした事であらう。それ位はやるかも知れぬが、いくら政府によい事があらうと、さう夢中になつてまで馬鹿騒ぎをすることはせぬ。させようとして引張るものでもあるとおつき合ひまでする位のものである。つまり住民はかやうな心構へにおかれてゐるのであるから、よかれ悪しかれさう日本人が思ふほどの事もない。それ故たとひ住民で兵にとられたものが、いよいよ討死でもするとき蔣介石萬歳とか、國民政府萬歳とか三唱をして死んだ實例が一度でもあつたであらうか。そこが、ひどく日本とちがふ處である。されば國民政府の武力の後

退したあとに残されたからとて淋しく思つたり、蔣介石の爲めに泣いたりする處のものを見た事がない。かやうに手合なのだから武力だけの後退から云ふと、いくら日に月の後退ばかりしてゐても、つまり稻田の上を吹き荒した風が、西方に移つて行つた形だ。あとに残された稻そのもの民草そのものは依然として中原にあるのだ。多少掠奪を恐れ、殺される事を恐れて山に隠れ、田舎に引籠つてゐるものはあるにしても、大體もとの省内どこかにゐるのだ。これがつまり國亡びて山河ありではなく、國亡びて民草ありと云ふべきものであらう。

日本はこの住民、民草を以つて敵と見てゐるのではない。だから、これ等とはシツクリ行くつもりなら行くわけである。さう簡単にシツクリ行くものと思つたら間違ひであるが、こちらの腹次第心持次第だ。信じ合ふ事さへ出来るならそれがよほど速くなごやかに行くのである。要は信じ合ふことなのである。しかし、武力方面から後退したあとに、尙未練が相當あるといふのか、手榴彈を使ひ刺客をつかひ、デマ宣傳の方法をつかひ、手をかへ品を換へて悪るさを續けてゐる。廣東あたりは放火をしてゐた。當分はまだ之が續くものと見られた。蔣介石側はあとに残されたものを唆かし、良民と日本人との握手に妨げをなす。妨害をくり返すことによつて長期の抗日をしようとする。次第に犬の遠吠の如くなるわけだが、尙相當執拗に試むることであらう。それに英米その他の宣教師あたりからの間接的なたづらも少なくないと傳へ

られ、そのニウスが這入つて来る。まさかとは思つたがまことしやかな事實談もある。これら白人からの露骨な妨げの這入つてゐることも含んでおかねばならぬ。

支那の武力による抗日ぶりを目標として之を敵視してゐても、今こゝに極端な場合を考へて見ると、かりに武力の輸入が止まつたとする。又極めて少量のもののみしか外から輸入せられなくなつたとする。そのときにあつても尙且つ支那は思想戦術を以つてし、又従來の續きのゲリラ戦術を以つて後方攪亂をする。それぐらゐの事は當分やめることはないものと見られる。たとひ武力を用ひることが全くなつたときといへども、尙依然としてあたまはさげず、抗日をやめず、どこまでも執拗に來ることであらう。

然し、支那の武人はいつ何時でも丸腰になる傾がある。もともと人も云ふ通りよい鐵は釘にならず、よい人は兵隊などにならぬのだ。丸腰になつてゐる方が本來の氣分にも合ふ。そして鉄をとり、又穴居生活をする。而も尙依然として、執拗に抗日を叫び、之を續けるであらうと見られる。ここまで考へておく必要がある。この場合であつても抗日看板を取り去らぬ限り、こちらとしては干戈をさめるわけにいかぬ。この點ばかりはお互にミエンツ（面子）もあることであり、向ふが向ふなら、こつちもこちらであるとする。双方共にあちらから、あたまをさげて來るならと云つてゐる。然らばそんな事をしてゐても支那は港と云ふ港を皆鎖ざされて

ゐるのだから、最後にはまゐるであらうといふ。ピルマの路や、ロシアが背後にあつても、蔣介石は結局のところ參るであらうと見る向きがある。一應さう考へらる點もあるのである。

しかし支那と云ふところは、年が年中冬眠状態を續け得られるところである。家屋にしても、窓が小さく、採光の工合なども日本人から見ると、とても我慢しきれぬぐらゐ暗い。年中あれでよいかと思はれる位であるがそれでもいゝのだ。却つてその暗いので氣分が落付いてよい。胡弓など弾するときもシンミリした氣分が出て、幽玄であつてよいと云ふ。人の心持も變れば變るものである。これであるから穴居の住まひなどもあつて、三千年間子孫孫と續けて行けるわけである。武器を使はないで、長期抵抗なんて云ふことはむづかしいやうに考へられるかも知れぬが、支那の人としては譯ないことだと思ふであらう。穴居といふほど極端の事と考へないにしても、極めて寒素質な暮らしをしてゐて、そして抗日を臥薪嘗膽式にやらうと思へば出來ぬ事はない。そこまで日本人としては承知してゐなくてはならぬ。一言以つて之を蔽へば、粘りのあくまであることだ。蒺藜草や刺身だけたべてゐる人には、あちらの奥地の住民にいかん生活力があるか、又いかに粘り強い體力があるか、いかに幽玄であり、禪味があるか、いかに老子莊子のやうな氣分心構へがあるかのところは判るまいと思ふ。この點をよくよく日本人としては諒解しておかねばならぬのである。

やゝもすると文化生活に狎れ、ネオンサインにあこがれてゐるものは支那は譯なくへたばるであらうとか、雲南や、四川、甘肅にゐて仕方があるまいとか色々取沙汰する。勿論浙江財閥の温床にあたたかくしてゐたものが、沙漠に近いところで冬越をするなんて感慨無量なるものがあるであらう。不自由をするは勿論のことであるが、しかしこの我慢強いことは三千年間の東夷西戎南蠻北狄からして、いつもいぢめつけられてゐる。水深火熱の鍛はれかたも一と通りでなく、合格してゐると云へる。そこを考へると昭和十六年からさき三十年や五十年はわけないであらう。少なくとも百年戦争くらゐは出来るものと考へてゐてよい。

物に飽ッぽいものは人の長期戦を國內本位に律しようとか考へる。支那民族はそこへいくと代物がよほどちがふ。絶對的にちがふと見て差支へない。これは大陸の衣食住なり、その他風俗習慣、信仰なり、文化の各般を仔細に味つて居るとよく首肯せられるのである。殊に日本人が茲に注意すべきは、その長期建設の事でも、人から云はれたり、政府當局から云はれたりして、始めて長期法を覺悟したり、又その方法を急に研究し始めたりするのはちがふと云ふことである。三千年來それで來てゐるのだから、少しも生活様式を變更することなしにやつて行ける。代用品騒ぎをしなくともやつて行けるのである。これは元始生活に近い暮らしをしてゐるのだから、いざとなると譯なくその目的に該當するわけである。つまりおのづから營んでゐ

る生計そのものが太古ながらの長期のレールに乗つてゐるのだ。自然の生活、自然の社會生活が、又その體制を變へることなしに、又強ひて大きい變制をしなくて、そのまゝ間に合つて行けるのである。雲南はケシ（罌粟）ばかりで物資が乏しいの、又甘肅は流沙の地で不毛であるの、どうも仕方がないところであるといふ。全くその通りであるが、しかし、それが日本人なら困るか知れぬが、向ふの人は閉口しない。元始生活に慣れた兵隊ならかゝる場合にいくらでも辛抱が出来る。そこに支那は大陸的な強みを持つてゐるのである。

而も一度民族的の不安を感じ、その外敵を防がうとする段となると、秦の始皇の前に既に万里長城を築き始めてゐた。燕の時代から、その大土木事業は開かれてゐたといふ。そして千年たつても、二千年たつても、遂に之をなし遂げたと云ふ粘りを有してゐる。地球上に人類として遺した世界最大の土木事業である。かゝる驚天動地の事もやりかねないのである。支那民族の長期と云ふ考は、あちらでは殆んど意識せずしてやる長期なのであるから、そこをよく含んでゐるべきである。

二、支那長期の特徴

支那の長期戦となれば、長いことは覺悟して居らなければならぬ。支那の長期は實はとても

本格的に嵌つてゐる。と云ふのは、例へば田舎の農村の風俗を見ても判る通り、田夫の青衣も、かみさんの青衣も、又長女の青衣も、何れも皆一色である。凡そ世界の國々の中でかくの如きはあるまい。これはいざと云ふとき、避難民として走らなくてはならぬのであるから、衣類も出来るだけ作らない。作るなら誰れにでも融通のきくやうにとの考から來てゐると見られる。穿ち過ぎた見方かも知れぬが、しかし何れにしても、かくの如く柄模様のない一色の青衣で、すませてゐる如きは、たしかに長期的であると云へる。それから又上に述べた粘りのあること、根氣のよいことは勿論であるが、自己の保身の目的に立脚した場合には如何なることでも貫徹すると云ふ心構へがある。その代り目的貫徹の爲には少々の事はおほ目に見る。これは城壁築城の手法を見ても判る。それは日本人あたりには氣に満たぬ荒つぽい疎茶なるものである。どうせやるなら今少しくきちんとした處まで手をかけたらよいと思ひさうなものであるが、そこが民族的の性分から來てゐる。細部デテイルにはお構ひないのである。従つて要人たちは參政會を開いて、長期抗日だなど嘯いてゐても、人民の方では既にいくらでもその方針とは別に親日防共を旗印として、さうして日本人と手を握つてゐるものもたくさんある。戦闘最中のときでもなく、村民が日本軍の爲めに、土囊を築くことに手助けをしてくれたり、船をかしてくれたりなどしてゐる。實にそこへいくと日本人の心構へと大分ちがつた人生觀を持つ

てゐる。或は住民自身は敵人などと日本の兵隊を見てゐないのであるとも云へる。この邊の心理状態が詐かざる支那の人の心理である。これであるからその導くに方法を以つてすればよい。接するにコツを以てすればよい。但しこちらに少しでもインチキ（隱的）なところがあつたり、その己の爲めにせんとする處があつたりすると、そこを看破せられるので目的は達せられない。

大きい所から見ると四億萬を導くにはよい言葉がある。三民主義とか新生活運動とか云ふもの以上民心を新たにして、而も福利増進の目に見えるやうな標語が要る。看板文字を見付けることがおけると、それだけ導く方法も延びるわけである。これは稲の田の上を吹く風のやうなものであるが、それが何でもないやうであつて、極めて支那に必要なことである。わけも人心の動搖してゐる今日、それが最も緊急を要するものと思はれるのである。又細かい處から見ると個人個人である。日本人の個人個人が大陸住民によく心構を示し、こちらを疑つてゐる點、誤解してゐるところのあるのを解くべきである。長期建設と支那側では云はないで、長期抗日と云つてゐるがその長期抗日も、こちらからの出やう一つで之を改めしむること必らずしもむづかしくない。大陸人の氣持は大陸人の人情に立脚したコツがある。たゞ此に考へなくてはならぬのは、漠然と之を大陸人と見ることなく、その間に之を裏面にあつて導いてゐる識者

階級なるものがある。或は大衆はお構ひなしに、唯識者同志の間でのみ抗日を云ひあつてゐるところもある。それらのインテリを如何に導くか、之をどう云ふ方法で接近せしめるか。若し武力戦のみの對支方策で日本が終始するなら、そのあとの識者との接觸は開かれないうまゝで行くであらう。

元來云ふと日本とちがひ、支那は武力戦に不得手であり、あの通り武力のいくさには負ける。いくらデマを飛ばしては見てもいくさには勝てぬ。事實上後退である。ところが、文筆とか又口舌とか、その他武器を使はないで出来るいくさであると、これならいくらでも永く續きもするし妙策も出る。これが支那側の特色であり強みである。本當にその點になると親しく支那世相を見てゐるもの、又支那の人々に接してゐるもの、親しく認めるところである。土本工事の荒つぽくて粗野である如く、その文筆や口舌の方に於いても相當よい加減の隠的もあり得る。しかし、概して云ふと武力以外の事になるとともよい智慧を絞る。そして巧妙な策を弄しもある。その間の腦漿は日本人あたりに見ないものを持合はしてゐる。

日本人は支那が武力戦で敗走又敗走をくり返してゐるからとて之を侮つてはならぬ。又負け惜しみのデマをくり返してゐるからとて、之を無力なものとのみ見縊つてしまつてはよろしくない。どうかすると一克であり、物を單純に見てしまふ傾のある日本人は常に之を侮つてし

まふ。今後の大陸の文化工作再興の如き偉業の實績は何としても、支那の人自身の手による外ないのである。古來の秦の文化と云ひ、又漢魏六朝隋からして、唐宋元明清の文化にしる、すべて皆大陸人自身の手でなされ、集大成せられたものである。されば文化方面の事は、之を長期にわたりいつも支那の人自身を本位として考へ、日支兩國の爲めに、又日滿支三國の幸福増進と云ふことが、主眼とならなくてはならぬのである。民族全體をなごやかに丸めて行く手段に至つては矢張りあちらの人の手にあるものと云へる。ぎこちない方面の得意であるものと、そこは自ら専門分野が別々にならなくてはならぬ。長期の特質はそこに於いて文化方面に支那側をして向はしむべく、又この方面で康熙乾隆くらゐの燦爛たるものを發達せしむるやうに仕向けなくてはならぬと考へる。皇紀二千六百年を發足として、長期の覺悟は日本人たるものこゝに目標をおいて考へたらよいのでないかと思ふ。

三、「徹底的」の支那見解

日本では朝野をあげて皆「徹底的」と云つてゐる。上が云へば下も云ひ、下が云へば上も云ふ。國を擧げてそれこそ徹底的に徹底と云つて居る。これは日本でいくら日本の文學あたりで行けども行けども果てしなき廣野原と云ふが如きものである。日本ではいくら廣野と云つて見

たところで關東平野か北海道札幌の平野くらゐのものである。大陸に渡つて見ると滿洲にしる支那にしる曠野などいくらでもあり、平野にしたところで北海道の十倍も二十倍もの廣いところがある。日本人が日本の中で徹底と云ふところは、支那の大陸地理を知つてゐるものから云ふと、比較にならぬくらゐ隔りのあるものであることを豫め承知しておかねばならぬ。かりに支那の方では徹底など云ふ考はないかも知れぬが、それにしても「徹底」を考へるならば、そこにはとても桁のちがつたものが出て來ることを豫め考に入れておくべきである。利根川と長江とをとつて考へて見ても、長江の實際を承知してゐるものはたしかに桁違ひの事がわかる。民族性の發露はその住民たちが故意にさうしようとしてするにあらず、全く自然と出て來るによる。力瘤を入れて特別に出さうとするものに非ず、三千年の歴史的の力としてまた民族の動きとして出るものに外ならぬのである。されば若しかりに「徹底」と云ふ事が、この事變に出て來るとすれば、その深さやその幅は利根や、關東平野の比に非ざるものがおのづから出て來ることを豫め知つておくべきである。

いく度か國を亡ぼしてしまつた處はあとに山河が残る。國亡びて山河ありである。而も民族は大陸にそのまゝ永久に残る。國と民族とピッタリ合し、その國家が危ぶなくなつても、民族が衰へるのではない。この點で支那民族は始めからよほど氣樂なところがある。それであるか

ら「徹底的」など云はないでも濟むやうである。どうでもよいと云ふ氣分がその裏に流れてゐる。そこに日本として見るべき大事な點が潜んでゐる事に最大の關心を持たねばならぬ。

一人だけで呑み込んでゐて「徹底的」では時として相手の意中のわからない爲めに飛んだ不覺をとらぬとも限らぬ。こちらだけで「徹底」と云つてゐることが、存外向ふへは響かぬこともある。コレデモカ、コレデモカと疊みかけて見たところで、相手が大陸人であり大陸の民族性で、三千年來鍛ひ慣らされて來てゐるときは割りにこたへぬこともある。振りあげた腕の五年も十年もたて續けにあげ通しではくたびれるであらうと見て、存外いつまでも平然として悠々と構へ、こちらの草臥れるのを待つてゐる。支那人の徹底の見解は著しく日本のそれと開きのあることに氣づいてゐるかどうか。自分で承知してゐる「徹底」を口外にする前に、大陸にはどれだけの深さ、どれだけの潤さ、又どれだけの粘り強い「徹底」のあることを研究しなければいけない。まして奇想天外の徹底さへ考へつくことのある民族性をもち、且つ國亡んで山河ありとの體驗さへ持つてゐる相手であることを十分によく認識してゐなくてはならぬ。迂つかりと物は始められぬ。これは謎のやうな話であるが、しかも心ある人、裏を讀み得る人にはよく判る話であると思ふ。

徹底的にやつてしまへば必ず日本は勝つよ。とこれは痛快な言であり又誰れでもさう考へて

ある語である。「徹底」と「勝つ」と云ふ事はそこに必ずコネクションがあるものと前提して考へてゐる。又それで安心もしてゐるのである。ところで茲に今少しく實際問題として石橋を叩いておかねばならぬ事がたくさんある。先づ

その一 つ勝つと云ふ快報を現実ににぎる爲めには、支那が自分の意思表示で日本に向つて降参したと云ふことを云ひに来る事實が生じなくてはならぬ。たとひ仲裁者が現はれることあるとしても、ともかくもかゝる支那側の自發的の氣持ちが出て來ない事には始まらぬその二 對手が今かりに降参したといつても鵜呑みには出來ない。又かくの如き事をさせるべきでない。上海事變のときなどは、停戦協定の直後に白川大將までうたれてゐる。結論のなき事變にすぐ安心をした事をやるとそれが却つて不覺をとる原因ともなるだらう。このあたりは餘程微妙である。

その三 相手がまだ負けたとも降参したとも云つてゐないとき、徒らにこちらでのみ相手を侮つた態度をとることは却つて不慮の大失態を招く虞れがある。その爲め萬が一つにもこちらでのみ獨りぎめの勝利を相手につきつける如き事があつては勿論よろしくない。國民がかくの如き事を考へるだけでもよろしくない。それは永久に勝つたことになつたのでないからである。

その四 勝つと云ふ成算のある以上は、九十五%か百%ぐらゐの勝ち振りではなくては意味をなすものでない。勝つてもへトへトになつてしまつては眞の勝利ではない。そこに總力戦の深い意義がある。

日本人の常識は日本で生ずる考である。大陸のカラタチは日本のタチバオと違ふ。日本の櫻は支那にはうまく咲かぬ。どんなに咲けと叫んでもうまく咲かぬ。「徹底」のあとにすぐ向ふの降参の言、これは日本の裁判所に於ける被告の泥を吐くが如き調子とは違ふ。死んでも泥を吐かぬ手合が澤山あちらにゐる。暗から暗に葬むられて行くもののみであると云つてもよい位である。

辯護士の方では勝訴か敗訴かどちらへかきめられてしまふ事のみである。がしかし支那の事は民族性の上から見てもさう白か黒かにきめてしまふわけにいかぬ事が多い。又あちらの人はきめなくてはならぬと思ふ氣分のしてゐない事がある。それをあせると勝てる事が勝てなくなる勝ててゐる事でも事實あせり立てるものだから、敗北になる例はいくらもある。支那得意の十八番はこゝにある。そのワナに落ちてはいけない。

「徹底」のあとの時局收拾はどうする？。また誰れがやる？。どう云ふ線の太い政治家がゐる？。安心をしてまかし得るものは誰れか？。國民の輿望を無理につけるのでなく、眞にその聲

望の備はつてゐる人は誰れか？。それはあとの問題としても「徹底」から「勝利」而かも鮮かなる勝利を生み出し得べき道筋徑路はどうなるのであるか？。つまり向ふが降参の形を以つて來ることを信じ得るならば、時局收拾のことなども自ら考へ得ることだ。がその刹那の機微に至つては曰く云ひがたいあらゆる場合を研究しておく事が大切である。此度ソ聯や英米と握手した重慶側に對して相互日本側の採るべき、事變處理大策はいかなるものであるべきか。

四、長期の大陸民族

支那は理窟の國ではない。何でもが長期にわたり、長い間におのづから解決されて行く國なのである。つまり時が來たら片付く。時が來なければいくらやんやんあせつて見たつて何ともならぬ。あせればあせるほど損をする。これは英でも米でもソ聯でも皆列國はよく心得てやつてゐる。英も萬縣事件以來十數年の間そのコツを自得して、いくら香港で一年半の排英が起つても、武器一つ使ふことなしに隱忍し、じつと考へてゐて、そして遂に對策の礎地を築きあげた。かれこれ二十年近い辛抱をして來てゐるのである。

支那の排日抗日も約二十年間續いた。すべて桁が大きく、そしてゆつくりしてゐる。決して決してあせつてゐない。一年の商取引勘定にしたところで正月、五月、八月の仲秋節くらゐの

三度にわけてゐるだけである。大まかでゆつくりしてゐる。長期を覺悟しないで、あせり氣味の態度で臨むときは、必ずや見事に失敗をするであらう。戦線がひろがつてゐる處へ、尙且つ短期に片付くことを考へるなどは、大陸支那を知らないのも程があると批評されるであらう。又あのひろい長江の水、あの遠い山の姿を見てゐるならば、長期の外に何物をも老へ付かないであらう。

かりに淡白に云つて見ると、日本人は皆勝つことを信じてやつてゐるが、その時局收拾のとき、かりに今日日本の考へてゐる通り、日本が勝ち支那が負たとする。そのとき日本の方から勝つたにつけて要求をする條々があるであらう。要求される側の身になつて見ればどうせ損をするとなつたら引張られるだけ引張るであらう。これは必ずしもいくさのときのみでない。支那が要求するあらゆる場合を見ても、そのときのゆつくりさ加減はとてとてもである。悠揚迫らぬところがある。山遠く水長き國に人となつてゐる住民の事であるかな、あせらないのは當然過ぎるくらゐ當然のことである。

事變の裏には必ずやそこにいくさの間であつても、ゆつくり互に相對峙し、少しも進まぬところがあるのである。ましてこれが時局の結末と云ふやうなときになると、あちらの得意の外交交渉に入る幕となつたら、支那一流のやり方に這入る。本舞臺に入るのである。そのときは支

那三千年の歴史がひらめき、三千年の文化がひらめき、風俗・習慣・人情・氣分・凡ゆるものが、これぞ總力式の長期ぶりを發揮する結果となるであらう。あたり前の事である。

ABC Dの對日包圍陣が進むにつれて長期が一段長期となる恐れがある。そこへ指して行けども行けども果しない大陸の山川と同じやうに戦争の前途も結論なく續く氣がする。いつ片付きさうもない。向ふはあの通り一度占領した處を何回でも根氣よく攻めて来る。しつこく思出にやつて来る。五年でも十年でも来るかも知れぬ。元來あちらには占領されたと云ふ氣持はなしのかも知れぬ。永久に攻めて来る。いつになつたら止むか判らぬ。何年でも續くであらう。たとひ停戦をしても又打ち出すかも知らぬ。とめどがない。よしいくさはやめたとしても、外交で又腹いせをするであらう。その方がむしろ本當の平和のいくさになる。こんなわけであるから抗日など永久に續くかも知れぬ。こちらが例の「徹底」で行くならその覺悟で永劫抗日の心まで養ふ結果になるかも知れぬ、多分にその虞れがあるのである。その邊は戦と同時に、その裏を流れる民族性の内容を研究して、どこまでも不覺をとらぬだけの用意が國民の間にちやんと出来てゐなくてはならぬ。やつてゐる人が日本にゐてくれてゐるのか、どうか。あとの收拾の本格的の幕に這入つたとき、その邊はどうするつもりなのか大いに研究する必要がある。

思ふに長期を覺悟しないでやるやうな仕事は支那の舞臺を知らない迂人のやる事である。一

度足を印するものは四川巴蜀にまで入らなくては最後の幕にならぬくらゐの心掛けはあつてほしい。長江江外百五十哩の黄色の海上は何の爲め染められてあるのか。奥地三千里の深いかくられた本流支那の勢を潜在せしめてゐるからこそさうなのだ。苟しくも支那の事に手を染める以上は、すべて長期長期、長期でなくては夜も日も明けぬ。

長期に亘つてヘコタレル心配があるくらゐなら、始めから係り合はぬが賢明だ。くたびれさせるなど云ふ細かい事は、相手は考へてゐないであらう。しかしくたびれる事は事變の結果を最悪に導く魔の線であると思ふ。

支那民族を日本人は本當にどう見てゐるか。攻撃と占據と爆破、これだけを例の徹底的に最後までやつたらすぐ日本へ降参に来るにきまつてゐると云ふ。斯う言ふ人に向つて自分は、必ずさうなるとどうして考へられるかと反問して見ると、次に必ず、さう出て來ないわけはないと獨りぎめした言を吐く。そして無言になつてしまふ、さうならないことがあるものかと來るさうした想像、獨りぎめで満足をしてゐるならば自己満足である。支那民族性の上から見て公平に云つて、また歴史的に見て又その民族のメンツ（面子）の上から云つて、直ぐ降参しないことは分り切つてゐる。

支那の人々はその生活の方面から見ても、よく安價な生活に堪へ得るものである。いくら港

が閉ざされようとかする。港なくして五十年でも百年でも生きられる。三千年來穴居のみをくり返してゐる手合さへある。そこにはしかし例外としても、よく臥薪嘗膽し得るものがどつさりゐる。こちらが効果ありと痛快がつてゐるほど、あちらは困つてゐるのでない。實際の支那の内地を奥深く歩いて見てゐるなら、多少その間の消息はわかるのである。支那民族と云ふものはかやうに出来てゐる。

また例の「徹底」であるが、これについても「徹底」の直後に來るものは即ち「降参」なりなどと思ふは支那の民族性から見てどうかと考へられる。そこは少しく研究をして見たいと思ふ。狸の穴を打ち毀したからとてすぐ狸公がそこへ顔を出すものとは思はれぬ。出すかも知れぬが出して來ぬかも知れぬ。そこは判らぬと見て更に研究すべきである。又トコトンの處まで破壊され殺されてしまつたら果してこちらの望むやうな工合にこちらに尾を振つてやつて來るものであるかどうか。相手の心理を今少しく調べてゐるあたまで考へ直さなくてはならぬ。

水道の水でも寒中は多少絲の大いさくらゐでも出せばなしにしておかないことには、零度以下五度とか云ふとき氷結して管は破裂してしまふ。少しの水を出すやうにしておかないで、何の心があつてかこちらに聯絡のとれるやうにならう。そこいらの外交心理又民族心理のわからぬやり方をしてゐるものが若しあるとするならば、あとはどうなるか甚だ暗い感じを全局面に

投げる虞がある。

そこに水道の水を垂らせるだけのゆとりをつけず、唯文字通りの徹底などと云ふのであつたらどうしてあとの收拾が出来るか。近衛首相は或る文化工作を考慮してゐると云はれたが、それのピントが外れたならば逆効果を生ずる。あとの經濟提携と云ふ楽しみも何もすべて徹底しない事になる。のみならず包圍陣英米をして却つて喜ばせる結果となり、支那自體を永久に救へなくしてしまふ形にもならう。

この見方は悠久な支那の民族性を考へ、また東亞百年の大計の上から云ふと益々その感を深くする極めて判りきつた話であるが、これが今の世に誤解されたり、又眼前の感情の爲めに將來を誤るやうな寸光鼠目流のものもあるから、どうしても之をこゝに明言しておかねばならぬ。

支那はどこへ行く。日本人にとつては最も重大關心事であると云はねばならぬ。これは所謂「徹底」といふことでいつぱいになつてゐる日本人の將來の事を考へると、共によほどこゝに深く考へ、大いに研究をしておかねばならぬ事であると思ふ。

支那はどこへ行く。これは事變のあと始末と深い關係がある。先づ二と二を加へて四になると見てゐるのは或る人の算段である。支那の民族は必ずしも二二が四となる理窟めいた事には目

もくれないかも知れぬ。これは今迄の幾千年のやり口と、その心理作用を見ればすぐ判ることである。必ずや二二が四以外の意表に出た態度をとることであらう。

次は支那人の「徹底性」を理解してかゝらねばならない。彼等は毎日朝晩の一刻一刻をもつてすべて非常時なりと心得てゐる。國があり政府があつてもその實少しも之を信する氣になれず、自分自身が自分の生命財産を守つてゐるところなのである。だから支那は今日いくさの状態に入つてゐるもの、不斷からだつて四億八千萬のものがすべて用心し、すべて平和のいくさの心掛けである。油断もすきもないと云ふ氣持はすべての人にある。これであるから四億萬に分裂することあるも尙且つよく生存し得る。況して政府組織や法律的の分野から離れて、パシ（幫）の社會的組織も儼存してゐるところである。相互扶助で以てどうにかかうにかやつて行ける體験も十分に持つてゐる。つまり一向困らない立脚地點を持つてゐる。そこに最後のたのみとする強みを心内に深く藏してゐるのである。

日本人が日本流に考へて五ヶ年や八ヶ年であちらが困り抜くであらうと云ふ風に見る前に、今少しく大陸並に大陸人の心理、慣習、性狀、つまり臥薪嘗膽ぶりの事を深く深く察し、親しく見てゐなくてはならぬ。そこに研究調査を深めて行かない時は、こちらの見た勘定が違ふと云ふことから腹が立つて來るかも知れぬ。そこに事變處理の上に大きな見込外れが來るであらう。

支那をして安居樂業、東亞共榮圈の一翼に發展させるのも、或は猜疑と混亂、東洋の噴火口たらしむるのも、一にかゝつて和平工作への指導いかんにかゝるのである。然るに重大なる將來永劫の和平工作への扉を開く大業の基礎を作り上げることはお互の責務である。朝野をあげてこの次に來るべき和平工作への偉業に入るに先立ち、まづ以つて大事なことはこの支那民族性の内容をよく知り、之を確かめ十分掘りさげたところまでメスを入れて、その特性並にその持ち味といふものを第一ほどよく見極めてからやらなくてはならぬ。五十萬からゐる在留日本人が各地にゐてこの事實のうらにどんなことがあるか。支那はどこへ行くか、英米はこれからどう開直るかを卜する上に、これ又重大なるポイントに來てゐると察せられる。この邊を考へ支那はどこへ行くと云ふことには裏おもて色々の見方があり、同時に日本としても「運命」を賭してやつてゐることなのであるから、これが回天の大事業であるだけに、本當に心身を打込み民心融合の悠久の仕事に打かゝらなくてはならぬことになつた。

新政權の裏を流れるもの

一、民心を軌道に乗せるには

四億八千萬の民心を如何に軌道に乗せるか、この問題くらい大きい課題はないと云つてよい日本では人が口さへ開けば何れも皆尤もに聞える事を切々説き去り説き來たつてゐる。誰れ人と云へども國を思ひ東亞の安定を念とせずして辯を好み言論をしてゐるものはないが然しこゝに最も大事な事は支那があれだけ古い歴史を持ち、又あれだけの廣さとあれだけ多數の人口を持つ國柄であるから、宛ら身體に注射をしてその効力が瞬間に現はれると云つた式のあせり氣味の心構へ態度を持つと大變な手違ひを生ずると云ふ事である。日本では互に自然四周の環境があせらざるを得ぬ事情にある爲めなのであるだらうが、あの大支那民族と社會を相手として變處事理の使命を完遂して行かうとする時、一般の氣分態底が手ツ取り速い處を念としてゐると云ふは、甚だ辻褄の合はぬ事でないかと思はれる。

地を替へて支那側の人々の身になつて見る。そこに歴史的に長い體驗もあり、又自分の大地

の實情を百も承知してゐることでもある。だから別段さう心あわたゞしく結論を急ぐべきものだとも思つてゐない。結論の永久にない國ではあるが、要領の飛び石の處だけは把握してゐるそしてあとは少しもあせらうとせぬ。又あせる必要もないのである。あせる事その事が既にあちらの民心把握に妨げになる。日本の國土の狭い所に住み慣れ、氣早いもののみでこれまで事を進行させてゐる。その行き方で大陸を律すると不釣合になることが多い。これは大陸の風俗習慣が、日本のそれと異なる處の多い爲めである。のみならず複雑極まる事相がいくらでも伏在してゐる爲めである。その爲めさうすぐの事にはいかない。貨幣の上で札(サツ)やピヤオ(票)を作つて見たところで、五圓なら五圓といふ文字で宜いやうであるが、札に五圓と云ふ字は見慣れてゐない。それは必ず信用の出来る「伍圓」と云ふ文字に改められるべきである。さもない限りその票が信用されぬと云ふ事情もあつたりなどする。判りきつた事ではあるが、日本の五圓の文字と違ふ心理がそこに充ち満ちてゐる。支那にはいつも支那の慣習がある。慣習に據らなくては人心の牽き付けられぬ處がきつとある。一事が萬事である。日支は同文同種だからとて、頑張つて見たつて、矢張り尊重する處は尊重する氣分が必要なのである。力で押し通すこともよいが、同時に慣習民情に培はれた浪に乗つて進行することも、大事な民心收攬上の一秘法なのである。

慣習そのものはどこにしたつて郷に入つては郷に従へと、昔から云はれて居る位に既に自明の事柄なのである。慣習に従ふ事は畢竟保護色に便乗することを意味してゐる。保護色を利用し自ら保護色そのものに合流し、その土地の各層のものと、共に上下し、共に慣習の浪に乗つていくこと、これは特別に秘訣と云ふ程のものでもないかも知れないが、その平々凡々の態度のうち、人心の把握が自然と出来るのである。この方法によるならば萬民が之に順應してくれる。否むしる反抗せんとするものも出て來なくなるのである。これぐらゐの勞少なくして功多き方法はないと思はれる。

固より今は新國家建設の際の事として、何もかも總べてが以前の舊慣の型に據つてゐるばかりでもいかぬ。日本で葬式が靈柩車の自動車までを利用發達させてゐると云つた式に、時代の色をよくとり入れなくてはならぬ。さう云ふのが相當にある。自分共はやゝもすると支那の舊慣に懐かしみを覚えてゐる餘り、古例順應の氣分があり過ぎる傾のあることも自覺し氣がついてゐるのだが、しかし同時に支那は四億萬からの民衆を持つてゐる。さうその今注射をして俄かにピンピンするやうな譯にいかぬ。新らしい型にすぐなじみ來たるものでもないのだ。そこには民心把握の大事なコツがある。その國の慣例古俗は人心の據つて以つて大黒柱ともなつてゐる處であるから、之を尊重する立前で進まねばなるまいと思ふ。

こゝは原則として心掛けておく事を根本的に重要なことである。その純眞な東亞を思ふ動機から、餘りに日本式に硬くはり過ぎて支那の事までも日本色の一と色に塗り潰してしまはねば承知せぬと云ふ態度になつてくると向ふでは迷惑を感じる。規則規約といふ條文連發のやり方の如きもその一である。文律を先づ作つて、之でもつて民に峻嚴に臨む如きことは悪い事ではない。然しそれですべて押し通うさうとするところに十分の効果を擧げ得られぬ處がある。あちらのだらしなき舊慣を見さかひなく認めて、そして無制限無軌道にやつて行くことは固より感心せぬが、しかしその不文律の間によい處がかなりある。從來の舊慣によい處のあつた場合には、それを認めると云ふゆとりを存してゐることが、人心收攬の上に大事なことであると思ふ。又さうすべき事であると信ずる。勿論時としては抜き差しならぬ規則でもつて縛り、きめつけて行くことは行政上よろしいが、成るべくは弾力性を持たせ、ゆとりある慣習は之を認めてやり、それによつて無理のあたらぬ方法をとり、放任式に指導して行くことだ。その邊に本當のコツがあるのでないかと考へる。冷たく當ることのみに努めるとすれば、益々その潤ひのない政治となる。これは人情自然の行き方の上で考ふべき事である。

すべて人心の機微は物の裏を流れてゐる。裏の流れを察せずして表面化した處だけから物を見、それでわが事成れりと斷定し、安心が出來たとするなら、そこに如何なる危険を孕んでゐ

るかわからぬ。日本式に事を押しあて之を呑み込ませ、又之に準據せしむるやう訓練をすることも時には必要なことであるだらう。しかし風習感情民族性を異にし、又風土生活様式の開きのある大陸住民をして、いくら日本が指導者だと自ら誇り顔して見たつて相手にうつらぬ。直ぐこちらに心から共鳴の出来る氣持になるものでもあるまいと思ふ。表面は共鳴をしても腹は判らぬ。何れ追つて腹をきめるものとしても遅くあるまい位に慢慢的に考へる。中には最後まで腹をきめ兼ね、自分は自分の民族性で、自ら耕し自ら食らふのだと云ふ千古の不文律で一貫せんとするものも相當あるであらう。民心を軌道に乗せて行かうとするには、その處に一番苦心の要るところがある。

二、奥地良民の心境

古くから支那の良民は度々爲政者に欺かれたり、相憎をつかさたりして馬鹿を見てゐる。だから今日の政治舞臺でも三年五や年で之が全面的に牽き付けられるとも考へられぬ。良民側としての心境のそこに來るのも尤もな事である。蟲のよい事をいくら列べて見たつて聲明は形ばかりのものだとしか考へて居らぬ。苦勞をし抜いて來てゐるのだからオイソレとは軌道に乗つて來ないのである。

問題はちがふが、法幣下落の問題で天下はかなり囂々である。重慶側のかねではあるが、しかし今後支那のあと片付けは一つに懸つてこの法幣問題であると云つても過言でないやうに思はれる。この場合に支那民心の法幣に結び付いてゐる考へ方なり、又自分共の最近の渡支の旅で體驗した處なりから考へて見ると、何と云つても將來に對する永久的な幣制の改革は、その地方地方にゐる省民の認むる省政府で發行が出來て（實は蔣介石時代にあつたのであるから之を買収するなり復活せしむるなりして）それによつて省の認むる札が出るやうになることが、何より一番信用の繋がる所以であると思ふ。これならば何と云つても地方にゐる民なのだからその省の發行に直接の關係もあり、又害も共通してゐるわけになる。それだから實際的であつてよろしい。地元の礦山なり何なりを目當てにして出されてゐるならば、まさかの時それが押へられると云ふ安心したものが出來る。そこへ來ない限りあの廣いあの複雑極まる國で、今日慘落の一途を辿つてゐる法幣を、どう處理しようなど云つたところで中々巧く行くものであるまいと思ふ。結局法幣から軍票にも雪崩を打つて悪影響が及んで來るのであるから、この法幣のことは對岸の火事視してゐられぬわけである。

民心の打診には何が一番恐ろしいことかと云ふと、この法幣に對する民心の不安といふことである。相場の上で軍票その他日本側のあらゆるかねが下がらないてゐて呉れるならよいが、

そんな譯にはいかぬ。相場が下ればどうしたつてその結果物價暴騰を來たすこと云ふまでもない。従つて四億萬の住民は氣持が晏如として居られなくなる。經濟眼にかけて神經過敏の支那朝野のものがどうして之に對處し得るだらうか。事變後の大きい問題はこれである。問題はこれより大なるはなしと斷じてもよいでないかと思ふ。人或は云はん、若しこの際、田舎の各省にわたり家宅搜索でもしたら毎戸巨萬の銀貨の祕藏せられてゐるものが發見せられはしないかと、これまことしやかな話である。又ありさうな話でもある。けれども事實リース、ロスの貨幣統一の事業の行はれてから、在支の銀と云ふ銀は悉く吐き出されてしまつた。海外に流出したのである。そして隠匿してゐるものがあつたら判り次第酷刑と云ふ事であつた。そこで殆んど今は見えないと云ふ事になつたと専門家は云つてゐる。げにその通りであらうと思ふ。今日全支を擧げて悉くペーパーばかりになつてしまつたと思へぬ位である。が事實は悉く英米に移入されてしまつたと云つてよい。そこで勢ひ外貨獲得に狂奔しなくてはならなくなつたり、又物を擔保に融通をすることを考へなくてはならなくなつたりしてゐるのである。支那は持てる國であると云ひ、埋藏資源も驚くべきものがあると云ふ。地下には唸つてゐるかも知れぬが、それは掘り出す方法も立ち、すべてが今日目の前に出て來たときの話である。繪に描かれた餅なんかでは腹がふくらまぬ。花より團子の世の中となつて來たのだ。目の前に判つきりとした

安心の出來るものを掴ませてもらはぬ限り、法幣を信用せぬのである。さらばと云つて日本の軍票を持つてゐることがわかると、蔣軍側では直ぐ漢奸扱ひされ命が亡くなるのである。

僅かに皇軍のゐる處目の光つてゐるところだけしか、日本の軍票は通用してゐない。その兩軍の對峙してゐる界から突破して向ふへ這入つて見ると、抗戰の二文字の捺された支那軍票が使はれてゐる。さもなければ法幣のみである。若しその他のものを懷中にしてゐたら極刑である恐ろしいものであるから内心日本票を手にして居たくとも、それは出來ぬのが實情であるらしい。

かやうな風で二進も三進も行かぬ處に今は追ひ詰められてゐる。されば良民たちはいくら良民であると云つても仕方がないのだ。唯黙々として耕し、出來た米は喧しく云はれぬやう蔣介石軍の方に賣るなり運ぶなりしてゐるの外、安心の行く方法がないと云ふ有様である。さうした心の内面を物語る現地の住民の言葉をきき、ひとりで味つてゐると、そこに感慨無量なるものがあるのである。現地の住民（敢へてこゝには良民と云ひたいのであるが）どもの表面立つ喜び祝つてゐる事實の半面に、その内心聊かたりとも曇りのあるやうな事があるから、一日も早く之を除去してやらねばならぬ。之が一日おけると一日蔓延する。

元來個人經濟の事にかけては徹底してゐる住民なのである。だけにその邊の事にかけて深く

深く思ひを致さねばならぬ。そこを解決してやらないでいかに立派な新政策が出来、指導とか建設とか声明の句のみ美しく並べ立て、見ても却つて効果がなく、むしろ逆効果を生ずるに至るのでないかと云ふ心配がある。支那住民の心境を察し、又その内地に生業を勵んでゐる良民たちと語り合つて見ると、さうした空気が汲みとられる。東亞に生を享くるお互はこれら良民たちの心境について、何とか解決の緒だに見付けてやると云ふ風にならなくては嘘だ。さうした同情の氣持を持つて臨むだけでも、お互の責務が認められるのでないかと思ふ。

三、物價問題に注意

どこの國だつて物價の問題くらゐ住民のあたまを痛ましめるものはない。わけてもあの通り従來物を安く生産し生活を安くあげてゐた支那の住民どもにとり、日常の物價を高くあげられると云ふことくらゐ辛いことはないだらうと思ふ。

ところが、支那在來の住民たちは元來最小限度の衣食住を營み來たり、これ以下は下げられぬと云ふミニマムの暮しに徹してゐる。さう云ふのが多い。そこへ持つて行つて法幣の下落であの通り物價が暴騰すると云ふ風である。そこになると殆んど方法が立たなくなる。法幣の値打が下れば下るほど従つて軍票の方もさがつて來るのである。だから良民の窮乏は何としても

蔽ひがたひものがある。その轉落をどうして阻止し得られようか。北滿地方チチハルあたり、昨今日本の澤庵が一本二元八十錢なりと傳へられてゐる。恐ろしい事でないか、日本人の食べて行かれるものはまだ忍ぶことが出来る。あちらの支那大陸にあつて支那住民自身の使用する日用品の値段が上げられた事、そのことがとても住民の心に深刻に銘せられて來た。物價問題がもしも唯一時的の現象なら何でもないのであるが、若しこれがさうでなく永續する可能性はあるものとするなら手温るい事では解決がつかぬ。それは支那の住民が身を切る思ひをしなくてはならぬのである。

固より支那住民の生活程度を見ると、中にはとても低く、どうかするクワンインツ(觀音土)と云ふ土塊を食べても、尙且つ平氣で生息してゐらると云ふやうな者もある。こは四川、萬縣、重慶あたりで耳にした話である。昔から天狗の麥飯と云はれたものがこれであるとか傳へられてゐる貧困なる生活を營めるものは人の想像以上のものがあると云つてよい。奥地でも入り口でもその衣食住に關する支出は昔からして節約的である。最少限度でその用を足してゐることは到底日本人の眞似の出來たことでない。それであるからこちらで推測するやうなものもなく、案外らくに切り抜けられる覺悟を持つてゐるだらうと云ふ想像もつく。そのあたりはとても弾力性がある。

元來支那部落と云ふものは隨處に物資が豊かにあるやうに噂されてゐるが、自ら親しくある
いて見るとさうあるやうには見えぬ。地方にもよりけりであるが、長江沿岸にしたつて大都城
は別としてその少しでも田舎に這入つたところは恰で淋しく、その市場などはさう豊かに物が
集つてゐない。比較的僅少なものをその身の程ほどに買ひ取り、之をそれごとく取り入れてゐる
に過ぎない。従つてその間の經濟の動きもさう大きいものでない。それが各省各地と集りま
まるものであるから、大變な數字になり、數量がたいしたものとなると云ふ譯である。事變下
にあつては敵味方ともに、良民の方もさうでない方も共に不自由をしてゐる。そこは察するに
難くないのだ。物資の流動する筋道に當つては、前線に二箇所宛も監視所がおかれ、そこに嚴
重な態度で目を光らせてゐる者がゐて、日本軍側へ流出させぬやう見張つてゐる。

どうせ支那の事だからそこには表面のこと以外に裏もあることであらう。又裏の裏があつて
それぞれ然るべく要領よろしくやつてゐることだらうと云ふ想像はつく。日本の方でもし値段
を高く買ひとつて呉れるとの事が知れたとしたら、存外品物はこちらに流れて來ることであら
うと思はれる。そこは物も相談だと云ふ風に嘯いてゐることであらう。こちらとしてもそま
で碎けて、そしてあちらの腹を見破つて事をするなら、そこにはとても話の判つた事が行はれ
るのである。

こゝで自分共將來の爲めにも篤と考へておくべきことは、新政權の勢力地域内に於ける物價
の事である。住民の生活必需品は麥粉でも、鹽でも薪炭でも豚肉でも野菜でも、さうした日用
品の相場が減法界に上騰すると彼等に不安を與へる。しかし日本人の這入つて來た爲めにとて
も商賣が生意好（サインハオ）と云つた調子に儲かつてゐるのであるなら、その間の氣持ちは
違つて來る。そこが中々實際問題としてむづかしい問題になる。實際問題として奥地の住民で
やゝ産をなせるものは、そのあたまがそこいらを去來しつゝあると云つてよろしいのである。

四、時流に乗る若き人々

新建設の輝かしい雰圍氣の全局面を見渡して見ると、そこには貨幣問題の如きむづかしいイ
キサツはあるにしろ、ともかくも瑞氣がぐんぐんと南京の空に押しよせて來てゐる。長江の春
は花鳥と共に長閑であると云へる。由來支那にはその時流に乗り身を處する道を考へることに
於て敏なる者が多いのである。時流をとやかく批判したりする無駄をやめて、それよりもその
流れを自己に有利に役立たしめようとするものゝ方が相當に多い。物價騰貴の事や所見を異に
してゐる事などオクビにも出さず、一途に唯保身そのものに懸命の努力を致してゐるものがあ
る。又その方が賢明とされて居るのだ。元來賢の字そのものゝ構成要素から云つても貝（財

貨)を手(又)にする臣と云ふ事が暗に考へられるのである。賢者とはかねを得る事に巧みな人さう云ふ役人たちを指して云つたものと云ふ解釋が出来る。時流に乗るもの又は乗らんとする者は心から時の力を支持し、之に協力をして自他共に大成完遂しようとする。尤もなわけである。又今日の場合、かくあらしめなくては嘘なのであるが、その點で大勢を作つてゆき又之を指導して行かうとするのである。この部類の人々もこゝに相當たくさんゐる。

若い人々はその自分の保身から来る獵官運動を相當熱列にやる。そこを第一義としてゐるものがある。その爲めには従來の國民政府は行き詰つてゐたから何か新しい時勢の變動を期待してゐたのである。丁度この度は待つてゐたとばかり、この時この機會に何等かの地位を掴まない事にはと思つてゐるものがあつたであらう。又必しもかゝる私事を夢みてゐた譯でもなかつたであらうが、時宛もその宿望を達成するに好機會が、到來せりと思つてゐるものもあつたであらう。打明け處、その浪に乗つてゐるものが多い。かゝる手合は理窟のつけやうなんかうでも付けらるゝのであるから、大浪に順應して然るべくニコニコ顔でいそしみ勤めてゐるのである。たくさんの若い人々のうちには天下は未だ判然とせぬ。海のものとも山のものとも判らぬのだけれども、協力をして物にせぬ事には仕方がないのだと見てゐる。この點から云ふと建設未だ成らず、同士仍つて努力せよと云つた標語によつてひた押しに押しに行くの外ない

と見て居るものが相當あることであらう。人の前には尤もらしく響く餘所行き的美聲麗句を並べて見たりもするが、腹のうちはともかく、この邊がその偽らぬ處である。又その邊で結構なのである。之を完遂の域にまで持つて行つて呉れるならそれだけでせ澤山であらう。要は誰れしも云ふ通り、支那四億の人々は實際的に手に物を握ることである。チャンとした物を掴まなくては承知せぬのである。空論を云々するもの、理想を美しく並べ立つるものよりも、今日の生活、明日の物價を満足なやうにして呉れる者について來るのである。そこを考へて若いものが努力し、同心協力をしたならば結構なのである。

五、見透しをあせるな

見透しの工合によつては人をして安心させることが出来るのである。今日の場合よく人は時局の見透しを云々する。又人に向つて見透しを聞きたがるものが多い。無理からぬ事だと思ふしかし焦慮して誰れに向つても見さかひなく、見透し見透しと云つてそれのみ焼きもするものがある。當然の事であるに違ひないが、それは單なる蟲押へと云ふに過ぎぬ。

人に見透しを聞き、その人から思ふだけの事を率直に云つてもらつたからとて、その通りになる譯のものでもない。人情はそこにあること云ふ迄もないが、しかしあせつて見透しを云々

したところで、英米もあり、さう目に見えて局面が急轉し、注射をしたあとのからだ工合の如く觀面に改つて來るものとは考へられぬ。今となつては最早や來るところに來てゐるのだ。桁を大きくとり又悠久にとり、目前の事はなるべく我慢をして考へぬことである。

汪新政權が出來たからとて平和建設の裏に、長期戦はどうしても覺悟いたさなくてはならぬのである。

そこまで行かない事には、財政と通貨の確立を期するとも難かしい。いつまでも軍票とか華興券とか、聯銀券とかのみで新政權治下の通貨が濟むべき性質の者でもない。何としたつて獨立國としての通貨が第一重視せられなくてはいかぬ。傀儡用見たやうに他から思はれないだけの、シツカリした基礎が第一出來なくては嘘だ。そこを考へて見ただけでもさうあせつてはいかぬ。あせると却つて見透しそのものが拙くなる虞れがある。むしろ此の際はどうしりと本當の腰をすえて、百年の大計確立の意味に於いて朝野官民の努力が要る。努力に統一を缺くことがあつたり、お粗末な心構へがあつたり、反對にぶち懷しのやうに見られる虞れのあることが仕出かされたりする。こは香ばしくない。どこまでもあせらず、百年の大計を胸に持つて孜孜として倦まず行くにあるのみである。恐らく重慶側では内心三百年の計を立て、行くであらう。前清朝でも三百年の後の宣統帝（皇上）蒙塵の幕に至るまでの事を見て來ると云ふと、そ

の間にとても大きい謎が含まれてゐるやうに思はれる。

今日の東亞は頗る微妙なポイントの上に立つてゐる大舞臺面であるやうな氣がしてならぬ。時局の裏を流れる券圍分は如何に見られようと評されようと、それに頓着することなく、あせらず急がず、しかし一步一步無駄のなきやう踏み固めていく事が要領である。又根本策である重慶側もとても粘りのある漢民族である。又新政權の方だつて、同じことである。向ふも粘ればこちらもそれ以上粘るの外はないのである。それを苟しくも指導の位置にあり、又自任してゐるものが一段と事實に於いてよく粘り、よく基礎を踏み堅の、そして民心の安きに付けるだけの事を事實の上にして見せなくてはいかぬのである。そこを輕視して唯條約のとりきめや、法令の續發見たやうな事ばかりいくら繰返して見たとて、それだけでは民心を新らしくする所以でないと思ふのである。

やゝもすると日本人は國內の情勢や永年の慣例からして法規のみ細かくし、法令を澤山出しさへすれば巧く民心は治つて行くものゝやうに誤解してゐる一部の人士がある。とんでもない見當ちがひである。支那は昔から法三章でもつて行ける國柄なのである。法はなくともその地方地方で安らかに生活をしてゆけばよいとする。善隣友好などはその間におのづから實現せられる。經濟提携も自然と行はれて來る。共同防共の事などは日本人が感ずるほど感じてゐない

のであるから、日本人が思つてゐるほどピンと來ぬのも國情の然らしめてゐる所だと察せられる。かゝる點をあせらず、ゆつくり教育してかゝるには百年の大計によらなくてはならぬ。痛切に感じてゐる日本人と同じ氣構へのものが相當ある。だからこちらがあせると何もかも却つて拙くなり、手違ひを生ずる心配がある。どうかすると受け太刀でゐる者があちらには多いのだから、一段そこは日本人としてあちらの人の心境を察し、その推移の工合を見て漸を追ひ、事を施すやうにするの外ないのである。あまりあせるとその眞意が呑み込んでもらへず、却つてこちらの思つてゐる事が逆にとられ、逆作用を起して來て、思はぬ不覺をとる事があるのである。よほどそこいらは四億萬の民心を打診する上に大切な事である。多血質の日本人はよく考へ大陸的の行き方をしなくてはならぬ。さう云ふ點から云つて、事變はとても大きい試練である。之が爲めにはむしろ小さい事でチヨイチヨイ失敗を重ね、やり損ひのあることも身の爲めになり、大成完遂途上月謝を拂つた譯にもなる。あまりにトン／＼拍子で行くのは百年將來の上から見て爲めにならぬ。調子に乗り過ぎるとひどくやりそこなふ。そのときは取り返しのつかぬ事態を生ずことがある。島國のものが美しい潔癖性を土臺にして、大和精神でやらうとするのであるから、大陸人の方から之を見るとその間無理があつたり、ぎこちない事があつたり、口にこそ云はね、少々變だなあと云ふ感じを起させざる事も少なくないだらうと思ふ。大

和民族たるもの初めからその邊について、思ひやり同情を以て臨まない事には、その裏に流れる無言の氣持が察せられぬであらう。

支那事讀の處理はかゝるところに大陸的な心構へと、桁ちがひの方策がなくては出來ぬものであることがわかつて來るのである。多血質と潔癖性のみから出發してゐる判斷力を用ひるだけでは、大陸の鈍重に見えてゐる事象は扱ひにくいことが悟られるのである。新政權の裏を流るゝものは臆ろげながら何であるか、そこが之によつて讀めたことだらうと思ふ。

六、心強き悟り

新政權の成りて以來、日本人の視線が南京に集められるやうになると、人は何だか武力戦の方は影の方に廻はされた感がして來たと云ふ。その實武力戦の方はこれから益々難事業となつて來たのだ。汪政權自身に兵馬の實力があるわけではなく、又對日包圍陣營もあの通りだから、一段と日本全國の力は之に向けて完遂を期しなくてはならぬ。同時に又新政權の確立充實の方面を、之から益々培ひ強化成育してゆかねばならぬのだ。今日はスタートを切つたと云ふまでであるのだから、相當結論なしに難航を覺悟しなくてはいかぬのである。

かう云ふ場合に從來日本人はいつも神力とも云ふべき歴史を超越した民族力を出して、そし

て完遂しうまく作り上げる。ところでこゝに考へ出だされるのは、ともから南京が陥落したら支那は降参するだらうと云ふ如き日本人流の日本人常識から相手を推斷してゐたに拘らず、それがその通り行かなかつた。それと云ふものは、とても深刻に日本人自身の誤算を悟つて來た優越感のみで物を判斷し獨善氣分できめ込んでゐた多くの日本人が、これに誤算を生じた事を内心判つきり悟らされるに至つた。この悟り自己反省による「支那魂の認識」だけは初めて一般のものにわかつたのである。この事實くらゐ強く日本の朝野のあたまを教育してくれたものはない。若い日本人たちも、多くは降参するくらゐに思つてゐた。ところが南京は愚か、徐州が落ちて、武漢がとられても、廣東が落ちて何の事はなかつた。この分なら重慶がたとひとられたとしても恐らく何の事もあるまいと云ふ概念を抱くに至つた。この考方は全日本に出來たのである。これは本當に事實として考へてよい見透しであり、自分どもも事變當初から口の酸ばくなるほどその事について力説し人から怪しまれたくらゐであつた。

今日となつはよい學問を日本全體がしたわけだ。大分高い月謝を拂つたものゝ、その間に得られた悟りは代償として價のある獲物である。無形の精神的のものであるが、よい事が判つたわけだ。事變後は更にあちらに行つたものがとても多いので、その地理的に廣いこと際涯なくひろい事のはつきり判つてもらへた事、これも大きい獲物の一つである。又支那の軍隊の事以

外の風物、衣食住から村落、里閭、寺觀、市場、作物とあらゆる文化生活の斷面がわかつてもらへた事である。今尙中には悪様に誤解をしてわかつたと云つてゐる徒もあるにはあるが、兎も角も大陸の實相が大體によく目撃せられてゐること、そのことは力強く思はれる次第である。現實の支那の社會にふみ入り又現實の都鄙をかくして親しく見てくれる事は、何かにつけて將來考へをめぐらす上に目當をつける上に参考となるわけだ。かうした支那に對する見聞なり體驗なりを持つものが相當澤山出來た事だけは、一つにこの事變のお蔭である。その裏にはとかく悪く印象させる言動を敢へてして、その爲め日本として損をしてゐる事も相當あるらしく、又中には香ばしくない外人どもがデマを飛ばしてゐる事は各方面の發表中にも見えてゐる通りである。がそれらはドサクサの際止むを得ぬ事とする。ともかくも相當水村山郭のあたりまでも、奥へ奥へと日本人の足跡の行き渡つた事その事だけでもよい事である。中には日本にゐるよりか支那の風土、風物、人情が氣に入つたから更によく調べた上一層の事あちらに住み込み、大陸住民としての土になるまで居りたいと云ふものも相當出て來た。現地を行脚中かゝる青年に會つたことは一再ならずである。慶ばしい事の限りである。

されば新政權の裏に流れる精神方面のものを考へて來るとき、かゝる事實を織り込んで前途を卜して見ると、そこに何物か自分の心を慰さめて呉るゝものがあるやの感じがする。かやう

な事は高所大所から見て來ると、多少とも將來光明を見出す上に何等かの手掛りともなるやうな氣がする。要はこの際國民の前に無理でない當り前の事實は事實として紹介するやうにし、國民の眞に心から腹の底から如何にもあるであらうと思はれる材料が、朝野各方面から提供せられるやうになることを期待してやまぬのである。之が又新政權の裏を流れる光明として、又その光明に力を與へるものとして數へられるのである。

事變處理と大陸生活

一、事變と支那の都鄙

家が小さいと臺所の庖丁の音まで主人の部屋に聞え、來客の耳にも手に取るやうに響いて來る。それと國じやうに國が狭いと、いさ何か事のあるときは津々浦々にまで大變なさわぎがひどき渡る。

今日事變に際しこの騒ぎに直面してゐながら、日本と支那大陸とをこゝに比較して見ると、特に事變勃發當初から支那の田舎は何事もない。自分はその時分に支那を巡歴してゐる。そのため一段しみじみとそれが感ぜられるのである。日本では今日どんな片田舎でも、驛と云ふ驛には日の丸の國旗をふりかざした萬歳の聲が叫び聲のやうに聞えてゐる。村の子供に至るまで戦時風景を演じてゐないものはないからである。又日本では今日新聞號外、ラヂオ・ニュースを聞かうとしないやうな抜け作は一人もゐない。事實田舎の小學校の先生などにしても總がかりになつていくさの話をしてゐる。生徒は歸つて家の父母に食事しながらお父さん、かうかうだ

よ、お母さんかうですよと話をしてゐる。これあるかなである。日本の国内はかくの如くして北は樺太から南は臺灣に至るまで恐らく又南洋委任統地の日本人の家庭までも、日の丸の国旗のひるがへつてゐるところすべてこれである。こゝに日本帝國としてたのもしき空氣が漲つてゐるのである。

かうした戦時風景は日本としては當り前のことであり何の不思議もない。又決して珍らしくもないのである。又かうなつてくるやうに平素からして養はれてゐるのである。

ところが支那は、昭和十二年七月七日あの蘆溝橋事件が勃發して以來、全體としてどんなひびきがあつたか。案外に、あの中支長江一帯は平氣なもの、當時何の事もなかつたのである。又その筈である。昭和六年のあの滿洲事變の始つたときですらも、長江江邊二億萬の民と云ふものはどこに風が吹くかと云はぬ許りの左團扇であつた。たゞ月を眺めながら商ひをしてゐたのである。又水牛に跨り耕農の事に従つてゐたのである。又そこにたいした騒ぎを起こさなくてはならぬやうな必要もなかつた。田舎の生活、長江江邊の經濟生活は別段脅かされる心配もなく、本當に平氣なものであつたのだ。

北支に、事が始まつたからとて神經質的に之が中南支の田舎漁家邊りまでも傳へられる筈はなく、又その必要もないのである。村と云つて見たつてとても廣い。遠くまでひろがり、ちよ

つとやそつとで隣家の門の處まで行かれたものでない。一寸向ふの家に行くにしても少なくとも十町や二十町はある。五家十家が保甲の制度として固まり存し、柳揚村の水郷を作つてゐることもあるにはあるが、しかしそこには新聞など藥にしたくも得られないのである。

村夫子か村長の處にでも出かけて見たらあるかも知れぬがこれ又容易の事でない。新聞のあるうちは見つかるものでない。ともかくもかやうにして片田舎の廣い事はお話にならぬのである。又とても遠い。山遠く水長しと云ふ言葉の通りなのである。

どこまでも孤帆遠影碧空に盡き、ただ見る長江の天際を流るゝをと云つた風のあの廣い江邊一帯の田舎を想像して見ると、よほど日本人の考へてゐるものとは違つてゐることを指すのである。

國破れて山河ありと云ふが、片田舎の人たちの見てゐる者はたしかに山河のみである。悠久な生活をしてゐるものにはむしろ都城だとか文化だとか、いくさだとか云ふものにこだはつてゐない。人は人たり、我れは我れたりである。治亂興亡など一々之を氣にしてゐては溜るものか、と云つた達觀した氣分である。まさかさう見てゐるわけでもあるまいが、しかしそれらをすべて超越して生活をなしつゞけてゐるのである。たゞホンの一部分のもの、それも都城とか港に近い處とかで騒いでゐるに過ぎぬ。とかやうに見ておいて丁度よろしいのである。それは

さうでもあらう。これまで廿五六回も王朝の亡んだことのある支那である。唐、宋、元、明、清とこの一千年のうちに五回も亡んでゐる。一々之を氣にしてゐてはたまらぬと多寡を括つてゐる。それくらゐ超越的生活をしてゐるものがどの位ゐるか判らぬ。老莊の思想に養はれてゐるものでなくとも、さうした氣分を持つものが一體何億萬人ゐることであらう。これであるからこそあのやうに目と目の間の距離のある、呑みびりした顔付きを生れながらにして持つてゐるのである。事變に反映せる大陸人について最も大事な観測はこゝの點にあるのである。これは戦争のあとの括りをつけるとき、こゝの點を特によく勘定に入れて考へてゐないと云ふと飛でもない事になるのである。

支那の人はかやうにして大陸に生れて大陸式に育てられてゐるのであるからとてもおんびりしてゐる。先祖以來それを傳へて持つてゐるのである。島國で育てられた事のない人ばかりなのであるからとても桁が大きいのである。その證據に川を一つ渡るにしても幅の五里も十里もある江流である。之をあたり前の川と見ては誤る。長江の最もひろい處は七十五哩もある。上海の入口のあの流れの潤さを見たものは海の如くひろいことがわかるであらう。されば日本人が日本で河などと思つてゐるものはあれはクリーク運河くらゐにしか當らぬのである。又平野にしたところで全日本がすぼりと五ツも六も這入つてしまふやうな本當に廣い大平野、廣野を

持つてゐる。行けども行けども果てしない大平野を持つてゐるのだ。上野の驛から汽車に乗るとすぐ翌日越後の海岸に出られると云ふのは恰きり桁がちがつてゐるのである。

この故にすべてが大きくのおんびりしてゐる。どこを風が吹くか、どこからあの大きな鳥が飛んで来たかと云ふ。空にひびくプロペラの音をつかまへて鳶か鳥の飛ぶ音としか思つてゐない、飛行機などと云つて見たところていくさの爲めのものとは思つてゐない。莊子の大鵬だくらゐにしか見てゐないのである。まあその邊だと考へてよろしい。

いま月を伴として連日連夜船頭を相手に江南の運河の旅でもつづけてゐるときは全くかうした考だけしか浮ばぬ。この外に何にも浮ばぬ、これは自分の實感から來た本當の體驗なのである。津々浦々に湧き立つてゐる日本の戦時風景と同様に見て考へるときは、どうしてもしつくり來ぬところが出来る。現に今日でも、すでに支那側はどうやら止めたのかと思ふと、又ボンボン仲休みの後に打つ。のびのびとして打つてゐるあの敵の様子にいくらか思ひ當るところがあるであらうと思ふのである。

ホンキウ（虹口）マーケットのそばを時局が始まつてから自分は幾度か通過して見た。勿論自動車でも通つてみたが又自分で様子見がてらテックツても見た。あの邊の空房の二階からボンと便衣隊から打たれたらそれきりであると云ふ心配も多少あつた。しかし自分は支那服である

いてゐたのだから打たれる事は先づあるまいと半ばは安心の氣持もしてゐたのである。

このマーケットは虹口で名所の一つであり又大上海切つて最大の代表的マーケットでもあるいつもならば朝早くから幾十萬の市民が篋を持ち、いそいそと之に出かけ聲の限りを盡して客を呼んでゐる賣り子の前に集り、勇ましい買物ぶりを見せてゐるのである。自分はマーケットの氣分はいつも氣に入つてゐるのでひまのある毎に之に遊びそしてその實況を見又雰圍氣を味つて見ることを怠りなくやつてゐる。それだけに之にあこがれがあり、時としてはその三階の賣店で「牛及弟粥」と書かれてゐる看板の文字の下に廣東人たちと椅子を並べ頼張つた事もある。一種そこには云ふに云へぬところの風趣があるのである。しかし多くの在留日本人はこゝまで登らうとせぬ。大抵は二階限りである。自分は三階の空氣とその土俗的趣味を喜ぶものであるのだ。

ところがこの事變が始まる同時にさしもの騒がしいマーケット又その勇ましい商ひぶりがパツタリ埋み火の消えたやうに靜かになつた事がある。

一人の百姓も車をひいてこゝに集まつて來ようと思つたのである。當時は田舎道が危ぶないからである。又たとひマーケットに運び來つたところでかねにもならぬ。一人の買手が寄つて來るわけなし。又虹口の路上はいつ何時爆撃空襲の厄に遭ふかも判らぬ。いつ何時どこの家

の片隅から便衣隊に打たれるかも判らぬ。買ひ物どころの騒ぎでない。命あつての物だねだとはすべての人の胸のうちに考へられてゐたところである。何と云ふ恐ろしい空氣がこのあたり一帯に漲つてゐたことであるか。この狀勢から誰れもいかに恐ろしいかと想像せられるであらう。

さればいつもなら、とても耳も聾せんばかりのあのやかましい虹口マーケットが、猫の子一匹出て來ないと云ふ淋しさを示してゐる。化け物屋敷のやうに靜かになつてゐるのである。自分分はウーソン（吳淞）路寄りのマーケットのそばを通りながら考へた。それはいつもならこの側は雞の血をたらしして鹽にとり、豆腐をやつこ切るやうな調子にたてよこに之を切り、買客に手渡してゐる雞屋の老爺を見てゐたのであるが、今はそのやうな老爺も姿を見せてゐない。又鷺（家鴨）あたりもたくさんガアガア鳴いてゐていかにもマーケットらしい氣分を呈してゐたのであるが、それも今は見られぬ。誠に死のマーケットそのものになつてしまつてゐるのである。上海の姿はこのマーケットにあるのだ。如何にも上海らしい虹口マーケットがひっそり閑としてゐるくらゐ魂の抜けた話はない。何れの日かこのマーケットが昔のやうな賑かしい殷盛ぶりに歸り活氣を呈するであらう。自分は空襲爆撃下に獨りでそのそばを歩いてゐたのでつくづく胸を打たれたのである。

二、大陸人の眞面目

時局、時局と、日本では大變な事として時局のことを云ひ立てるが支那としては例の動亂はつきもの。西に東にと逃げまどふともこれ迄に幾度かやり來たつてゐる。實に困つたわけではあるが、しかし五年に一度十年に一度と云つた風に體驗をしてゐるのである。

國柄が國柄であるだけに、その平素の家庭生活にしてもなるべく荷物を少なくして殖やさぬやうにしてゐる。例へば洗面器に食卓食器衣類それと錢袋と位牌（神位）これくらゐのものがいざといふとき荷造りをされるものである。骨董だのその他の贅澤品だの云ふものはなるべく平素から集めぬことにしてゐるものが多い。但し玉器だとか鍍金佛だとか小さくてかねになるものは心掛けのよい者は之を集めてゐる。しかしさう云ふ人はいつの世にも少ないと云はねばならぬ。

大陸に住んでゐると云ふとおのづから鷹揚に育てられてゐるわけである。山遠く水長しとおのづからのんびりした光風に培はれてゐるのである。がしかし亂世が續き政治的の變動、軍隊の移動から國內がゴタゴタして、年がら年中氣持が變になつてしまつてゐる。半面にはいかにも呑びやかに心構へが出來てゐるとしても、しかし又他の半面にはとても不安でたまらぬ。従

つてその用意が要る。秘密裏にかくしておくべきものがあると云ふ推察の氣持が常に養はれて行く。又めいめいさうしなくてはならぬ。人をたよるわけにはいかぬのである。こゝに大陸人には何としても哀れなところがある。

今日でこそ抗日の爲めのいくさでかくまでひどくやられてゐるのであるが、支那新聞には日本の事を昔の語の通り倭寇であると云ふのである。その言葉で支那の内部に對する反抗心を一段固くさせてゐる。かゝる文字を連日使用してゐるのである。一段と抗日氣分は唆られるわけであるから決して日支兩國が親密になる道程とはなり得ないのである。何たる悲しむべき現象ではないか。文字は支那のお手のものであるから何とでも云ふ、武力でやられるとそれだけ文字でもつてその仇を打ち返してゐる。

物も思ひやうとりやうである。いくらその城壁に勿用日貨の大文字が書かれてゐても、そのそばの雜貨店には平氣で味の素その他の日本品が陳列されてゐた。いくら倭寇と書かれてゐてもさうそ氣にする程の事も要らぬ。いつかは又その氣持がなだらかになる。あせつてはいかぬが借すに時をもつてすると、いつとはなしに肩の凝りのやうに自然と取れてしまふ。これには相當日本人自身の努力が要る。個人個人としての努力が要る。又相當日本人全體としての印象を改めさせることも大事な要素となるのである。事實によつて日本人は悪くめない人間であ

ると云ふ徳を積むことによつてその悪感拭ひ去らしむることが出来ると信ずる。

日本人は物を一克に思ひつめるところがある。譯のわかつたものでも一緒にして考へてしまふ癖がある。これも支那の民族性を地方地方についてよく噛みわけてゐないからであらうと思ふが、さう亂暴なものばかりはないのである。このあたまでなしに見てしまふインテリの多い事實に對して、支那の有識者の間にはどうも困つたものだ、支那の世相の内容を見わけてもらひたいと叫んでゐるものもたしかにあるのである。

事變の反映する地方民のあたまの中は上にも云ふ通り大都會の附近ばかりは一々その響きを愛けもしようがそれにしてもさうたいして日本人が神經質に感じてゐるやうな調子のもではない。浙江の田舎あたりで村外れに五人も十人もが戸一つないあけすけの共同便所にはへギセルで朝の用足しをしてゐるあの恰好を見たことのあるものは、いかに呑ん氣に天下太平に出來てゐるかが察せられるであらう。朝は早くから碧空に鳴く雲雀でも聞きつゝ、朝の用足しをしてゐるあの風情と云ふものはうらやましいくらゐである。杭州から六和塔、富陽に出かける途中の路傍にはかう云つた風景をたくさん見る。あの上海に近い處、杭州に近いところであつてもこの呑ん氣な氣分を見出すのである。これはその農村、その百姓たちは別段にいくさが自分どもの生活に影響を與へない。いくさはいくさ、自分は自分だと云ふのでやつて行けるからで

ある。これでも家庭の壯丁を賦役にとられるとか、兵隊にとられるとかしてゐないうちは、毎戸必ず三十元はその壯丁を持たない代償として納付せろなどとあびせかけられる。するとすぐそこでピンと來る。都會附近はそれがあがちである。

しかし別段さうしたひどきを受けない片田舎の僻地又湖沼の多い遠隔の地あたりの住民のところはどうと云ふ事はない。必ずしも蔣介石系でない地方だとは云はぬ。鐵道沿線から遠ざかつてゐる片田舎あたり、その他奥地の深く這入つたところあたりでは、本當に時局に對する認識などはない。そのニウスさへも傳へられてゐないところがどつさりあるのである。田舎の轎夫のかたまつてゐる轎屋の壁に、日支事變の印刷ビラでも繪入りで掲げられてあつたとしたら、よほど進んだ方の部類に這入る。それも支那兵の爲めに救恤の目的でかねでも獻せしめると云ふところから、お粗末な貼紙を見ることがある。近來の事だから救國の名でそれが行はれることもある。それくらゐのところは精々であるとおいておいたらよろしいのである。これが若し河南の奥地、鄭州の田舎の穴居部落であるとか、山西の奥や四川の奥の穴居民のところに行つたらどんな風であるか、全く想像以上のものなのである。

大陸人の眞面目と云ふものは單に上海だとか南京だとか天津廣東だとか云ふところばかりを見てゐる心持で速断するときは當らない。事變は大都城からのみ見て判断せらるべきものであ

らうが、しかし大陸人の生活の角度から見るときは必ずしも都城本位にばかり見てゐるわけにもいかぬ。何年たつてもいつも變らぬ三角形の底邊なるものが、支那の盛り上る底力になつてゐることを思はなくてはならぬ。三角形のトップの人のみを見て日本人は斷定してゐる。又推斷をしてゐる。トップはいくさの事にあたたまを惱してもゐるだらう。しかし底邊のものにはわりに平氣である。大所からの悩みはないのである。そしてこれが四億八千萬と云ふものうちで八九割を占めてゐる部類なのである。

ピルマルト以外輸血路のなくなつてゐると云ふ事が日本の新聞に見えてゐるが、この三角形の底邊にゐる住民即ち四億萬の民衆は、その生活の方はわりに困らないのである。これらの住民は實生活の上に於て、例へば舶來の化粧品一つ要求してゐるわけがなく、牙粉(齒磨)一つ欲しいと云つてゐるのでない。朝起きて顔を洗ひ口を漱ぐときは生薑の薄く刻んだのを二枚噛むくらいである。口中を涼しくしたいといふのである。さうした程度に日常生活を送つてゐるのであるから、呉服物にしたつて柄物を欲しがるのでなく、昔しながらの無地の紺である。紺青の木綿の所謂青衣これだけである。何も舶來品で身の廻りを飾らなくてはと云ふやうな者はわりにゐないのである。これが本當の田舎の生活相なのである。港を封じて困ると云ふのは上層のもの三角形のトップの人などである。四億萬の住民には殆んど没交渉だと云つてもよろし

い。されば田舎を本位にして考へると、事變のひびきなる者も今直ぐと云つた深刻なものを與へてゐるとも考へられぬ。まして砲臺を破壊したり、格納庫を焼いたりしてひどく困らせてゐる。がそれは重慶政府の痛手と云ふだけでさまで良民一般には別にどうと云ふ事でないかも知れぬ。又それを國民が殘念がつたり、一般住民が日本に對して憤激をするなど云ふこともあまり考へられてゐない。大陸住民の眞面目はむしろそこにあると云へる。

三 時局の括りに順應する民衆

事變の移り行くに従つて重慶政府側のものはともかく痛手を感じてゐる。たとひ口では平氣をよそひ太平樂を云々してゐても内心はともたまるまい。當局とか要人とか又それに直接の關係のあるものはとてもたまらぬであらうと思ふ。しかし上にも云ふ通り、それは三角形のトップにゐたものの話である。又日本人の方でもトップを相手にすべてのことを考へ又畫策してもゐるのであるからそれでよいとする。そこに徹底的にと云ふ心持も存してゐる、トップの手合は今や武力に於いて斷念せざるを得なくなつたから、あとは外交の本舞臺で、大いに燃りをかけてやらうと腹をきめてゐることであらう。又日本としても武力戦と同時に外交戦が又主要な事になることを十分覺悟して置かねばならぬ。

破竹の勢で進む間は景景もよろしいが、あとの括りとなると、手際がどうも香ばしくない傾向がある。それだけに支那側はいつもは手を行く。又大陸式にのんびりと来る。時局の括りは武力戦であくしてその外交戦にあること國民の最も關心事とするところである。ところがその括りに際しては、支那側はこれが本舞臺だと得意の腕を見せる。そして順風に帆をかけて来る。逆風にあつても之を順風のやうに直してやつて来る。こゝである。日本の保津川や富士川で舵を操つてゐるものと違ひ、あの長江の廣いところで棹してゐるものはどことなく違ふ。細かい急流とちがひ、あのびやかな濁流で幾千年やり来たつてゐるところはなかなか直ぐこなしがたいところがある。そこが武力行使後に來たる段階として日本人は國を擧げて考へ且つ練らなくてはならぬところである。

ところが大陸の住民たちの方はどうであるかと云ふに、そこに何等のゆかりも何も持たぬ手合が多いのである。つまりトップに立つてゐるもの以外のものは、さうその事變そのものに喧しい關心を持つてゐない。又事實、政府の方では抗日をモットーとしてゐたが、住民自身は、どうでもよろしいとしてゐた。商賣になるならどこの品物でも商ふ、と云ふ立前でゐた。たゞ學生だの又當局だのから喧しく云つて來るものだから、その手前から之をさしひかへ、又世間體を作り日本人に物を買らぬやうにしてゐるだけであつた。表面門を閉ぢて日本人に無關係の

やうに装ひ、裏口から米など運んで來た者もあつた。いかやうにでも順應する裏の手がある。もともと百姓だとか商人だとか云ふものは決して抗日意識に燃えてゐるものでも何でもなかつた。どうだつてよろしい。政府は政府、自分は自分だと云つてゐた。たゞうるさいとき氣をつけてゐるだけだと云つてゐた。三角形の底邊はすべてこれなのである。一般老農あたりにしたら、猶更どうでもよろしいと云つてゐる。何一つ日本に反抗してゐるところもないらしい。

されば時局の括りに一般人は恐らく何の事もあるまい。トップのものこそ喧しくいきりたち、又惱まされてゐるだけいろいろの苦肉の策もとるであらう。けれどももともと時局に割りに拘りあつてゐない先生どもは、それが仲休みになつたからとて別段騒ぐこともいらぬのである。依然として順應すべきは順應すると云ふまでである。

とかく日本では全支を擧げてと云ふ風に云つてゐるのであるが、それは上にも云ふ通り夫れを以て日本くらゐの狭い國であると思つてゐるからである。又全國民がすべて一致していきり立つてゐると見たからである。田舎の奥地の人氣なり、風物なり、又あの大陸的な歴史的氣分で出來てゐるものを少しも勘定に入れずしてそして日本の内部同様に律して考へてゐたといふことが、いかに支那の實情に通じてゐないかと暴露されたものとも考へられる。

廣い支那全土の上から云ふときは時局の浪に投じてやんやんと云つてゐるのは、都人士か要

人トップの手合かを中心とした者である。その他は桃花流水杳然として去ると詩の句でも味つてゐるやうなのが多いのである。この事は事變が進展して行けば行くほど、日本人がこの點に思ひをいたさねばならぬところである。その方面のものが四億萬からあることを聞かされるといかに支部全土のひろいものであるか、又いかに支那と云ふ國は武力はさほどでないにしても、ゆとりの偉大なるものがあるかと云ふことがわかる。此度のいくさにしても兵がいかにもどつさりゐる。一對十どころでなく一對百ものたくさんのもがある。飯の上の群蠅の如くだが、數の上で優り、又すべて廣さの上でまさり又すべてが時の上でゆつくりされると云ふところにあちらは強みを有つてゐるのである。それであるから、三角形の底邊と云ふ所謂住民側になつたら、とてもその底力と云ふが何とも云へぬのである。無言であるがしかし粘りがあり、うしろに控へてゐる歴史的の潜勢力を有してゐる。これが一つ豊年萬作と云ふ事と合したらその購買力だけだつてたいしたものになるのである。

時局の括りについてはトップにゐるものは腕に撚りをかけ、今迄の武力の上のマイナスをプラスにすべく最善の努力をなすであらう。しかしそのとき底邊にゐる民衆と云ふものは、これを支那の本當の實質的條件なのであつて、これがあひも變らぬ依然たる底力を有してゐて、そして時局の括りにゆつくり順應してまゐることであらうと思ふ。こゝに自分どもは多大の望みをかけてゐる。この大衆住民即ち三角形の底邊そのものと、永久の力ともなり友ともなり又理解ある隣人として共に俱に共存共榮を圖つてゆかねばならぬものである。

この點については日本の朝野の意見も一致してゐるべきである。たゞしかし如何にもあまりにその方面についての調べが出来てゐない。又自らそのことにあたらうと云つて嵌り込んでゐるものも少なかつた。トップのみの要人に面會に出かける日本人は多かつた。今後も尙それは續いて行くらしい。しかし民衆の心をつかみ底邊の生活相を眺め之を研究し之と手を握りあふと云ふ風に嵌まる人はどうして少ないのであるか。東亞の曙に盛り上る力は、彼等民衆の中に漲つてゐるのに、これを呼び起さないのはなぜであるか。ひとたび立ち上つた時、これが永遠不動の力となるのに、これを輕視し勝ちなのはなぜであるか。東亞の指導者を以て任ずる者の深く考へをこゝに致さねばならぬ處であると思ふ。

支那の行くべき軌道

一、時局下の支那民心

日本側の云ひ分がどうあらうと、支那にゐる支那民衆は事變後どういふ考を持つてあらうか。支那の民衆は敵と見られてゐなかつたのであるが、然し、事實上民衆は兵隊にとられ、ひどい目に遭つてゐるし、又その軍隊から逃げて歸らうとすると、督戦隊のために銃殺せらるゝと云ふ破目に陥つてゐた。いくら諦らめのよい民族であるとは云つても、此度の戦争後の各地の市民、村民たちの心事と云ふものはどんな風であるであらう。大きい従來の政治上の缺陷とか、苛斂誅求とかに氣をくさらし、之を怨みと思つてゐるものも無論あるのだが、しかし、戦争により直接惨めな状態に追ひつめられどうにもならなくなつてゐる難民の情は察するに餘りありと云ふべきである。大きく云つて見ると、支那民衆はいかなる水深火熱の苦も諦らめのよいといふ性質ですべて流して呉れる。さういふところはあつたか判らぬ。思ひきりのよい事

は實に天下一品であると云つてよ。

日本人が日本人として支那の住民の事を考へその身の上を思ひやるにしても、どうしてもそこに徹底せぬ處がある。當然のことである。たとひいくら日本側に多大の犠牲を拂ひ、大局を結ぶべく努力をしてゐるにせよ、あちらの住民はいくさの爲め忽ちその日その日の生活に窮してゐるもののあるは勿論、各省各地に親と子が、離ればなれになり、老人が可愛い孫を見失つてゐると云ふのがあり、次第に寒さを身に覺えて来る。秋の暮れ我が子はどうしてゐることやら、と呻吟してゐるものもたしかに澤山あるであらう。しかし、これをしも支那の住民はよく諦らめてしまふのである。日によつて忘れてゐるかのやうに見えることもあるのである。一家離散の経験の幾度かくり返されてゐるので、住民たちは日本人の思ふほど悲しんでゐないとも云へる。現に自分どもの知つてゐる範圍でも、日本に來てゐる華僑の子弟で、廣東にゐるもの、杭州にゐるもの、蕪湖にゐるものなど色々あるが、その家郷から絶えて音信のなきは固より事實家郷にゐたもの、同士の間でも離散のまま、それきりになり、連絡のとれないのみか、生死の程もわからぬと云ふものが少なくないやうである。不安の氣持のうちに、唯日本にゐることその事が幸福であつたので、それで僅かに我が身を安心の氣持で慰めてゐると云ふのがあちこちにゐる。

事變の勃發したとき、すぐあわて、歸國したものは、多く一家離散とか、行衛不明とかになり、却つて心配のたねとなつてゐる。むしろかうして安心して日本に残つてゐたものの方が無事であつて、生命財産に何等の不安をも感じてゐないと云ふ有りがたさを體驗してゐるのだ。そして云ふに何も事變の始まつたとき急いで支那へ歸らなくともよかつたのに、友人どもは日本が危ぶまないの、日本が信じられぬのとあわて、歸つた。それらは碌な事がなかつたのである。之に反して日本に居残つた華僑は何れも異口同音に祝福して、かやうに云つてゐるのである。中には、かりに東京から廣東の家郷に手紙をやつたものの、容易のことに先方にそれが着かぬ。中山縣に出した手紙が四ヶ月目に着いたと云ふ騒ぎ。それはその手紙の内容の吟味にひまどるからである。先日も余樹庭と云ふ華僑から、息子に當てた手紙の中にミドリと云ふ女兒の名が書かれてゐたのである。そのミドリとは先年自分に命名を頼んで來たもので、ミドリは緑の字にあたる譯なのである。國民學校一年生にも這入らうと云ふ處まで來てゐる。可愛い幼年なのである。しかし、廣東ではそのミドリの三字か日本式であるところから、その親を或は漢奸ではないであらうかと思つたものと見える。郵便局から、警察、警察から身許調べと云ふ風で、随分調べが辛辣で手厳しかつたとの事である。東京の方では笑つてゐる。それはやましい事がないからである。でも、廣東當局としては念には念を入れてゐると云ふ風である。心にや

ましき事のないものは寧ろ廣東當局の手厳しい取調べをうるさい事となし、支那の人で支那を怨んでゐるわけである。尙その戦況などについて、若しも支那の敗北してゐる事でも口にするものがゐたとすると、嚴罰に處せられるとか傳へられ、ひどく恐れを抱いてゐるのである。かりに日本に來てゐるものが、少しでも日本に同情をしたり、又自國の悪口を云つたりした事がわかると、本國からどんな手を廻されることか判らぬ。新政府に好意をむけてゐることが判つただけでも、南洋その他の華僑あたりから随分手厳しい脅迫状を寄越して來たとか。それと云ふのが、南洋方面には、皇軍の本當の心持がわかつてゐず、むしろ支那側の爲めにせんとするデマやニュウスのみしか傳へられてゐないからである。そして一にも二にも日本をわるく云ふ事のみしかしてゐない。従つて、日本の肩を持つ華僑がゐるなど怪しからぬと云ふ申分なのである。この邊に就いて日本に居残つてゐる華僑たちは少なからず迷惑を感じてゐる譯である。それだけに日本朝野のものも、さうした華僑の心情について同情もし、又何かにつけての便宜もはかつてゐるやうである。して見ると、先づ留日華僑あたりからでも、支那及び支那以外にゐる中華民國人に向つて本當の事を知らしめ、誤れる考を直し、此度の事變について正しい認識を印象づける事は大事なことである。その役割を果たさしむるやう努むべきである。同じ支那のものから、支那の民衆に傳へしむる方がどんなに効果的であるか判らぬと思ふ。

華僑連中は經濟問題、殊に利益を中心としたそれぞれ銘銘の立場について考へてゐること云ふまでもない。更に華僑以外の連中で夙に日本に來てゐるものに就いて見ると、同じ日支親善に立脚してゐることは無論であるが、文化に藝術に又學問に興味にと云つたひろい方面にわたり、實にはつきりした認識をしてゐるものもかなりある。これなどは自分どもの最も關心をもつものであつて、經濟關係から双方が唯儲ければよろしいと云ふものよりも一步を進めたものである。かゝる文化的基礎の上に立つて理解を抱き、ガツチリとやつてゐて呉れるものは日本側から云つても、相當敬意を拂ひ、悠久な握手と眞摯なる協和の心持とをもつて一段深く考へるやうにしなくてはならぬのである。

二、破壊のあとの復舊

今日支那の爲めに考へ、又日本の爲にあたまを悩ましてゐる者はどつさりある。つまるところは東洋の和平と幸福にあること云ふまでもない。それがなまぬるい意味の和平であつたり、通り一遍の幸福であつたりするのでは、とんでもない間違ひとなる。支那大陸はその天地自然の規模の大きいだけそれだけ支那の戰鬪行爲などにしても、とてもその桁が大きい。又その煩ひ勞苦にしてみたいした者である。唯新聞で活字の上に現はれたものから感ずるやうな生ま優しい

ものではない。大陸に渡つて見ると、見るもの聞くもの、感ずるものが悉く、異つてゐるのである。

支那の世相そのものを考へて見ても、とても想像の出來ぬ深刻みがある。物を純眞に考へる傾向のある日本人のあたまでは律しられぬ處がある。而もその桁が大きくして遙かに大陸を望み見て想像してゐるやうなものではない。戦後に於ける和平工作などについても、單なる純理とか日本式の常識のみとかで考へて見たところで、殆んどその全體が結果よく芽をふき出すまでには大變な時日を要する。從來日本人の常として、とかく支那を見縊つてゐた態度の未だに抜け切らぬものがあるから、その爲めそれがどこまでもつきまとひ、支那の文化工作にしても平和手段による融合の事にしても、殆んど凡てが高飛車と云ふまでではないまでも、譯なくこちらの考通り行くものやうに呑み込んでしまふものがある。本當に自信をもつてやる事であるなら、必ずそこに到達する筈でもあるだらう。ところが、眞にそこまで達せられるだけの自信は如何。又自信を持てるまでの手順材料が十分手許に出來て居るか、その邊の問題よりも自分みづから支那の實情について體驗のない爲めに、確乎たる自信の持てないであるものが多い。かうした人がやゝもすると、實際の舞臺に臨んでゐるやうである。形や位置でそこまで漕ぎつけてゐるのはよろしいとしても、實際にあたり大陸的に練れてゐない者は手ちがひを生じ

易い。實にそこに來ると恐ろしいものがあるのである。

いつも云ふ通り支那の事は最後になると腕力とか、いくさとか云ふものだけではいけなくなる。これで支那の住民に臨むなら、いつまでも武力の強いと云ふ考へが取切れない。それが目先にぶらついてゐられては、心からついて來るものでない。來ないからとて之を責めて見た處で、益々その心が離れるのみである。損をすることがあつても、それで得をすることはあり得ないと云へる。日本の土を踏んで考へてゐるときは、すべて支那の事は何でも思ふ通りならぬ事があるかと思つたり、日本人の考へに誤りのあることはない筈である云々と考へたりする。さういふ出發點からすべてが來る。誠に然りである。又問題によつてはさうまゐるものもあるのである。處が人心にからむ仕事、民心の歸向と云ふ如き精神方面の事業に至つては、さう簡單に行くものでない。北京の城壁にしても、あの城壁を前門チェンメン車站に到着したとき、自ら仰ぎ見るに至つて本當の城壁なるものがわかる。又北京紫禁城の各官殿から、天壇萬壽山あたりにしても、之を親しく自分で行つて見てこそ、始めてその偉大さが認識されると、かやうに、支那文化そのものの絶大ささに打たるものがある。長江、黄河、洞庭、三峽にしても、實際を行つて見たとき、始めて大陸の桁の大いさがわかる。それと同時にその文化の偉大さを生み出した背景の力なるものが想像されて來る。たとひその戦争にこそは勝てないにしても、

そこに侮るべからざる大きい底力の潜在してゐることがわかる。その氣持はすべての人々の胸中に強く來る。そこに面白い人間の自然の大乘的理解が湧き起つて來るのである。又將來大膽なさうとする大和民族は、それくらゐの抱容量がおのづからあつてよろしい。支那の爲めに、東亞の爲めに又、日本の爲めにあたまを悩ましてゐる人の目標はこゝにある。かうした文化の發達を遂げてゐる支那をこれから守り立て、之をうまく指導し、之を力強く育てあげて行かなくてはならぬ。茲に自責の念が勃々として胸に起るにきまつてゐる。

戦後をよくしたいと云ふ考の下に、今日現地の実際について考へて見るといくらでも容易ならぬ事のみ浮んで來る。その戦争直後の復舊と、その經濟救濟のことを考へて見るとそれだけでも、決して容易なわざでないのである。支那の要塞のところ、又軍事的の施設はしてあつたところ以外には、その慘狀を見ることが少ないとは云へ、全體に亘つて見ると相當大きな復興工事を必要とすることは云ふまでもないのである。だから、特に支那に關心を持つものは、人よりも先んじてこの憂ひをいかにして解くべきかに思ひを致さなくてはならぬのである。

四 私心のなき硬論

今から渡支を思ひ立つもの、日支兩國について心を碎いてゐるものは、ともかくも眞劍に打

かゝらないことには、結局兩國は幸福に導かれて行かないことになる。あれだけ大きい支那であるから、容易な事で動かしてまゐるとは出来ぬ。抗日と容共の事はどこまでも悪いに違ひない。之をやめさせなくてはならぬは勿論だが、他の點も大きく打まとむべきだ。引ずつて來た敵の經綸と人心の收攬ぶりについては、容易ならぬ骨折りがあつたであらう。その間に見えぬ大きいコツがあつたであらう。それに就いては靜かに研究する處が無てはならぬ。短は短とし、長は長として見てやるだけのゆとりは、日本人としてこの際として持ちたいものである。四億萬からの民衆を治めてゆくと云ふ大きい提案は、今日始めて日本人として出くはしたわけである。決して之を米風の政治ぶりに倣つたからとて、よく行くもので英ない。支那には在來の方法がある。之を棄てゝ願はず、すぐ外の方法によるのはいかかと思ふ。在來の方法によい處があるなら採るべきだ。從來のものを悉く穢らはしいと云ふ見方をするのはあまりに小さい考である。何もこゝでは蔣介石と云ふものを云ふてゐるわけではない。近い例をとつて、長所のある經綸について云ふのである。どこまでも容共抗日毎日の誤れるところは、根本的に抜き取らせなくてはならぬ。がそのどこかにあれだけの人心を引きつけ反らせないやうにして來た深い心持は汲みとるべきである。例へば、その浙江財閥と切るに切れぬゆかりをよく持續してゐた點、又新生活運動を巧みに利用して來た點、又青年を戒しむる訓辭であるとか、節儉の心

掛けをもつてよく自ら持して來た點とか、参考となる處が多少あるかも知れぬ。或はその容共抗日をした人間のあたまから出た事はすべて皆穢らしいと云ふのであるなら、それを悉く棄て日本人として更に以上より適切なる經綸大策を樹立し、どこまでも堂々と進むべきである。今日あちらの青年あたりの中には、宋代の處士横議の仲間にも比べるべきものもあるのであるから、相當手こづらせるものがあるかも知れぬ。かやうな連中をとまかくも手なづけ、之を心的方面から引寄せようとするには、骨が折れる。事容易の如くにしてさうでない。武力と法律だけの力で行けるものではない。戦後は何と云つても、文治派の徳政に待たなくてはならぬ。これはすべて輿論の一致せるところなのである。

從來支那の徳政にはいつも、文治派の柔かい政治ぶりが行はれてゐた。又それが人氣を博してもゐた。しかし、今日の情勢からするとこゝ當分は支那大陸の政治は優しいやり方のみでは收まるまい。たとひ一部の人は文治派氣分で治められるとしても、大勢を爲す主流はどこまでも、強硬論で導いて行く事となるだらうと思はれる。これは誰れも拒むことの出来ぬところである。尤もそこに無理があつてはならぬ。聊かの無理もなく、正しい政治が行はれる以上は、四億萬の住民はこれに反對のしようがないのである。在外華僑連中も之に従はなくてはならぬのだ。一般朝野の支那の人たちは、從來一度も本當に強い正しい政治と云ふものの味を味つた

とがなかつた。やゝもすると表看板は徳政であつても有りがたくない政治であつた。英米依存式の腹のない政治であつた。實際にこれこそ本當に亞細亞人の我に歸つた正しい政治であるわいと云ふやうな政治の下に、暮した事がなかつたのだ。さればこの度の事變直後こそは、さうした政治の行はれるやうに導いて行きたいものである。支那の民衆はかくの如く心得てゐても間違ひはないのであると、かやうに豫約してくれる人が出て欲しい。どこまでも強くて、正しい政治の幕にこれから這入るやうに日本人も指導し、支那の人もその考へで幕を切り落としてその幕開きをするに至ると云いやうな氣持になりたいものである。

之について一番大事なことは、日本から渡つて行く人である。あまり濡れ手に粟と云ふ類のものがどんだん渡つて行つてくれると困る。もしさうであるとすると、あちらの人心を毒することが夥しい。それといふが愛憎をつかさされるからである。又唾棄せらるゝからである。又傀儡としてあまり香ばしくもない人物が登場されることも考へものである。とかくさうした人間の問題で興がさめてしまふ。人事の問題がいつも何よりも大事なことになる。さらばと云つて一にも二にも法律、法律萬能で、まるで人間が法律と規律の金縛りの下に生きて行かなくてはならぬやうな社會にしてしまふことも困る。こゝは戒しめておかなくてはならぬことである。支那の人は容共その事よりも、何よりも法律萬能でやられることを一番きらつてゐる。法三章

だけで澤山であると昔からされてゐる連中は、人情味本位と云ふことは、その間に弊害も起るであらうが。支那の社會は皆よく世間のわかつてゐる苦勞者が多く、規則でしぼるよりも話合ひと人情づくで行くことを好む連中なのである。タテの関係で武力とか法律とかで高飛車に出られるよりも、ヨコの関係で互に話合ひ、なごやかに談笑裏に話をつけることの方が好きなのである。平和裏に茶館で話をつけ、又酒樓で仲直りすると云つた舊慣によることを喜ぶものである。この點は法科萬能の士の今後よほど心にとめて動いてもらひたいところであると思ふ。私心のあるものは支那の土地ばかりでなく、いかなる地點でも永續性がない。そはどこかに無理が在るからである。無理があるとそこに人が氣薄らぎ、人が集らなくなる。人氣くらゐはどうでもよいと云ふものもあるが、人心收攬のときは、これか支那では大事な要素となる。これも作爲的の人氣ではつまらない。自然による正しい人氣でなくてはならぬ。自ら求むるところのない徳望のあつて、そして腹のしつかりした正しい政治を行ふもの、之が戦後の支那にとつて一番大事な經綸家でなくてはならぬ。この點から云つて香ばしくもない人間の渡支は、此の際大局の上からどこまでも戒しむべき事であると思ふ。つらつら思ふに、今日大支那の軌道はこゝの處をよほどよく考へて、東洋の平和と文化工作の樹立に思ひをいたさなくてはならぬのである。之を誤つたならば、取り返しがつかないことになる。折角皇軍を動かし、未曾有の

偉業を大陸に樹立せんとする目的のためには、我が全日本の國民にこれだけの覺悟がなくては嘘だと考へる。又支那の民衆自體にあつても、之をわきまへぬわけはない。支那朝野の人々が幸福になるのも、不幸になるのも一つに掛つてこの一點にあると云ふ氣がする。こゝに支那側の方からも意見のあるものはよろしく此の際どしどしと出してお互ひ十分に練つておきたいものと思ふのである。

正しくて強い考の下に支那の政治をガツチリと行はうとするには、上にも云ふ通りその人に徳望が備つてゐなくてはいかぬ。無論實力が十分背景にあることを必要とすること云ふまでもないのであるが、唯單に強く正しいと云ふだけでは、支那ではそれですぐ効果があがると云ふわけにいかぬかも知れぬ。理論的にはそれで宜しいのであるが、實際の支那の民衆はそれですぐ右に向け、左に向けと云つても動かうとせぬかも知れぬ。

然らば、その處はどうする。それは支那常識を多分に持つたものが思ひやりと、温かい氣分でいつも接してやると云ふ、情の方面の融け合つてゐるといふ事實を顧慮してゐることが大事なことである。とかく法律とか行刑とか云ふと冷めたい氣分で之を抑付けようとする人が多い。支那の人は理窟や規則で心から動くものではない。食らはすに利を以つてす、と昔から云はれてゐるが、それは小人どもについての話である。利も利であるが、更に人心を掴み情をもつ

て思ひやりから動かす方が永續きがする。それには圓滿な徳望を一方に持つてゐることだ。それでなかつたならば、何事も達成せられるものでない。唯ガサガサ騒ぎ廻つてゐるだけのものは、事務を遂行する上に必要なのである。がしかし、心あるものはかゝるガサガサ時代には世間に出て來ぬ。顔を出さうとせぬ。ちゃんと軌道に政治が乗つた頃ゆつくり出かけて來るのである。こゝは支那の世相から見てもさうあるべきである。されば經綸のあるものは、あまりこの際あせり氣味になり、急いではならぬ。先づよほど圓滿な常識たつぷりの人物が出て政治の常道を軌道に乗せてしまふことである。こゝに軌道といふのは東亞の人心を軌道に乗せさせることであらうである。

第三編 起ち上る前夜

支那の大衆庶民は事變があるに拘らず、いつでも生活上抜かりのない丈の用意が出来てゐる。食ふ爲めには何時でも困らぬだけの心構へが出来てゐるのである。その命より大事に抱へてゐた貨幣の價值が下つたり、信頼してゐた政府が姿を消して遠くへ都落ちしたり、折角の査公が泥棒とぐるになつて見たり、散々な目に遭はされてゐる。すると住民個人個人は生命財産防衛のため人など當てになるものでなく、自分は自分の爲めにいつ何時でも起たなくてはならぬとの覺悟を深めさせられるのみである。

されば大陸にゐる支那の良民は、昔から氣の毒にも銘々が一國家をなしてゐる氣構へである。そして何時なりとも、信頼すべき政治の敷かれるならば、起ち上つて協力する用意が出来てゐる。唯こゝに大きな問題がある。

それは、今度の建設は支那一國の建設でないといふことである。東亞永遠の建設を目ざして起ち上らねばならぬといふ事實である。これは日本と中國に課せられた有史以來の責任である。

これを遂行するには諸々の難關がある。理窟でなくて實行である。而もこの輝かしい礎石となるべき幾多の事實が生れつゝある。左にそのほゞ笑ましき事柄を拾つてみる。

支那難民區の樂土

一、難民の歸還

支那各地を巡歴して見ると、この事變が始まつて以來「難民區」なる語があちこちで耳に入る。親しく中支の旅で都鄙各方面を訪ね、途上、その所謂難民區と云はれる所に踏入つて見る。城内の一部、殊に場末の方に或る地區が劃され、之を呼んでかく云つてゐる處もある。又城外の小川の先の方のゴミゴミした處之を稱して難民區と云つてゐるところもある。この度自分分は上海城内南市方面の難民區、江西、南昌の難民區、湖北武昌の難民區と云つた風に、歴訪地の難民區は努めて之に立入り、親しく時局下の細民生活の實相を窺つて見たのである。

事變が始まつてから都城の市民でその危険を感じ、逸早く荷物をまとめ家族を引つれ田舎の方へと避難をしたものが相當ある。又蘇州あたりのやうにその少しも危険を感じず、依然城内生活を安らかに続け送つてゐると云つたやうな處もかなりあり、一樣に云ふわけにはいかぬが、しかしこの度は概して生命財産の危険を感じたものが多かつた爲め、實際上に群衆心理に

影響せられ、その住み慣れた我が家をあとに他へ避難し去つたものが少なくなかつた。けれども交戦四五年にもなつて見ると、その地方地方の治安が恢復に向つて来て、新秩序の建て直すと云ふことが確かなニユースとして耳に這入る。そこで永年親しくしてゐた友人どものうちには、思ひ切つて歸還しようとするものがある。難民區が設定せられる。安心して還れとの布告達示も續々公けにされると云ふ段取りにもなる。日本人から云ふのでは信じられぬと噂されてゐるが、中國人自身がもうよろしからうと云ひ始めるとそれがよくきける。有力な信賴すべき者までもがかく歸還した。そこへ國都さへも還都の盛典を舉行したと云ふ事になつた。そこまで來ると人氣が次第に本格的に擡頭して來る。相當破壊された街衢の近くにはずらりと門戸の閉鎖されたち計りが續いてゐたのであるが、それが戒嚴令下から開放され、難民區として定められることになり、とそこへ五人歸つて來る。十人歸つて來ると云つた風に、いつとなく聞き傳へたものが多少身の廻りの物くらゐを抱へて歸宅する。そのやうな調子で一時死の町に見られてゐた上海城内は、湖心亭のそばあたり又南昌の場末あたりでも勢ひづいて來て、どうやら毎戸店を開くやうになり、人影の出入が見え始める。ささやかな茶館に客の茶を啜つてゐる小景が指さされるに至つた。かうして場末の方ばかりでなく、中心目抜きに近い處も、次第に歸還者が自發的に多くなつた。これは當然の事ながら喜ばしいことである。

『黎明は先づ難民區から』と云はれる事になるのであらう。この難民區こそは既に早くから開かれた處がある。例の宣撫班が盛に活躍して、救恤愛撫の事につとめてゐたのを始めとして、西人側でも宗教方面の連中は相手よく盡力をして呉れたと聞いてゐる。溺るゝものは藪でも摺むの譬へに洩れず、さうした場合の慈善事業と云ふものはたしかに天の慈雨と云つた氣持のするものである。これは人情の機微としてさう受取れる。しかし又人によつては別の事を云つてゐる。

どうせ貰ふ事のみ商賣にしてゐる手合共であるから、いくら之に日本からお粥を與へても、白米を持つて行つてやつても有りがたいと感謝の念で貰つて呉るゝものはないだらう云々。極端に評してゐるものはそれはドブの中に投入するものと同じことなのだよなど、云ふ。効果を當てにしてやるとすると正にその通りなのであるかも知れぬ。乞食を呼び止めてうちに入れてやり風呂に入れて新衣を着せてやり、そして食事を與へ仕事をさせてみたりする。けれども物の二三日も立つと、挨拶の辭一つ述べることもしないで、無斷でころもがへしたのを好機に飄々乎として家出をしてしまふ。かう云ふ例は、上海北四川路底、内山完造君からもたしかに體驗談をきいた事がある。

ところで難民區の話に戻るが、苟しくも難民區の話に同情をし心から解かつてゐるものは、

一段現地の様子をつぶさに見て知つてゐて呉れなくてはならぬ。さうでない事には何にもならぬ空論や、清潔本位の見方から物を論ずるのでは難民區の實際にピッタリ合はぬ。あの煉瓦の落ち重なり又爆撃火災に禍されて見渡す限りの焼野原と同様になつてゐる上海市附近の光景や、又半淞園（高麗額）の門の内外だけでも見た事のあるものは涙なくしては見て居られぬのである。王一亭翁の舊址にしても今は何一つ遺つてゐるものがない。そのためあの哀れな光景を見たものは城内の恢復が容易ならぬものであることだけはわかる。人は難民區難民區と難民區呼ばはりをしてゐるが、いくらしてもその實際的な新建設直しの第一歩は先づ人心、先づ物資、先づかね、先づ人手と云つた感じを痛切に覺ゆるのである。難民區の曙光は今はどうやら見られるところに來た。

二、難民の生活復興

難民の生活がどんな状態であるか。

難民區の路傍は云ふまでもなくとてもきたない、戦闘變動のあつたあとであるからきたない。下水などもそのままやり放しになつてゐる家が多い。衛生の事は喧しく目を配つてゐるのであらう。けれども手が届かぬのである。しかし難民連中は永年それに慣らされてゐるから、

さう苦にもしてゐないらしい。又身體にしろたしかに抵抗力があるので、何でも平氣で突破して行ける。それは生きる上に眞の底力を潜在せしめてゐる爲めである。いくら不衛生の状態であらうが、又警察力が届いてゐなからうが、わりに無頓着なのである。保甲氣分で町内のもの同志がその立て直し方法をとる。そして銘々従事してゐる生業を見てゐると、やつとそこへ戻つて來たばかりで何の緒に着いてゐるわけでもない。唯路上にささやかな露天商賣を營んで豆本を並べたり、腹わた臍物の煮物店を出したり、薄暗い小店に饅頭をふかし列べてゐたり、又事變前の賣れ残りの僅かの雜貨呉服ものを並べたりしてゐると云ふ風である。そのうちでもお粥店が一等客を呼んでゐる。それはその筈である。難民めいめいの懷を狙つて見たところでもくも持ち合せのあるわけでないが、それにしても商ひは牛の涎れと云ふのであるのか、小さく小堅くやつてゐるのである。今のところまだたいした兩替屋（錢舖）が開店をするに至つてもゐないが、そのうちに軍票法幣の小錢の取扱ひくらゐは始まることとなるであらう。

以前よく行つた湖心亭の茶館を訪ぬ樓上に昇つて見たが全くガランとしてゐて化物屋敷然としてゐる。八仙卓や椅子がもとのまゝ何十脚と焼かれず又壊はされず奪略もされずにあるだけが、不思議なくらゐである。以前壁に掲げられゐた扁額とか對聯とか云ふものが大半なくなり唯安ッぽいのが淋しく掛かり物の衰れを物語つてゐる。

あの人気を集めにゐた湖畔の小鳥屋は今一つとして店を開いてもゐない。あれほど人の黒山のやうにたかつてゐた鳥籠の陳列など云ふものは全く思ひ出が深いのである。ひとり「南翔饅頭」を賣る店のみは湖心に臨み古い壁の文字がなつかしく客を呼んでゐるやうである。店頭にはいくらの出来あひ物も出されてゐない。立働く人の影も二三人しか見えぬと云ふ風なのである。

しかし物は考へやうである。城内の支那街に隣接する佛界なり、又こちらの共同租界なりに來て、あの繁榮ぶりを見て來ると、城内もいざ景氣が立直つたとなつたら瞬くうちによくなるのではないか。只今の處南市も高昌廟（カオチャンミヤオ）の全體も、あの通り修羅場のあと見たやうになつてゐる。今やあの黄浦江の開放も實現せられるに至つたのであるから早晚よくなるには極まつてゐる。新市政府方面の新らしい計畫や恒産會社の頼まれてやつてゐるあの尨大な地域を物にして行かうとする日本人の仕事ぶりに比べたならば難民區に見る難民大衆の方は遙かに實現力が偉大である。又粘りもあるやうに直感せられるのである。ともかく元の古巢を立直して物にして行かうとする連中なのであるから、その恢復ぶりは相當速く進むことであらうと察せられる。

支那の人々の行き方はこの復興の事に限らず何でもその住民自分自らが本氣になつてやつて

ゐる。又懸命で努力をしてゐる。日夜苦心をしるてゐる。決してサラリメン氣分で、上からの命令とか當局の指しがねとか、又何とかの低利資金を當てにして取りかゝるとか云ふものとは違ふ。無駄な計算を立てず、そして冗費を戒め、而も孜々營々としてやつて行く。

三、南昌場末の市場

話は飛ぶが江西省の南昌に行つて見ると、そこはさすが蔣介石が新生活運動の中心地としてゐた重地であるだけ、四方に通ずる公路が完全してゐる。又百花洲の蔣介石行營大本營あと、今は焼失してゐても相當立派なものである。又飛行場も東洋一と稱せられるほど見事な大規模のものがある。城内中山路あたりの目抜本通りは堂々とした大厦高樓何櫛比してゐる。何れも實に素晴らしいものである。南昌ホテルま萬壽宮、佑民寺あたりの大建造物を見に行つてもそれぞれ相當なものであることがわかる。一日場末の難民區へ案内されるがまゝに出掛け、存分あちこちの茶館であるとか、魚市場であるとか、古玩店であるとかいふ處へ出入して見た。場末の街外れにしては、きれいなところであることが判るのである。

自分は之がその難民區にきめられて間もない時分（昭和十五年三月初）に行つたのであるが既にその茶館あたりには大分老爺や村の人らしいのが來て、水煙袋を手にし、卓を圍み閑談